

山城廃寺発掘調査概要

—府営ため池等整備事業「山城新池地区」に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

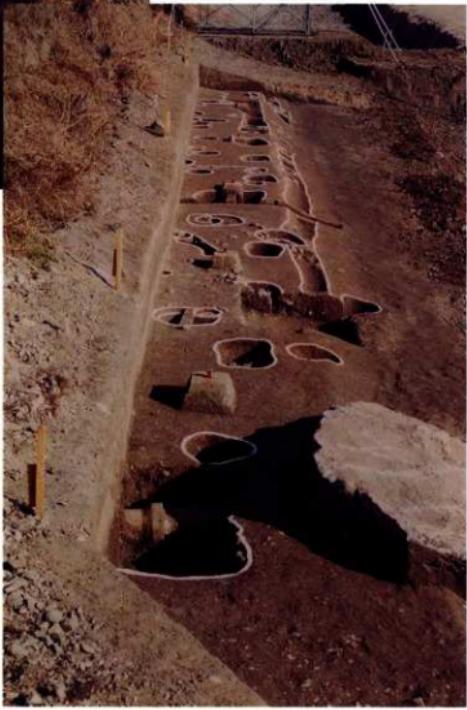
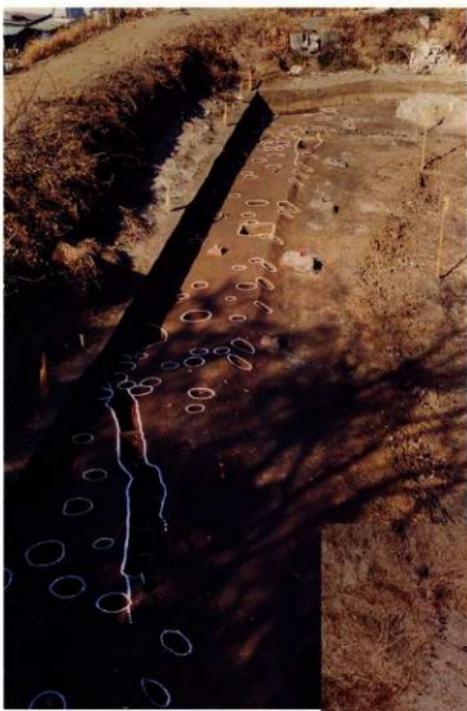
『山城廃寺発掘調査概要』 正誤表

頁 行 誤 正

カラー図版 2	下段	4 区 第 4 面全景(北から)	→	4 区 第 2 面全景(北から)
本文目次		第 2 章 位置と環境 … 3	→	第 2 章 位置と環境 … 6
図版目次	図版 12	d. 第 2 面拡張部全景(東から)	→	d. 第 2 面張出部全景(東から)
P.17	25 行目	10. 黒褐色+暗褐色砂け混じり土	→	10. 黒褐色+暗褐色砂け混じり土
P.20	1 行目	図版 5・6・7	→	図版 5・6
P.25	28 行目	平成 19 年度の試掘調査	→	平成 18 年度の試掘調査
P.31	25 行目	(津 234・235・259・300 など)	→	(津 233・234・235・299 など)
P.32	17 行目	(P392・390・389・381・364)	→	(P392・390・389・387・364)
P.39	2 行目	(P263・251・239)	→	(P263・251・237)
P.41	10 行目	(第 24 図、表 7、カラー図版 2・17)	→	(第 24 図、表 7、図版 10)
P.41	16 行目	3 - ①の西側部が P388 - P491、	→	3 - ①の西側部が P388 - P484、
P.41	17 行目	P388 - P491 は、	→	P388 - P484 は、
P.42	1 行目	(第 24 図、表 7、カラー図版 2・図版 10・17)	→	(第 24 図、表 7、図版 10)

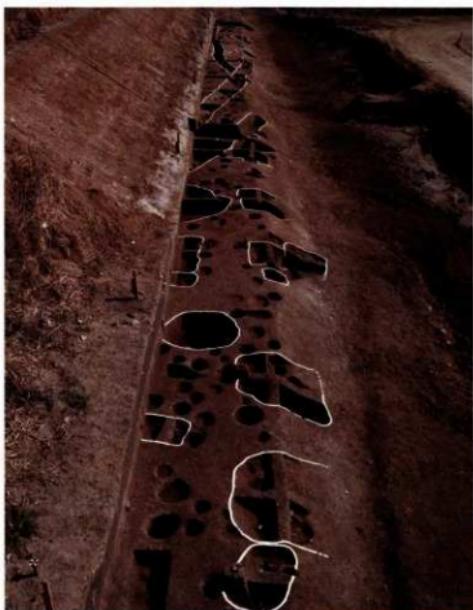
P.50	28行目	池を築造する際に直状に旧地方面を	→	池を築造する際に直状に旧地表面を
P.54	10行目	掘立柱建物及び櫛列なる柱穴列は、	→	掘立柱建物及び櫛列となる柱穴列は、
P.54	10行目	表7に示すとおりである。	→	表8に示すとおりである。
P.54	22行目	柱穴は一辺約2.0×3.0mの	→	柱穴は一辺約0.6×0.7mの
P.54	27行目	柱穴の検出径は1.0~2.0mの	→	柱穴の検出径は0.25~0.4mの
P.54	32行目	柱穴は一辺約2.0×3.0mの	→	柱穴は一辺約0.3×0.5mの
P.55	3行目	桁行2間、梁間2間の建物	→	桁行2間、梁間1間の建物
P.58	22行目	下層に代大小の石・土がが多く入る。	→	下層に大小の石・土が多く入る。
P.58	30行目	土坑524は一辺約2.0	→	土坑542は一辺約2.0
P.60	8行目	サヌカイト剥片(183~166)、	→	サヌカイト剥片(183~186)、
P.69	6行目	複弁6葉蓮華文軒丸瓦(247~261)	→	複弁6葉蓮華文軒丸瓦(257~261)
P.70	5行目	さらの地元・地域の	→	さらに地元・地域の
P.75	28行目	以後摂津国住吉群(現在の	→	以後摂津国住吉郡(現在の
P.90	10行目	概ねIV時期の建物群が確認	→	概ねIV時期の建物群を確認
報告書抄録	(表中)	調査面積 780 m ² 270 m ²	→	調査面積 760 m ² 450 m ²

1区 第2面全景(南から)

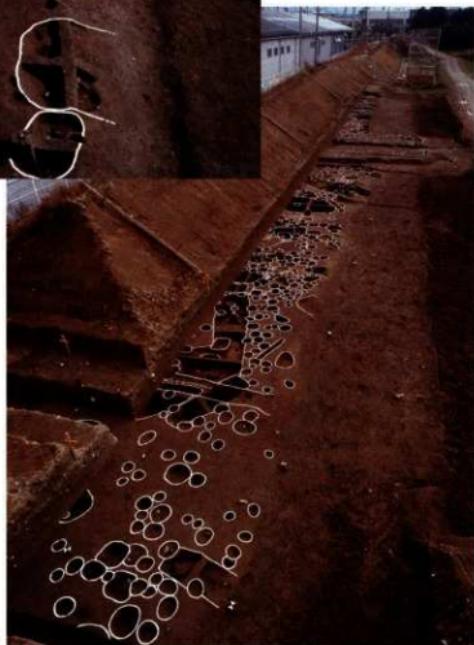


2区 第2面全景(西から)

3区 第3面全景(西から)

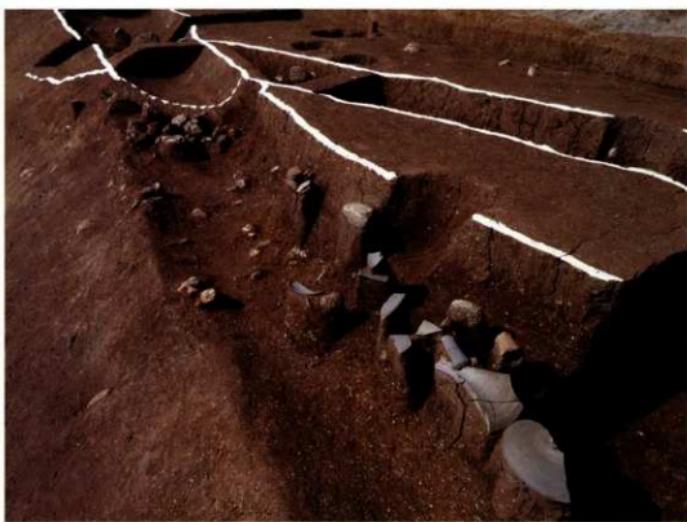


4区 第4面全景(北から)





3区 井戸477遺物出土状況



3区 溝467遺物出土状況（東から）



降幡神社



礎石2
(降幡神社近接地)



礎石1
(ぶくぶくドーム内)

はじめに

山城廃寺は、大阪府の東南部、南河内郡河南町大字山城に所在する寺院跡及び弥生時代から中世に至る集落跡です。遺跡の周辺は、東側に二上山から金剛葛城山系に至る山並みを仰ぎ、都市化が進む大阪府下にあってもまだ田園風景の広がる、起伏に富んだ古くからの地形が良く残されているところです。

大阪府教育委員会では、南河内郡河南町山城地区の府営ため池等整備事業「山城新池地区」に先立ち、平成19年度から平成20年度に山城廃寺の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。その結果、古墳時代後期頃の溝、奈良時代から平安時代頃の建物の柱穴や井戸などの遺構を多数検出しました。また下層からは溝や流路を検出し、古墳時代以前の旧地形が起伏に富んでいたことが判りました。

これまで山城廃寺については、白鳳期の瓦片の採集や建物の礎石の発見などがあり、古代の寺院跡として周知されていますが、まだまだ実態が不明瞭な遺跡でした。今回の調査で、推定される寺城の南辺に古代の建物群が存在していたことが明らかとなりました。山城廃寺に関連する建物である可能性がうかがえます。今回の調査成果は、この地域の歴史的な背景を解明していく上で、ひとつの貴重な資料になるものと思われます。

調査の実施にあたっては、地元の方々、関係機関の皆様に多大なご理解とご協力を頂きました。深く感謝するとともに、今後とも文化財保護行政に対して一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 野口 雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼により、府営ため池等整備事業「山城新池地区」に伴い、平成19年度、平成20年度に実施した大阪府南河内郡河南町大字山城所在、山城廃寺の発掘調査（07043・08016）概要報告書である。
2. 発掘調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査杉本清美を担当者とし、平成19年11月～平成20年3月、平成20年10月～平成21年1月に実施した。遺物整理は、調査管理グループ主査宮野淳一・同三宅正浩・副主査藤田道子を担当者とし、平成19年度から平成21年度に実施した。
3. 航空測量は、平成19年度を（株）航空撮影センター、平成20年度を（株）GIS関西に委託して実施した。撮影フィルムは各受託会社において保管している。
4. 本書に掲載した遺物写真及び遺構の一部写真撮影については、有限会社河南写真工房に委託して実施した。
5. 自然科学分析については、平成19年度の製塙土器の胎土分析、平成20年度の珪藻・花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。成果は、第5章第1節及び第2節に掲載している。
6. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書に掲載した採集瓦資料については、瓦の所蔵者である三嶋家、岡田家ならびに岡田家所蔵瓦の寄託先である太子町立竹内街道歴史資料館には、多大なご協力、ご教示をいただいた。記して感謝いたします。
8. 碓石資料については、土地所有者ならびに保管している河南町教育委員会にご協力をいたしました。記して感謝いたします。
9. 府営ため池等整備事業「山城新池地区」に伴う発掘調査・遺物整理及び本書作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。

10. 発掘調査・遺物整理及び本書作成に当たっては、下記の方々をはじめ関係機関から貴重な助言・協力をいただいた。記して感謝いたします。
赤井毅彦・池田貴則・鍋島隆宏・中辻 直・西山昌孝・市本芳三・積山洋・菅原正明・上野勝巳・堀江門也・藤澤真依
河南町教育委員会・ぶくぶくドーム・太子町立竹内街道歴史資料館・河南町立石川小学校
(敬称略・順不同)
11. 本書の執筆・編集は、杉本が行なった。
12. 本概要報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は1,946円である。

凡　　例

1. 本文・挿図に用いた標高は東京湾平均海水面（T.P. 値）を示す。また、座標値は世界測地系平面直角座標（第VI系）によるもので、方位は座標北を示す。
2. 土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版土色帖』日本色彩研究所 1992年版に準拠した。
3. 遺構番号は、調査年度ごとに遺構の検出順に通し番号を付けた。遺構の種類は、概要報告書作成時に遺構番号の前に新たに付与した。
4. 遺物番号は、挿図と写真図版で一致する。

本文目次

序文

凡例

目次

第1章	調査に至る経過	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	調査の方法	3
第2章	位置と環境	3
第1節	地理的環境	6
第2節	歴史的環境	8
第3節	これまでの調査	11
第3章	調査の成果	13
第1節	試掘調査（平成18年度・平成19年度）	13
第2節	基本層序	16
第3節	平成19年度の調査	18
1.	1区の調査	18
2.	2区の調査	23
3.	3区の調査	31
第4節	平成20年度の調査	50
1.	4区の調査	50
第5節	小結	63
第4章	調査地周辺で採集された遺物	66
第1節	瓦	66
第2節	礎石	73
第3節	弥生土器	77
第5章	自然科学分析	80
第1節	製塙土器の胎土分析	80
第2節	花粉・珪藻分析	88
第6章	まとめ	90
掲載遺物対照表		93
抄録		
付図		

挿 図 目 次

第1図 調査位置図	2	第25図 3区第3面井戸477平面・断面図	45
第2図 調査区位置図	3	第26図 3区第3面井戸477出土遺物	45
第3図 地区割り図	4	第27図 3区第3面溝467他出土遺物	46
第4図 周辺の遺跡	7	第28図 3区最終面遺構平面・断面図	47
第5図 調査地周辺図	9	第29図 3区出土遺物(1)	48
第6図 試掘調査位置図	13	第30図 3区出土遺物(2)	48
第7図 平成18年度試掘調査出土遺物	15	第31図 4区遺構平面図	51
第8図 基本層序柱状図	16	第32図 4区第2面遺構平面・断面図(1)	52
第9図 1区・2区第1面平面図	18	第33図 4区第2面遺構平面・断面図(2)	53
第10図 1区第2面遺構平面・断面図	19	第34図 4区第3面遺構平面・断面図	57
第11図 1区出土遺物	22	第35図 4区出土遺物	59
第12図 2区第2面遺構平面・断面図	24	第36図 出土遺物(石器・石製品)	59
第13図 2区第2面出土遺物	26	第37図 出土遺物(製塙土器)	61
第14図 2区第3面遺構平面・断面図	28	第38図 建物・柱穴列配置図	64
第15図 2区第3面出土遺物	30	第39図 三嶋家所蔵瓦(1)	66
第16図 2区出土遺物	30	第40図 三嶋家所蔵瓦(2)	67
第17図 3区第1～3面遺構平面図	33	第41図 三嶋家所蔵瓦(3)	68
第18図 3区第2面平面図	34	第42図 岡田家所蔵瓦	70
第19図 3区第2面遺構平面・断面図(1)	35	第43図 近つ飛鳥博物館所蔵瓦	70
第20図 3区第2面遺構平面・断面図(2)	36	第44図 降幡神社周辺図(寺域推定図)	73
第21図 3区第2面遺構平面・断面図(3)	37	第45図 碕石実測図	74
第22図 3区第2面出土遺物(1)	40	第46図 既調査出土遺物(弥生土器)	78
第23図 3区第2面出土遺物(2)	40	第47図 大阪府HP掲載記事	91
第24図 3区第3面遺構平面・断面図	43		

付図1 遺構配置図(第2面)

付図2 建物・柱穴列全配置図

表 目 次

表1 既往の調査一覧表	12	表7 3区第3面建物柱穴一覧表	42
表2 試掘調査地一覧表	14	表8 4区建物・柱穴列一覧表	55
表3 1区第2面建物・柱穴列一覧表	20	表9 採取瓦一覧表	71
表4 2区第2面建物・柱穴列一覧表	25	表10 碕石計測表	74
表5 2区第3面建物・柱穴列一覧表	27	表11 掲載遺物対照表	93
表6 3区第2面建物・柱穴列一覧表	39		

図版目次

- カラー図版1 1区第2面全景(南から) 2区第2面全景(西から)
カラー図版2 3区第3面全景(西から) 4区第2面全景(北から)
カラー図版3 3区井戸477遺物出土状況 3区溝467遺物出土状況(東から)
カラー図版4 降幡神社 磐石2(降幡神社近接地) 磐石1(ぶくぶくドーム内)
図版表紙 1区・2区・3区全景(航空写真)
- 図版1 平成18年度試掘調査 a. 山城新池北堤調査地点 b. 調査区1(北壁断面)
c. 調査区2(西壁断面) d. 調査区3(北壁断面) e. 調査区4(全景)
f. 調査区4柱穴検出状況 g. 調査区4(西壁断面) h. 調査区4(東壁断面)
- 図版2 試掘調査出土遺物 a. サヌカイト製翼状剥片石核 b. 平瓦(凸面) c. 平瓦(凹面)
- 図版3 平成19年度試掘調査 a. 試-1(東壁断面) b. 試-2(東壁断面) c. 試-3(東壁断面)
d. 試-4(東壁断面) e. 試-5(北壁断面) f. 山城新池(北から) g. 山城新池(東から)
- 図版4 調査区壁断面 a. 1区西壁断面 b. 2区北壁断面 c. 3区北壁断面
- 図版5 1区 a. 第2面全景(北から) b. 第2面柱穴列(南から)
c. P4遺物出土状況 d. P39遺物出土状況
- 図版6 1区・2区 a. 1区第1面溝(西から)
b. 2区第2面柱穴列(北から) c. 2区第2面柱穴列(西から)
- 図版7 2区 a. 第2面全景(東から) b. 第3面全景(東から)
c. P135遺物出土状況(北から) d. P182検出状況(西から)
- 図版8 3区 a. 第1面溝検出状況(東から) b. 第1面溝検出状況(北から)
c. 第2面全景(西から) d. 第2面全景(東から)
- 図版9 3区 a. 第2面航空写真(西) b. 第2面航空写真(東)
c. P392検出状況 d. P389検出状況
e. P251検出状況 f. 北壁断面(P445)
- 図版10 3区 a. 第3面全景(東から) b. P281検出状況(南から)
c. 溝467検出状況(東から) d. 溝467遺物出土状況
e. 溝465断面(西から)
- 図版11 3区 a. 井戸477検出状況(北から) b. 井戸507検出状況(南から)
c. 溝519検出状況(西から)
- 図版12 4区 a. 北壁断面(南から) b. 東壁断面(西から)
c. 第1面溝174検出状況(西から)
d. 第2面拡張部全景(東から) e. 第2面全景(南から)
- 図版13 4区 a. 4区全景航空写真(北) b. 4区全景航空写真(南)
c. 第3面遺構検出状況 d. P437遺物出土状況 e. 調査区中央部ハガネ部断面
f. 張出部ハガネ部断面
- 図版14 1区出土遺物 a. P4、P39 b. P39 c. 包含層
- 図版15 2区出土遺物 a. P135 b. 柱穴、溝ほか c. 建物柱穴、柱穴、溝ほか
d. 包含層

- 図版 16 3区出土遺物 a. 溝、柱穴、井戸ほか
- 図版 17 3区出土遺物 a. 建物柱穴 b. 井戸 477 c. 井戸 477
- 図版 18 3区出土遺物 a. 溝 467、溝 465 b. 包含層
- 図版 19 4区出土遺物 a. P175 b. 包含層 c. 柱穴、溝、包含層 d. 柱穴、包含層
- 図版 20 出土遺物（窓底部・他） a. 弥生土器窓底部 b. ふいご羽口ほか c. 石製品
- 図版 21 出土遺物（石製品・他） a. 白玉、石鎌、刀器、剥片 b. サスカイト製石器、刃器、剥片
- 図版 22 出土遺物（製塙土器・弥生土器） a. 製塙土器 b. 壺 c. 水差し型土器
- 図版 23 出土遺物（弥生土器） a. 壺 b. 高杯、鉢ほか
- 図版 24 瓦 a. 三嶋家所蔵瓦（軒丸瓦） b. 三嶋家所蔵瓦（軒丸瓦）
- 図版 25 瓦 a. 三嶋家所蔵瓦（軒平瓦） b. 三嶋家所蔵瓦（軒平瓦）
- 図版 26 瓦 a. 三嶋家所蔵瓦（軒丸瓦） b. 三嶋家所蔵瓦（平・丸瓦）
- 図版 27 瓦 a. 地つ飛鳥博物館所蔵瓦 b. 岡田家所蔵瓦（瓦当面） c. 岡田家所蔵瓦（裏面）
- 図版 28 製塙土器胎土分析資料 a. 試掘調査出土製塙土器 b. 試掘調査出土製塙土器
c. 平石古墳群出土製塙土器
- 図版 29 降幡神社と礎石 a. 降幡神社（遠景） b. 稕石 2（神社近接地）
c. 稕石 2 と周辺の石 d. 稕石 1（ぶくぶくドーム内） e. 稕石 1 側面
f. 板状石（ぶくぶくドーム内） g. 稕石 1 と板状石
- 図版 30 出張教室
- 図版 31 製塙土器胎土分析
- 図版 32 製塙土器胎土分析
- 図版 33 製塙土器胎土分析
- 図版 34 製塙土器胎土分析
- 図版 35 花粉・珪藻分析
- 図版 36 花粉・珪藻分析

第1章 調査に至る経過

第1節 調査の経緯と経過（第1図）

山城廃寺の調査は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が大阪府環境農林水産部から依頼を受け、大阪府南河内郡河南町山城の山城新池において平成18年度に試掘調査、平成19年～20年度に発掘調査を実施した。「山城新池」の北方に位置する降幡神社の西側には、古代の寺院跡（山城廃寺）があったとされており、これまでにこの周辺で、建物の礎石や白鳳期の瓦片などが採集されている。

本府環境農林水産部では、府内の老朽化したため池の護岸や洪水吐の改修・整備をすべく、府営ため池等整備事業を推し進めている。本府教育委員会事務局文化財保護課では、南河内郡河南町山城に所在する「山城新池」における整備事業の計画を受け、南河内農と緑の総合事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財の有無と遺跡範囲の確認のため、試掘調査を実施することとした。

平成18年12月に行われた試掘調査では、平成19年度に堤体改修が予定されている北堤部で、建物の柱穴や遺物などが確認されたため、事業に先立ち発掘調査を必要とする措置が決まった。また、現況での遺跡範囲外（山城新池北堤部以南）にも広がることが予想されたため、次年度以降に山城新池南側においても遺跡範囲確認の試掘調査を行うこととした。平成19年11月に実施された試掘調査では、山城新池南側部分の遺跡範囲外において、遺構及び遺物が認められた。この結果、山城新池東堤部で遺跡範囲内にあたる部分の発掘調査が必要と判断された。さらに、試掘調査の結果を受けて、山城廃寺の遺跡範囲が南側に拡張されるに至った。

発掘調査は、農繁期を避けて池の水を落としてから取り掛かることから、2ヵ年に分けて実施した。調査対象範囲は、現堤体の改修部分、池内でハガネ土を入れるため掘削する部分とした。平成19年度の発掘調査は、平成19年11月に着手し、翌年2月に現地調査を終了した。調査対象は、山城新池西堤部分（1区）と北堤部分（2区・3区）で、調査面積は760m²を測る。平成20年度の発掘調査は、平成20年10月に着手し、平成21年1月に現地調査を終了した。調査対象は、山城新池東堤部分（4区）で、調査面積は450m²を測る。

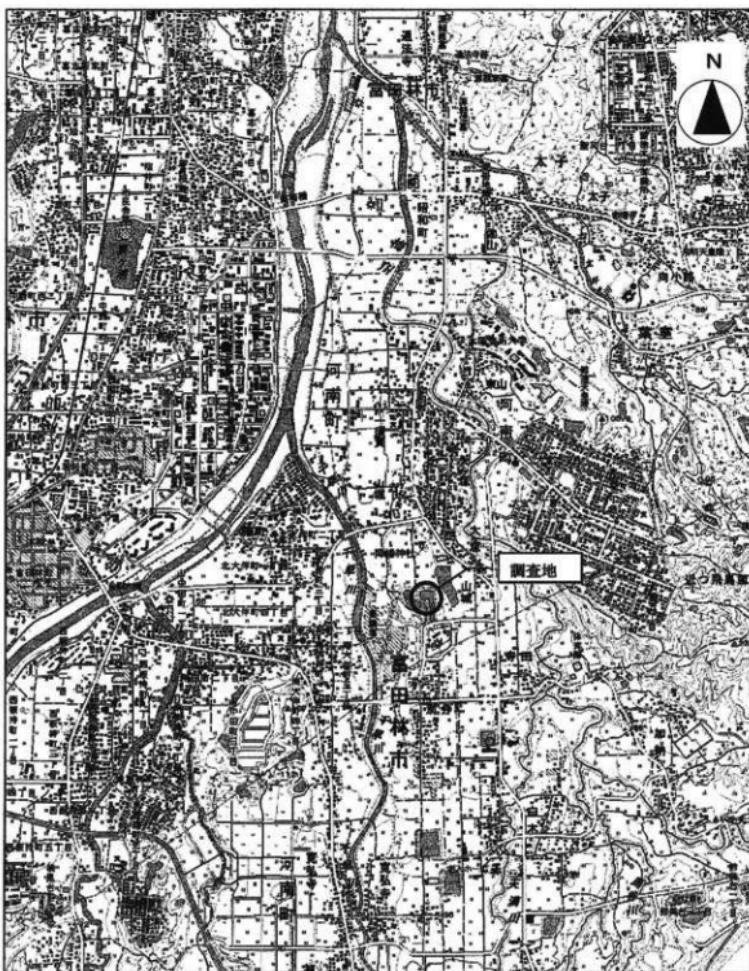
現地調査期間内に、基準点測量及び航空測量を委託し実施した。平成19年度は、同年12月、翌年1月に航空測量を実施した。平成20年度は、同年12月に実施した。また、発掘調査で検出した顕著な遺構（3区第3面・同区溝・井戸・4区第2面）について、写真撮影を委託し実施した。本書、巻頭カラー図版に掲載している。さらに、遺構内において自然科学分析（珪藻・花粉分析）を委託し実施した。分析の結果は、第5章に掲載している。

平成20年2月には、南河内農と緑の総合事務所と共同で河南町立石川小学校4年生の児童16人と先生を対象に、「農空間なっく出張教室」を実施した。本府が取り組んでいる、ため池等整備事業の必要性や地元の文化財について学び、その大きさを理解してもらうことを目的として

いる。当日、現地にて作業見学や遺物の取り上げ、遺物接合、測量などの作業体験を行った。

本書「山城廃寺概要報告」に伴う遺物整理事業については、本府教育委員会と本府環境農林水産部と協議の上、現地調査に引き続き、調査中に記録した図面資料、写真資料、出土した遺物などの整理作業を行った。整理された遺物は遺物撮影の委託を実施し、本書に掲載している。

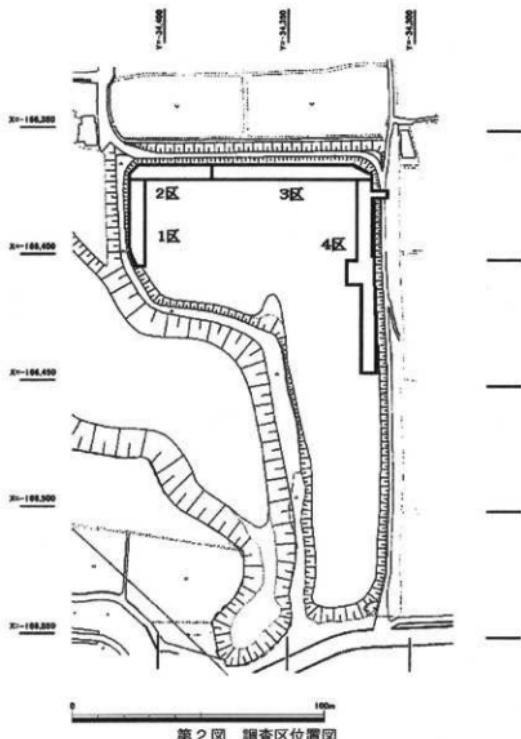
以上の調査成果を本書にて報告し、平成 22 年 3 月にすべての事業を終了した。



第 1 図 調査地位置図

第2節 調査の方法 (第3図)

地区割り 大阪府教育委員会の発掘調査では、遺跡・遺構の座標位置を共通した方法で表示できるよう、(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)が規定した「遺跡調査基本マニュアル」に則って地区割り区画を設定している。遺跡・遺構の位置は、国土座標系図の平面直角座標系を基準とする国土座標軸第VI座標系を使用し、起点からの距離をX・Y値で表記している。地区割りについては、大小5段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割りを利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。経度、緯度の南西端を基準に、縦軸を南からA～O、横軸を西から0～8で表示する。第II区画は、1/2,500の大阪府都市計画図の地区割りを利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割し、南西端を1として北東端を16とする東方向への平行方式の地区表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦(南北)1.5kmを15区画、横(東西)2.0kmを20区画に区分する。区画の北東端を基点として縦を北からA～O、横を東から1～20で表示する。第IV区画は、100m四方の第III区画内を10m単位で区画するもので、縦、横を各10区画に区分する。区画の北東端を基点として縦を北からa～j、横を東から1～10で表示する。さらに、遺物の取



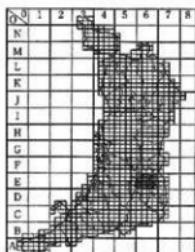
第2図 調査区位置図

り上げや実測記録等の際に必要に応じて使用する区画として、第V区画がある。第V区画は、第IV区画内を5m単位で4分割するもので、北東端を基準として北東区画をI、北西区画をII、南東区画をIII、南西区画をIVと表示する。今回の調査では、調査区内で第V区画までを利用して地区を表示した。たとえば、今回の調査地点の一つは、E 6-7-5N-g 8-IIと表記される。

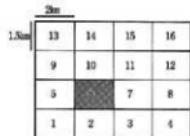
特記すべきこととして、2003年度から座標値が国際基準に基づく世界測地系の座標に変更された。そのため2003年度以前の調査で示されている座標値と新測地系座標値とでは、東南方向に約400mのずれが生じている。これに伴い、座標値から導かれた地区割り表記についても、以前のものとはずれが生じている。

方位は国土座標に準じていることから、座標北をもって表示する。真北と座標北では約6°東にずれている。水準は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。

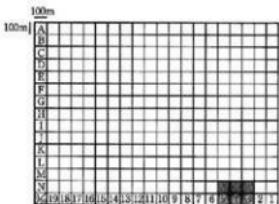
測量 各調査区の主要な遺構面測量は、ヘリコプターを利用した航空測量を行い、1/20の遺構図・平面図と、それを縮小編纂した1/100の遺構図・平面図を作成している。航空測量で得られたデータを元に、3次元で遺構断面が表現できるようデータ処理を行っている。また、遺構の検出状況や遺物の出土状況で必要に応じ、国土座標に則って打設された調査基準杭を元に、現地で平板測量にて実測平面図を作成している。そのほか、必要に応じて遺構断面図や遺物出土状況図については、細部を表現するため基準杭を元に細い区割りをして実測し、1/5、1/10、1/20の図



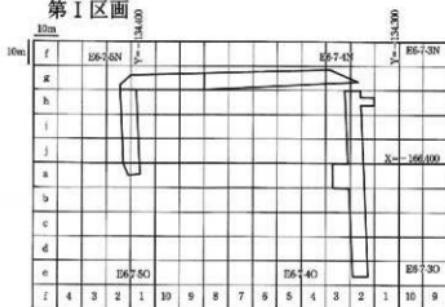
第Ⅰ区画



第Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画

第3図 地区割り図



第V区画

面を作成した。土層断面図は、遺構平面図と対応するため基本的に1/10、1/20で作成した。そのほか、航空測量で得られた各調査区のカラー密着写真を元に、1/100の調査区全域の合成写真を作成している。

調査区 発掘調査が2カ年にわたるため、調査地を分割し調査を行った。平成19年度に調査を実施した山城新池西堤部は1区、北堤部は2区・3区とした。平成20年度に実施した東堤部は4区とした。なお、平成18年度に実施した試掘調査では、トレンチ1～4とした。平成19年度に実施した試掘調査では、調査区1～5とした。

遺構番号 遺構番号は、遺構の種別や調査区を問わず検出した順に通し番号を与えた。検出時に遺構番号を重複して付けたもの、整理段階で番号重複が判別できたものについては、便宜上遺構番号の後に①、②などの番号を付加し区別した。遺構の性格が想定できるものについては、遺構番号の前に溝・井戸などの性格を付加した。なお、掘立柱建物や柵列（柱穴列）については、整理段階で調査区ごとに新たに1番から番号を付与した。但し、今回の調査区は幅が狭く、本来掘立柱建物の柱穴列であっても1列のみの検出にとどまり、柵列と判別ができないものが多く見られたため、確認された柱穴列に順に番号を付与し、改めて柱穴列の性格を判別することとした。建物・柱穴列の判別については、各調査区、遺構面の建物・柱穴列一覧表を参照されたい。

写真 記録保存のために、調査区全景、遺構全景、個別の遺構、遺物出土状況、土層断面などその状況に応じて写真撮影を行った。使用したカメラは、35mm（モノクロ・リバーサル）と6×7（モノクロ・リバーサル）である。遺構の撮影に関しては、主に調査担当者による撮影が基本であるが、必顯的な遺構・遺物については写真撮影の委託を実施した。遺構・遺物の写真・スライドは登録・整理され本府文化財保護課にて保管されている。

発掘調査の開始と終了 調査にあたっては、現堤体の改修部分の表土、盛土及び耕作土層、さらに池内の汚泥堆積層を重機によって掘削した後、人力によって掘削し、遺構・遺物の確認に努めた。人力掘削後、遺構面の精査・測量・実測・写真撮影などを行った。調査終了後は、堤体の改修工事が行われることから、埋め戻しをすることなく、改修工事作業に引き渡した。

遺物・遺構図面等の整理作業 出土遺物は可能な限り発掘調査時に併行して作業を行った。遺物登録番号は、調査区、遺構別にかかわらず、取り上げた順に番号を付与している。調査終了後は、直ちに出土遺物の登録・洗浄・注記・接合・遺物実測・石膏復元・遺物写真撮影などを行った。出土遺物の中で遺構の時期や性格を示すものなどを摘出し遺物実測を行った。特に必要と判断した遺物については、残存状況にかかわらず選出・摘出して写真撮影を行った。本書に掲載した遺物については、表11掲載遺物対照表にまとめている。表は基本として、調査区ごとにまとめ、出土遺物と検出した遺構や出土地、さらに実測番号が対応できるよう掲載している。また、遺物実測図や写真図版と対応できるようまとめている。なお、今回は個人や博物館に所蔵されている瓦についても、実測・拓本・写真撮影を行った。合わせて遺物実測図や写真図版と対応できるようまとめて掲載している。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

山城廃寺の所在する河南町は大阪府の東南部に位置し、北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村と境を接し、東は二上山・葛城山脈の稜線が奈良県葛城市に接している。葛城山脈は南北に連なる約8kmに及ぶ山地である。高度は600～950mと北から南へ漸次高度を増していく。

二上山から葛城山脈に至る山並みには、大和・飛鳥に通ずる谷と峠が刻まれている。二上山の南側には「近つ飛鳥」から大和の飛鳥に通じる竹内峠があり、葛城山と金剛山の合間に葛城に通じる水越峠がある。葛城山の西側には幾つかの丘陵が広がっているが、その山裾の丘陵地上には大阪府下でも有数の群集墳として知られる一須賀古墳群が分布している。丘陵地の北には7世紀の「王陵の谷」と称される磯長谷、南にはアカハゲ・ツカマリ・シショヅカをはじめとする加納・平石古墳群が位置する平石谷が刻まれている。

町域の西側は、金剛・葛城山脈に連なる山地部から大和川支流となる石川水系によって形成された一段低い丘陵地を成す。北流する梅川流域は河岸段丘を成し、河南町の中央部にあたる河南台地を形成している。河南台地は、広い平坦面と狭い急な谷間を持ち急崖を成して梅川及びその支流に臨み、斜面勾配地には竹藪が多く見られる。この台地の西側には千早川が北流し、さらに西側を北流する石川へと合流している。

古くから開けたこの地は、大和や飛鳥に通じる陸のルートと石川・大和川から海に通じるルートが共存する交通の要衝であり、一須賀古墳群をはじめ多くの古墳群や、遺跡などが物語るよう、わが国の古代国家成立期における重要な地域であった。中でも、北流する千早川と梅川の中間に位置し、標高約70mを測る河南台地の先端部にあたる山城地区は、水越峠や竹内街道、東高野街道や京街道などへつながる道の合流地点に位置し、まさしく人、物、文化の交差地点であったと想定される。

奈良時代～平安時代頃には、山城地区は「山城郷(山代郷)」と称されていた。「山代郷」の名は、奈良時代に山代忌寸一族などの山代氏が当郷を本拠地としていたことによるものとされている。山代氏は山代郷のほかにも居住地を持っていたようであるが、主に山代郷で支配的地位を占める有力氏族であったと推定される。このほか、この地近辺には古代の豪族であった「大伴」の地名も残る。山城廃寺は、山代氏の氏寺として大和政権の影響を受け建立されたと考えられている。現在、この地に山城廃寺の面影は無く、周辺で古くから古瓦が散布することで知られる降幡神社が残る閑静な田園地帯となっている。

調査地である「山城新池」の所在する山城・別井地区は、千早川の灌漑域の流末にあたり、水利が悪く、水不足に悩まされてきた地区である。17世紀以降、周辺地区で虎ヶ池(元禄10年・1697)などのため池の築造が成される。「山城新池」の西には、古池(寛永3年・1626年築造)、東には今池(1706年築造)がある。いずれも狭い谷を堰き止め、池としている。やや高台に位

置する「山城新池」は明治 29 年（1913）に造られた人造池である。両側から谷が押し寄せる台地上の狭い部分に設けられた皿池で、池内から土砂を掘削し四方に堤防として積み上げ水深を確保していた。「山城新池」は古池に添う狭い池であったが、昭和 26 年に北側区画、東西方向約 100 m（一町）、南北方向に約 50 m（半町）の範囲が池として拡張され、現在の L 字型の形態となっている。東西方向に直線的なラインを成す北堤から、西堤、東堤の両端が共にほぼ垂直に南下する方形区画である。畠地区画をそのまま池として利用した状況がうかがえる。



第 4 図 周辺の遺跡

第2節 歴史的環境

山城廃寺は、南河内郡河南町大字山城字宮ノ前に所在する寺院跡及び弥生時代から中世に至る集落跡である。これまで山城廃寺については、白鳳期の瓦片の採集や建物の礎石の発見などがあり、主に古代の寺院跡として周知されているが、その実態はまだまだ不明な遺跡である。遺跡の周辺は、都市化が進む大阪府下にあってもまだ田園風景の広がる、起伏に富んだ古くからの地形が良く残されているところである。

周辺の遺跡（第4図）

河南台地の先端部にあたる山城廃寺周辺の歴史的環境として、二上山・葛城山脈の麓から石川沿いの地域を中心に概観する。

二上山北麓では、旧石器時代の石材採掘坑や加工場跡が確認されている。二上山は古くから石材産地として知られ、サヌカイトは旧石器時代以降、石器に多用されている。

縄文時代では、顕著な遺構は確認されていないが、河南台地西側の丘陵上の寛弘寺遺跡・神山遺跡・富田林市錦織遺跡・西板持遺跡などで縄文土器が出土している。周辺の台地上に縄文集落の存在がうかがえる。

弥生時代では、前期に相当する顕著な遺構は確認されていない。弥生中期になると、富田林市喜志遺跡・中野遺跡・甲田南遺跡などで集落が確認されている。いずれも石川を臨む下位から中丘陵上に立地する集落で、丘陵の縁辺に大溝が存在する特色を持つ。弥生後期になると丘陵上にいわゆる高地性集落が形成される。寛弘寺遺跡・神山遺跡・東山遺跡などである。東山遺跡は、一須賀古墳群の北東部に当たる南河内屈指の高地性集落で、数多くの竪穴住居跡が確認されている。概ね弥生時代の集落は中期前半に成立し、中期中頃から後半に盛んに、後期になると衰退する様相を示す。

古墳時代になると、前期に造営された古墳は少ないが、石川西岸で真名井古墳、西側に近接して前期後葉の鍋塚古墳が築かれる。中期には段丘面の平野部に古市古墳群が築かれる。石川と千早川の間の平野部では、前期中葉の板持丸山古墳・板持3号墳などが築かれる。後期になると、丘陵上に大阪府下でも有数の群集墳として知られる一須賀古墳群や飛鳥千塚古墳群が形成される。出土遺物や石室の構造などから、高度な技術を持った渡来系氏族により造営されたものと考えられている。一方、寛弘寺古墳群では、前期中葉から終末期まで衰退することなく連綿と造墓作業は続き、墳丘は約90基確認されている。古墳造営主体の在地性の強さを表すものである。前方後円墳が終焉を迎えた終末期には、河南台地の奥端部に双円墳（全長85.8m）の金山古墳が築かれる。また、磯長谷では王陵・陵墓をはじめとする大型古墳が見られる。さらに、お龜石古墳・アカハゲ・ツカマリ・シショヅカなど高度な構築技術が伴う横口式石槨を持つ古墳がいくつか挙げられる。古墳時代の集落については、神山遺跡で中期の竪穴住居跡・寛弘寺遺跡で後期の竪穴住居跡や6世紀後半～7世紀頃の掘立柱建物跡などが見つかっているが、集落域の特定には至っていない。

飛鳥・奈良時代には、渡来系氏族により多くの古代寺院が建立される。飛鳥時代建立の新堂廃寺をはじめ、船氏の氏寺野中寺、西文氏の氏寺古市寺（西琳寺）、葛井氏の氏寺葛井寺、津氏の氏寺善正寺などが一齊に成立し、この地域は濃密な伽藍建立地域となっている。このほか、錦織細井廃寺跡や龍泉寺において白鳳期に相当する瓦片が出土している。山城廃寺でも白鳳期の瓦片の採集や建物の礎石の発見などがあり、渡来系氏族である山代忌寸氏の氏寺であると考えられる。

奈良・平安時代以降は、石川や千早川とその支流周辺の丘陵上に古代から中世に及ぶ集落跡や中世山城に関する遺構が認められる。河南台地の中央部に位置する別井遺跡は山城廃寺の南側に近接する遺跡で、これまでに弥生時代中期から中世までの遺構・遺物・土坑墓なども確認されている。またこの地は、楠木正成ゆかりの地に近いことから、南北朝期の城跡も数多く残されている。陣屋山城跡・持尾城跡・平石城跡などである。北別井地区では城名をもつ小字名も見られる。楠木正成の赤坂挙兵により激しい戦火を浴び、戦乱以降は荒地となっていたが、16世紀に至り大ヶ塚や富山林で寺内町が形成され、発展していく。



第5図 調査地周辺図

周辺に残る小字名（第5図）

調査地（山城新池）周辺には、「山城」という大字名と「宮ノ前」という小字名が見られる。「宮ノ前」の西側、東側、さらに北側は谷で、この地は狭い台地（河南台地）の舌状に張り出した先端部分となっている。東側の谷から台地上にかかる谷部分に「宮ノ坂」という小字名が見られる。坂の上は降幡神社に当たる。式内社ではないが国初以来の古社である降幡神社は、大伴氏の祖天押日命を祭る。明治40年に奄須賀神社に合祀され、現在、楠の巨木の根元に崩れかけた石段と石圍いに囲まれた小さな祠が配されている。かつては、境内七百三十五坪あるいは、東西三十一間半、南北二十六間の境内に社と拝殿、木の一ノ鳥居と石の二ノ鳥居、さらに幅二間四尺、長寸三十二間の馬場があったようである（『大阪府全志』）。80年代後半頃、降幡神社の近隣地から、建物の礎石が見つかっている。また近年、降幡神社の傍らの私有地から2つ目の礎石が発見された（第45図）。小字名の「宮ノ前」「宮ノ坂」の「宮」は、降幡神社や神社の西側に推定されている「山城庵寺」に対応するものと考えられる。調査地の南側の台地部には「カンノ城」、調査地隣の「西池」の西側には「奥ノ城」、その南側には「口ノ城」、さらに南側には「上ノ城」と谷筋に沿って小字名が並ぶ。南北朝時代に楠木正成軍の前線基地として石川源氏一族が撃り、南大伴の篠山の砦に相対して東條（川）の谷口を守ったとされるが、「奥ノ城」「口ノ城」「上ノ城」は、その時に築かれた「城」の名残と推定される。

「山代氏」

調査地の位置する「山城地区」は、古くから「山城」または「山代」と称されている。奈良時代～平安時代頃には「山代郷」として郷名が見られる。郷名は、山代氏が当郷を本拠地としていたことによると考えられている。天平勝宝2年3月23日付の勘籍によると、「山代伊美吉大村」の養老5年（721年）籍に「山代郷戸主從六位上山代伊美吉真作戸口」、「養老五年籍、所貢山代郷戸主山代忌寸国依」（『正倉院丹裏古文書』）と見える。また、奈良県五條市では山代忌寸真作墓誌が出土している。墓誌には、「自輕天皇御世以来至于四繼仕奉之人河内国石川郡山代郷從六位上山代忌寸真作」とある。さらに、古代氏族の系譜集成である『新撰姓氏録』に山代忌寸の名が見られる。山代忌寸は魯国の白龍王を始祖とした中国系の渡来系氏族とされている。山代忌寸がいつ頃渡来し、山城の地に住み着いたのかは不明であるが、山代忌寸一族が、山代郷の支配的地位を占める有力氏族であったことがうかがえる。

現在、小さな祠が配される降幡神社の西側には、かつて古代の寺院跡が展開していたとされている。降幡神社周辺では、これまでに地元の好事家によって古瓦が採集されている（第4章第1節）。採集された古瓦は川原寺系の瓦類（複弁6葉蓮華文軒丸瓦・4重弧文軒平瓦）で、白鳳期（7世紀後半）のものがある。このほか、池田寺式、和泉秦寺系の軒瓦や平城宮系軒瓦なども見られる。山代忌寸真作が生きた時代にもこの寺が存続していたことがうかがえる。

山城庵寺の寺域と伽藍配置、合祀される以前の降幡神社の様相はいまだ不明である。今後の調査成果に期待したい。

第3節 これまでの調査（表1）

山城廃寺については、白鳳期の瓦片の採集や建物礎石の発見などにより、古代の寺院跡として周知されている。これまでに、山城廃寺内で幾度か発掘調査が実施されている。しかしながら、古代の寺院跡としての概要は不明である。そこで今回、これまで遺跡内で実施された調査とその内容をまとめた（表1）。

古代の寺院跡については、昭和27年に野村豊氏の『河内石川村学術調査報告書(近世村落資料)』に記述が見られる。

「（前略）かかる点よりすれば、石川村は石器時代・古墳時代からの古い聚落である事が了解される。（丘陵上にあるダ”ンゴ”石群集古墳の実測は何れ整理して発表の心積）。

石川村大字山城の旧降幡神社西方台地上からは、祝部土器の出土は許より、奈良から平安時代初期の瓦が多数出土し、古代の寺院跡である。（後略）」

ここに記されている「祝部土器（須恵器）の出土」、「奈良から平安時代初期の瓦」が如何なるものか、また、これらの遺物が何處に現存するのかは不明であるが、すでに古代の寺院跡として認識されていたことがうかがえる。

遺跡としての山城廃寺は、昭和49年に新規発見遺跡として通知されたことに始まる。この年に実施された農道拡幅工事の際、遺物・遺構が確認されたため、緊急調査を行うこととなった。調査は昭和49年3月7日から実施された。この調査の成果、弥生時代の深く刻まれた数条の溝と良好な弥生土器、サヌカイトの剥片などコンテナ約3箱が出土した。出土した弥生土器の一部は、当時、山城廃寺の北方部で発掘調査が行われていた『東山遺跡』報告書（菅原正明 付論II「南河内における初期農耕社会の動向」）に掲載されている。ただし、南河内の弥生時代の遺跡の一つとして紹介され、出土した遺物が2点掲載されたのみである。今回、この調査で出土した弥生土器を整理し、実測、写真撮影を行い掲載している（第4章第3節）。また、特記すべきこととして、新規発見遺跡として通知された時の遺跡名は「山城廃寺」ではなく、「山城遺跡」となっている。

昭和54年には個人宅倉庫建設に先立って調査を実施している。調査は、昭和54年9月～10月に実施された。調査の成果として、遺物はコンテナに6箱保管されている。遺構内容に関しては、詳細図面が不明となっている。遺物は、約7割がサヌカイトの剥片で、ほかは土師器小片が多く見られた。いずれも、小片が多く、器形、内容を復元できるものはなかった。概ね奈良時代～平安時代に及ぶものと考えられる。

昭和58年には、府水道本管設置に先立ち調査を実施している。調査の成果として、土師器片、須恵器片などの細片が出土しており、コンテナで2箱保管されている。実測、写真撮影ができるものは見当たらなかった。概ね古墳時代～平安時代に及ぶものと考えられる。

その後、山城廃寺の遺跡内で発掘調査は行われず、今回の「山城新池」の堤体改修に伴う発掘調査に至る。平成18年には、「山城新池」の堤体改修に伴う工事に際して遺跡範囲の確認をす

るための試掘調査を実施した。その結果、奈良時代～平安時代に相当する大型建物の柱穴が発見された。また、製塙土器や土師器片なども出土した。出土した製塙土器（第37図）は、狭い範囲で多く見られたことから、胎土分析を実施した。この成果は、第5章第1節で報告している。

平成19年度には、調査に先駆け、調査範囲を確定するための試掘調査を実施し、土師器小片などの遺物と遺物包含層が確認された。この結果をうけて、山城廃寺の遺跡範囲が南側に拡張された。

平成19年度の調査は、平成19年11月から翌年3月まで実施した。「山城新池」の堤体改修部分、西堤部（南北約40m）、北堤部（東西約100m）の発掘調査で、調査面積は約760m²を測る。調査の結果、飛鳥・奈良時代～平安時代の柱穴で構成される掘立柱建物跡や大型の方形状の柱穴を持つ掘立柱建物跡、古墳時代後期頃の遺物を含む溝跡などが確認された。

平成20年度の調査は、平成20年10月から翌年1月まで実施した。調査は、「山城新池」の東堤体部（南北約75m）で、調査区を4区とした。調査面積は約450m²を測る。調査の結果、飛鳥・奈良時代～平安時代に相当する建物跡を検出し、集落域が南側に広がることが確認できた。また、古墳時代及びそれ以前の溝を数条検出し、旧地形が起伏に富んでいたことがわかった。

「山城廃寺」は、遺跡名称で変遷が見られる。昭和49年の遺跡発見当初は「山城遺跡」であったが、1977年版『大阪府文化財地名表』及び『大阪府文化財分布図』では、「一須賀廃寺」と改定している。1979年に実施された発掘調査では「一須賀廃寺」としている。1982年刊行「山城廃寺（一須賀廃寺）出土古瓦」「節・香・仙」36では、「山城廃寺（一須賀廃寺）」と括弧でもって2名称を併記している。1985年刊行「錦織細井廃寺跡発掘調査概要」においても、「山城廃寺」「一須賀廃寺」の2名称が見られる。降幡神社周辺で採集された古瓦が紹介されたが、「一須賀」の字名を持つ地域と異なることが判明したため、「山城廃寺」と改称する動きが見られた。1986年版『大阪府文化財分布図』では「山城廃寺」と改定され、以後「山城廃寺」に定着している。

年次	種類	調査起因	調査期間	調査地	主な成果	出土遺物 (コンテナ)	備考(遺跡名)
1974	S49	新規道路発見	農道並轍工事	S49 3/5	山城 747-1 道路発見層 〔生糸時代集落遺跡〕		山城遺跡
1974	S49	緊急調査	農道並轍工事	S49 3/7~	山城 747-1 骨井上器 他出土	コンテナ 3	山城遺跡
1978	S53	57条4届出	倉庫建設	S53 12/22	山城 393-2		一須賀廃寺跡
1979	S54	試掘・発掘調査	倉庫建設	S54 9/10~21 S54 9/23~10/13	山城 398 サスカイト・土師器・須恵器片	コンテナ 6	一須賀廃寺
1984	S58	試掘・発掘調査	府木道本舗	S58 1/29	山城 地内 土師器・須恵器他	コンテナ 2	山城遺跡
2006	H18	範囲確認調査		H18 12/5~12/7	山城宮前 奈良～平安時代の大型建物柱穴・溝	コンテナ 1	山城廃寺
2007	H19	試掘調査	府宮ため池等整備事業 〔山城新池地区〕	H19 11/21~11/22	山城宮前 占領時代～平安時代の包含層 遺跡範囲の拡大	コンテナ 1	山城廃寺
2007	H19	発掘調査		H19 11/26~3/7	山城宮前 奈良～平安時代の大規模建物柱穴・ 古墳時代後期の溝	コンテナ 11	山城廃寺
2008	H20	発掘調査		H20 10/20~2/2	山城宮前 奈良～平安時代の大規模建物柱穴・ 古墳時代以前の溝	コンテナ 5	山城廃寺

表1 既往の調査一覧表

第3章 調査の成果

第1節 試掘調査（平成18年度・平成19年度）（第6図、図版1、表2）

本府では、府内の老朽化したため池の護岸や洪水吐の改修・整備をすべく、府営ため池等整備事業を推し進めている。本府文化財保護課では、南河内郡河南町山城に所在する「山城新池」における整備事業の計画を受け、埋蔵文化財の有無と遺跡範囲の確認のため、試掘調査を実施することとした。

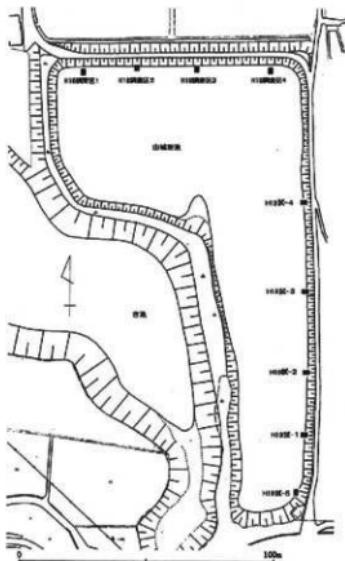
平成18年度試掘調査（図版1・2）

平成18年度には、工事に際して遺跡範囲の確認をするための試掘調査を実施した。調査は、平成18年12月5日から同月7日に行われた。山城新池の堤体の改修が予定されている北堤部において、2.0m×1.5mの調査区を4ヵ所（調査区1～4）設定し、人力掘削で遺構・遺物の検出に努めた。

調査区1・2 地山直上面で、東西方向に開削された奈良時代～平安時代頃の溝と平安時代末頃の溝を検出した。溝には多量の円礫が含まれる。

調査区3・4 地山直上面で、奈良時代～平安時代頃の柱穴並びに東西方向に開削された溝、平安時代末頃の柱穴を検出した。奈良時代～平安時代末頃の大型建物柱穴（隅丸方形長軸0.9m以上、短軸0.5m以上）を検出した。

調査の結果、調査区1～4において、奈良時代～平安時代末頃の遺構（溝・柱穴など）と遺物（瓦・



第6図 試掘調査地位置図

	調査期間	トレチ	位置	遺構・遺物	備考
H18年度 (06049) 平成18年12月5日～ 12月7日		トレチ1	北堤西端より7m東地点	奈良～平安時代の溝検出	奈良～平安時代の遺構確認
		トレチ2	北堤西端より33m東地点	奈良～平安時代の溝検出	大型建物柱穴確認
		トレチ3	北堤西端より55m東地点	奈良～平安時代の大型柱穴検出	(措置) T.事着工前発掘調査必要
		トレチ4	北堤西端より90m東地点	奈良～平安時代の大型柱穴検出	
H19年度 (07043) 平成19年11月21日～ 22日・12月6日		試-4	東堤北端より50m南地点	古墳時代後期頃の須恵器・溝検出	古墳時代後期の溝・遺物を確認
		試-3	東堤北端より75m南地点	瓦片・須恵器片出土・包含層確認	小土器片を含む包含層確認
		試-2	東堤北端より110m南地点	近世陶磁片出土・遺構確認なし	(措置) 工事着工前発掘調査必要
		試-1	東堤北端より135m南地点	盛土直下で地山層となる	
		試-5	東堤北端より170m南地点	盛土直下で地山層となる	遺跡範囲が南側に拡大

表2 試掘調査地一覧表

須恵器・土師器・製塙土器など)を検出した。特に調査区3・4で検出した奈良時代～平安時代末頃の柱穴は、長軸約1.2m、短軸約0.8mを測り、寺院や官衙的施設の大型建物に対応するものと考えられる。

この結果を受けて、今回調査を実施した北堤部から遺構・遺物が検出されたため、北堤部並びに北堤部に隣接する西堤部について、工事着工前に発掘調査が必要の措置が取られた。また、遺構が遺跡範囲外(山城新池北堤部以南)にも広がることが予想されたため、次年度以降に山城新池南側においても遺跡範囲確認の試掘調査を行うこととした。

平成19年度試掘調査(図版3)

平成19年度は、山城新池の堤体の改修が予定されている東堤部で遺跡範囲の確認をするための試掘調査を実施した。調査は、平成19年11月21日から22日、12月6日に行われた。堤体改修予定の東堤部において、2.0m×1.0mの調査区を5ヵ所(試-1～5)設定し、人力掘削で遺構・遺物の検出に努めた。

試-1・5 堤体の盛土(第2層)のみの堆積で、遺構・遺物は検出されなかった。

試-2・3 堤体の盛土(第2層)から、近世の陶磁器片や須恵器片などを検出したが、遺構は検出されなかった。

試-4 地山直上面で、古墳時代後期頃の溝と溝内堆積土(第5層)から、須恵器杯身片などを検出した。

調査の結果、試-4で古墳時代後期の溝と須恵器杯身片などの遺物を検出した。試-2・3では、近世の陶磁器片・瓦片や須恵器片などを含む包含層を確認した。包含層の遺物は、明治29年に山城新池が築造された際に混入したものと考えられる。現在の山城新池はL字形を示すが、昭和25年以前の地図では、南側部分のみの小さな長方形を呈する。山城新池は、その後に北側に拡幅・増設されたことがわかった。

この結果を受けて、試-4から遺構・遺物包含層が検出されたため、試-3から北側部分については、工事着工前に発掘調査が必要の措置が取られた。その他の部分については、慎重に工事を実施し、遺構・遺物が発見された場合は、その取り扱いについて協議すること。また、遺跡範囲外から遺構・遺物が発見されたため、遺跡発見通知を提出するよう措置が取られた。山城廃寺の遺跡範囲が南側に拡張されるに至った。

平成 18 年度、平成 19 年度の試掘調査から、「山城新池」の北堤部分で多くの柱穴を検出した。中でも奈良時代～平安時代末頃の柱穴は、長軸約 1.2 m、短軸約 0.8 m を測り、寺院や官衙的施設の大型建物に相当するものと考えられる。「山城新池」の北側には降幡神社がある。神社の西側には藤澤一夫氏によって「山城廃寺」の寺域範囲が推定されている。降幡神社周辺では白鳳期に相当する瓦片が採集されている。また、神社の近隣から建物の礎石も出土している。山城廃寺と降幡神社の関係は不明であるが、山城廃寺の寺域推定範囲の南側に、今回の調査で検出した古代の建物群が存在することがわかった。

出土遺物（第 7 図、図版 2）

平成 18 年度の試掘調査において、遺物としてサヌカイト製瓦状剥片石核や瓦片などが出土した。また、狭い調査区内から、多くの製塩土器片が出土した（第 37 図・図版 22）。中でも厚手の粘土紐を巻き上げ、内面に布目を伴うものも見られた。在地のものではないと思われることから、製塩土器について胎土分析を実施した。成分の比較を見るため、サンプルとして同じく河南町に所在する平石古墳群から出土した製塩土器を比較対象とした。この成果は、自然科学分析として第 5 章第 1 節に掲載している。

平成 19 年度の試掘調査では、堤体盛土内から近世陶磁器片、近世のものと見られる瓦片が出土した。包含層内からは、須恵器片、土師器片、瓦器片などが出土した。いずれも細片のものが多く、詳細は不明である。



第 7 図 平成 18 年度試掘調査出土遺物

第2節 基本層序 (第8図、図版4)

調査地は、河南台地を刻んで北流する千早川と梅川に挟まれた段丘面上に位置する。なだらかな丘陵上に位置するが現況では、丘陵先端部に向けて南側から北側へ緩やかに低くなる。丘陵部側東側は梅川に向かって、丘陵部西側は千早川に向けて低くなり、河岸段丘の様相を示す。

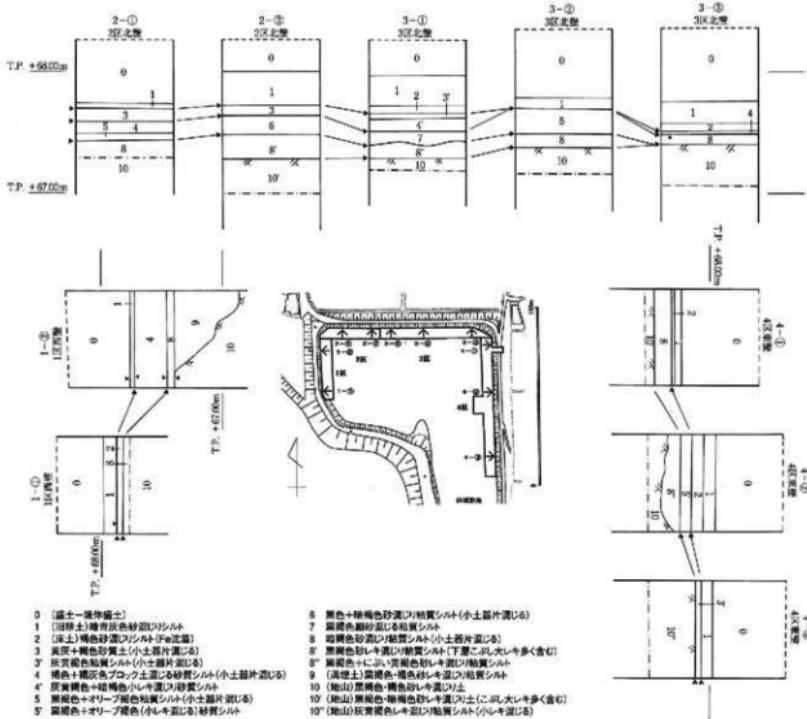
土層の基本的な堆積状況は、概ねVI層に大別することができる。

I層 (0) 堤体の盛土層。池を造設する際、池中となる部分を掘削して皿池とし、その掘削土を堤体の盛土の一部としている。奈良時代～平安時代頃の須恵器、土師器などの細片を多く含む。

II層 (1.2) 近・現代の1.耕作土層と2.床土層に相当する。調査区全域で見られる。

1. (旧耕土層) 暗青灰色砂混じりシルト。層厚は10～20cmを測る。2. (床土層) 褐色砂混じりシルト(Fe沈着する)。瓦器、土師質土器などの細片を含む。層厚は2～10cmを測る。床土層は基本的に1層であるが、部分的に2～3層に細分することができる。床土層を除去した下層面から、第1上面に相当する東西方向の溝や、浅い不定形土坑などを検出した。

III層 (3.3') 灰黄褐色土を基本とする堆積層で、中世の耕土層と推定される。土層中から主に



第8図 基本層序柱状図

- 0 (底土) 黒褐色土
- 1 (旧耕土) 暗青灰色砂混じりシルト
- 2 (床土) 褐色砂混じりシルト(Fe沈着)
- 3 灰褐色+褐色砂質土(小土器片混じる)
- 4 暗青褐色+褐色砂質土(小土器片混じる)
- 5 暗青褐色+褐色砂質土(小土器片混じる)
- 6 黒褐色+暗褐色砂混じり粘質シルト(小土器片混じる)
- 7 暗褐色砂混じり粘質シルト(小土器片混じる)
- 8 暗褐色+灰褐色砂混じり粘質シルト(下層これより灰褐色が多く含む)
- 9 灰褐色+灰褐色砂混じり粘質シルト(中層これより灰褐色シルト)
- (底土) 黒褐色+褐色砂混じり粘質シルト
- (地山) 黑褐色+褐色砂混じり粘質シルト
- (地山) 黑褐色+褐色砂混じり粘質シルト(こぼれ大隈多く含む)
- (地山) 黑褐色+褐色砂混じり粘質シルト(小土器片混じる)

瓦器、土師質土器などの細片が出土した。基本的には1層であるが、部分的に2～3層に細分することができる。2～3区の北堤西側部では3'. 黄灰色+褐色砂質土で層厚は8～14cmを測る。3区の北堤中央部から西側では3'. 灰黄褐色粘質シルトとなる。層厚は約6cmを測る。
III層上面で第1面に相当する鋤溝・溝などを検出した。

IV層 (4.4') 黄褐色土層、(5.5') 黒褐色土層、(6.7) 暗褐色土層の砂質シルトを基本とするが、砂質土や砂混じり土層となる箇所も見られる。古代における整地土と推定される。

1～2区の北堤北西部では、4'. 褐色+褐灰色ブロック土混じる砂質シルト、北堤中央部の3区西側部では、4'. 灰黄褐色+暗褐色小けい混じる砂質シルトとなる。層厚は5～25cmを測る。

3区の北堤中央部から東部では、5. 黑褐色+れい-ア'褐色粘質シルト。4区の東堤中央部では、5'. 黑褐色+れい-ア'褐色（小けい混じる）砂質シルトとなる。層厚は10～20cmを測る。

2区の北堤中央部から東部では、6. 黒色+暗褐色砂混じり粘質シルト。2～3区の北堤中央部では、7. 黑褐色細砂混じり粘質シルトとなる。層厚は6～16cmを測る。

IV層中から、須恵器片、土師器片、黒色土器片など古墳時代～平安時代頃を中心とする遺物が出土した。IV層上面で第2面に相当する建物柱穴、溝、井戸などを検出した。

V層 8. 暗褐色砂混じり粘質シルトを基本とするが、砂けい・石が多く混じる部分も見られ、2～3層に細分することができる。

概ね8. 暗褐色砂混じり粘質シルトであるが、2～3区の北堤中央部から西側、また4区東堤中央部では、砂けい・こぶし大けいが多く、8'. 黑褐色砂けい混じり粘質シルト（下層こぶし大けい多く含む）や8''. 黑褐色+にぶい黄褐色砂けい混じり粘質シルトとなる。層厚は、1区で約5cm、そのほかの地区では5～20cmを測る。

土層中からは、須恵器片、土師器片など古墳時代を中心とする遺物が出土した。V層上面で、第3面の建物柱穴、土坑や溝、井戸などを検出した。

VI層 10. 地山相当層である。暗褐色+褐色砂けい混じり土を基本とするが、砂けい・石が多く混じる部分も見られ、2～3層に細分することができる。特に2区北堤西側から中央部、4区東堤部全域で砂けい・石が多く見られた。10. 黑褐色+暗褐色砂けい混じり土（こぶし大けい多く含む）となる。4区東堤南側では、10''. 灰黄褐色けい混じり粘質シルトとなっている。

VI層の地山相当層上面で3区最終面の溝、井戸などを検出した。地山直上層では、弥生時代～古墳時代の遺物が含まれる。

9. 黑褐色粘質シルト（上層砂多く混じる）は、10. 地山相当層を切り込んでいる1区溝63の遺構埋土である。須恵器、土師器片など古墳時代の遺物を含む。

第3節 平成19年度の調査

南河内郡河南町山城に所在する「山城新池」における府営ため池等整備事業（南河内農と緑の総合事務所）に先立ち、山城廃寺の発掘調査を実施した。

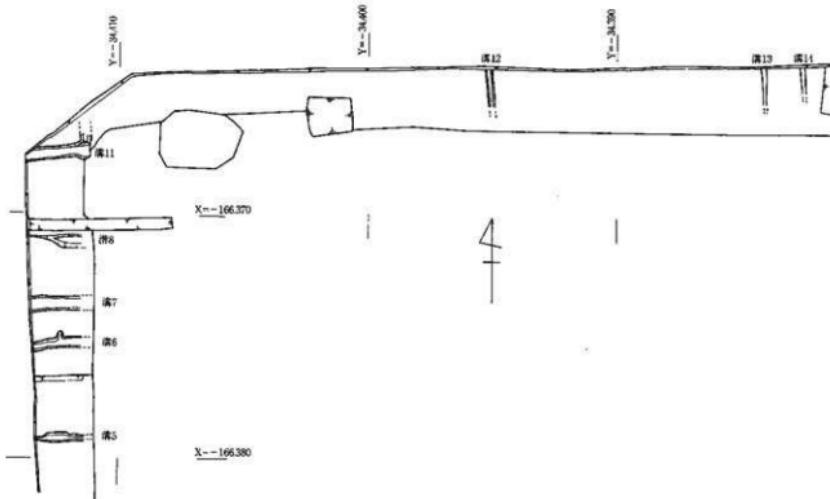
発掘調査は、まず次年度以降発掘調査を実施予定の東堤部について遺跡範囲確認の試掘調査を行った。調査は平成19年11月21日から22日に実施した。引き続き、「山城新池」内での発掘調査を行った。調査区は、堤体改修部分の西堤部（南北約40m）を1区（約220m²）、北堤部（西から中央部約35m）を2区（約210m²）と、北堤部（中央部から東約65m）を3区（約330m²）とした。調査面積は総計約760m²を測る。発掘調査は、平成19年11月26日から平成20年2月21日に現地調査を終了し、同年3月7日に工事検査を受け終了した。調査終了時から、遺物、図面、写真等の整理作業を行った。

1. 1区の調査

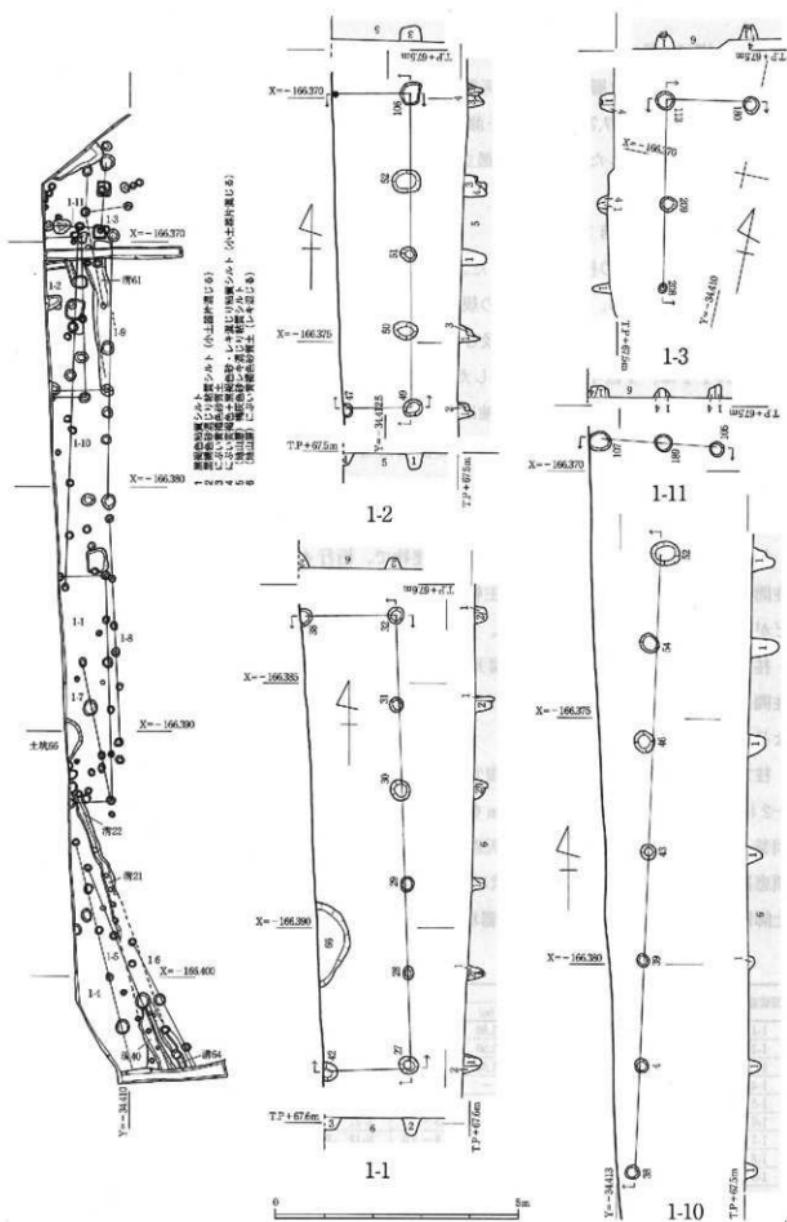
「山城新池」における堤体改修部分の西堤部（南北約40m）を1区とした。3面の遺構面を確認した。1区は南から北へ緩やかに低くなる。地山層も南側で高く、北側は低くなる。

第1面（第9図、図版6）

I層 堤体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去したIII層上面で遺構面を検出し、第1面とした。検出高はT.P.67.9～67.7mを測る。遺構は、主に東西方向を示す耕作溝（溝5・6・7・8）を検出した。中・近世代の耕作溝と推定される。溝の検出幅は0.2～0.6m、深さは0.05～0.1mの浅い皿状を示す。埋土はにぶい黄褐色+灰黄褐色砂混じり粘質シルトである。溝内から須恵器壺片、土師器小片が出土したが、実測するには至らなかった。



第9図 1区・2区第1面平面図



第10図 1区第2面造構平面・断面図

第2面 (第10図、カラー図版1、図版5・6・7)

II層 旧耕土・床上層及びIII層 灰黄褐色土層を除去したIV層上面で遺構を検出し、第2面とした。検出高はT.P.67.7 ~ 67.5 mを測る。第2面では主に、掘立柱建物の柱穴や柵列、ピット、溝などの遺構を検出した。検出した掘立柱建物の柱穴の中には、土器を埋納するもの (P 3・P 4・P39) も見られた。

掘立柱建物・柵列 (第10図、表3)

第2面では、数多くの柱穴を検出した。概ね南北方向に柱穴が並んでいる状況は確認できたが、調査区の幅が狭いため、掘立柱建物の規模や広がりを確認することはできなかった。

1区第2面で検出した掘立柱建物及び柵列となる柱穴列は、表3に示すとおりである。

柱穴列1-1は、1区中央部で復元した建物で、桁行5間、梁間1間以上の南北棟である。柱間は1.8 ~ 2.0 mを測る。建物の主軸は、N-2°-Wを示す。柱穴形状は円形で、直径0.25 ~ 0.4 m、深さは0.2 ~ 0.4 mを測る。埋上は柱痕相当層が黒褐色粘質シルト、埋上が黒褐色砂混じり粘質シルトで小土器片が混じる。北西部の西壁際のP3からは、土師器甕片、土師器杯片などが出土した。このほか柱穴内からは、土師器杯、皿、須恵器片などが出土した。

柱穴列1-2は、1区の北西部で復元した建物で、桁行4間、梁間1間以上の南北棟である。柱間は1.5 ~ 1.8 mを測る。建物の主軸は、N-1°-Wを示す。柱穴内からは、土師器杯、皿片などが見られた。いずれも細片のため、実測することはできなかった。

柱穴列1-3は、1区の北東部で復元した建物で、桁行2間、梁間1間以上の南北棟である。柱間は1.7 ~ 2.1 mを測る。建物の主軸は、N-11°-Wを示す。柱穴内からは、土師器杯、皿片などが出土した。

柱穴列1-10は、1区の北西部で復元した建物の柱穴列で、桁行6間の南北棟である。柱穴列1-2に重複する。柱間は1.9 ~ 2.3 mを測る。建物の主軸は、N-2°-Eを示す。P4は、土師質羽釜(5)の中に土師器杯(4)、凝灰岩、軽石などを配する土器埋納遺構である。またP39は、須恵器長頸壺の体部(12)片を容器状に受け皿とし、土師器杯(7.8)、皿(6)、黒色土器椀(9.10.11)、土師器甕片、羽釜片などを配する土器埋納遺構である。柱穴内の埋土には炭が多く混じる。

掲載番号	形態	桁行		梁間		柱間 (m)	方位	柱形状	柱穴 (m)		種別
		間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)				規格	深さ	
1-1	建物	5	9.30	1	1.80	1.8 ~ 2.0	N-2°-W	円形	0.25 ~ 0.4	0.2 ~ 0.4	第10図
1-2	建物	4	6.50	1	1.50	1.5 ~ 1.8	N-1°-W	楕円方形	0.3 ~ 0.6	0.25 ~ 0.5	第10図
1-3	建物	2	3.90	1	1.80	1.7 ~ 2.1	N-11°-W	円形	0.2 ~ 0.4	0.2 ~ 0.4	第10図
1-4	建物 / P列	5	10.00	—	—	1.7 ~ 2.0	N-14°-W	楕円・円形	0.3 ~ 0.6	0.2 ~ 0.3	
1-5	建物 / P列	3	9.00	—	—	2.9 ~ 3.1	N-22°-W	楕円・円形	0.3 ~ 0.6	0.18 ~ 0.25	
1-6	柵列	2	6.00	—	—	2.3 ~ 2.5	N-27°-W	楕円・円形	0.3 ~ 0.5	0.2 ~ 0.3	
1-7	建物	3	5.80	—	—	1.8 ~ 2.0	N-12°-W	楕円	0.3 ~ 0.6	0.25 ~ 0.3	
1-8	建物	4	10.00	—	—	2.0 ~ 2.3	N-3°-W	楕円・円形	0.3 ~ 0.4	0.25 ~ 0.5	
1-9	建物	3 ~ 4	8.30	—	—	1.8 ~ 2.0	N-1°-E	楕円・円形	0.35 ~ 0.5	0.25 ~ 0.44	
1-10	建物	6	12.70	—	—	1.9 ~ 2.3	N-2°-E	楕円・円形	0.3 ~ 0.6	0.2 ~ 0.5	第10図
1-11	柵列	2	2.40	—	—	1.1 ~ 1.3	N-87°-E	円形	0.3 ~ 0.4	0.2 ~ 0.3	第10図

表3 1区第2面建・柱穴列一覧表

土器埋納遺構（P3・P4・P39）（図版5）

検出した建物柱穴内で、建物の柱を抜いた後に土器を埋納するものが幾つか見られた。

柱穴列1-1内のP3は、土師器甕片を皿状に受け皿とし、土師器杯片を配している。柱穴列1-10内のP4は、土師質羽釜（5）の中に土師器杯（4）、凝灰岩、軽石などを配している。また、P39では、須恵器長頸壺の体部（12）片を容器状に受け皿とし、土師器杯（7.8）、皿（6）、黒色土器椀（9.10.11）、土師器甕片、羽釜片などを配している。柱穴内の埋土には炭が多く混じる。いずれも、建物の柱を抜いた後に土器を埋納していることから、埋め戻しをする際に、地鎮などの祭祀行為が行われたものと推測される。このほか、柱穴内に人頭大の石を入れるもの、こぶし大の石を幾つか入れて埋め戻すものなども見られた。概ね奈良時代～平安時代前半（8～9世紀）頃の様相を示す。

溝61・溝21・溝22・溝40・溝64（第10図）

調査区北側及び南側で、やや西に傾く南北方向を示し、直線的に延びる溝を数条検出した。1区は南側から北に向かって緩やかに低くなる様相を示す。

溝61は、検出幅は0.5～0.8m、深さは0.1～0.2mを測る。浅い皿状の掘り方を示す。埋土は黒褐色砂け混じり粘質シルトで、土師器小片が出土した。溝内には、柱穴列1-3の柱穴が並ぶ。

溝21・溝22は、連続する溝である。検出幅は0.3～0.5m、深さは0.1～0.2mを測る。浅いU字状の掘り方を示す。埋土は暗褐色砂・小片が多く混じる砂質土で、土師器小片が出土した。溝内には細かい杭穴が列状に並ぶ。また、溝にほぼ平行して、柱穴列1-4の柱穴が並ぶ。

溝40・溝64は、調査駆南側に位置する溝で、溝21・溝22に統くと見られる。検出幅は0.3～0.5m、深さは0.1～0.2mを測る。浅いU字状の掘り方を示す。溝内には細かい杭穴が列状に並ぶ。また、溝にほぼ平行して、柱穴列1-5・1-6が並ぶ。

検出した溝は、建物柱穴列に付帯する区画溝になるものと考えられる。

第3面（第14図）

V層 暗褐色砂混じり粘質シルトを除去した下面から、地山層を抉って東西方向に延びる溝63を検出した。調査区は南側から緩やかに北側に向かって低くなるが、この溝付近で一番低くなり谷状を呈する。検出高はT.P.67.3mを測る。

溝63（第14図）

調査区北側で、東西方向に延びる溝を検出した。溝幅は0.8～1.5m、深さは0.5～0.7mを測る。西側に向かって低くなる様相を示す。埋土は上層がにぶい黄褐色砂質土、溝内埋土の大半が黒褐色+暗褐色アラク土混じる砂混じり粘質シルトとなる。下層はにぶい黄褐色+黒褐色アラク土混じる砂質土である。埋土内から土師器小片が出土したが、細片のため詳細は不明である。溝内に水が流れていた痕跡は見られず、一気に埋まったものと見られる。おそらく、人為的に溝を埋め、整地したものと考えられる。

1区出土遺物（第11図、図版14）

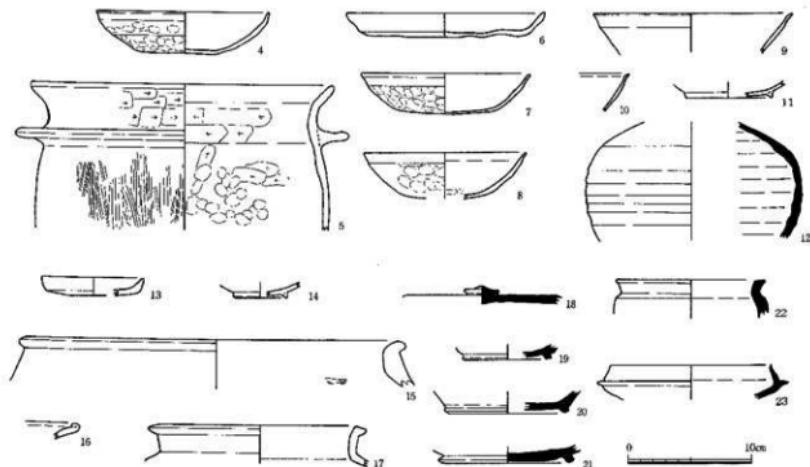
1区では、主に第2面の建物柱穴内から遺物が出土した。そのほか、溝や柱穴などから土師器片などが見られたが、細片が多く詳細が不明なものが多かった。

P4内からは、土師器杯（4）、土師質羽釜（5）が出土した。羽釜の中に土師器杯が入った状態で出土した。6～12はP39内から出土した遺物である。6は土師器皿、7、8は土師器杯である。9～11は内黒の黒色土器碗で、内面見込み部に密な暗文が見られる。12は須恵器長頸壺の体部片である。ボール状の器のごとく受け皿として設置され、その中に土師器杯や黒色土器碗片などが埋納されていた。いずれも、建物柱穴から柱を抜いた後に、土器を配置した土器埋納遺構である。概ね平安時代前期頃（9世紀）の様相を示す。

包含層からは、須恵器杯・蓋・杯身・短頸壺、土師器皿・杯・碗・甕、土師質羽釜、黒色土器碗などが出土した。細片が多く図化できるものは僅かであった。

小結

1区では、第1面で中世代の耕作溝跡を検出した。第2面では、ほぼ真北あるいはやや西に傾く北方向を主軸とする掘立柱建物や柵列、また建物に添うように直線的な溝などを検出した。第3面では、谷状に深く東西方向に延びる溝を検出した。遺構の隆盛期は第2面で出土した遺物などから、飛鳥・奈良時代～平安時代前期頃（7～9世紀）の様相を示す。包含層の遺物からは、古墳時代に相当する須恵器なども見られた。調査区北側に想定される山城廃寺に相当する時期の建物群が存在していた事をうかがわせる。



第11図 1区出土遺物

2. 2区の調査

堤体改修部分の北堤部の西半部（東西約40m）を2区とした。3面の遺構面を確認した。2区は北堤部の東西方向の調査区で、西側部が僅かに低くなるが、概ね平坦である。

第1面（第9図）

I層 堤体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去したIII層上面で、東西方向及び南北方向を示す耕作溝を検出した。中でも調査区中央部で検出した耕作溝内には炭化物片が多く含まれていた。検出高はT.P. 67.7 mを測る。

遺構は、東西方向を示す耕作溝（溝11）、南北方向を示す耕作溝（溝12・13・14）を検出した。中・近世の耕作溝と推定される。検出幅は0.15～0.25 m、深さは0.05～0.10 mの浅い皿状を示す。埋土はカリ-7° 黒褐色ないし褐色砂混じり粘質シルトである。溝内からは、須恵器小片、上師器片が出土した。

第2面（第12図、カラー図版1、図版6・7）

II層 旧耕土・床土層及びIII層 灰黄褐色+褐色砂質土を除去したIV層上面で、第2面の遺構を検出した。検出高はT.P. 67.6 mを測る。第2面では主に、掘立柱建物の柱穴や柵列、ピット、溝などの遺構を検出した。また、東西方向に延びる溝（溝170・171・172・174）を検出したほか、遺構175・遺構142からは製塩土器片が多く出土した。

掘立柱建物・柵列（第12図、表4）

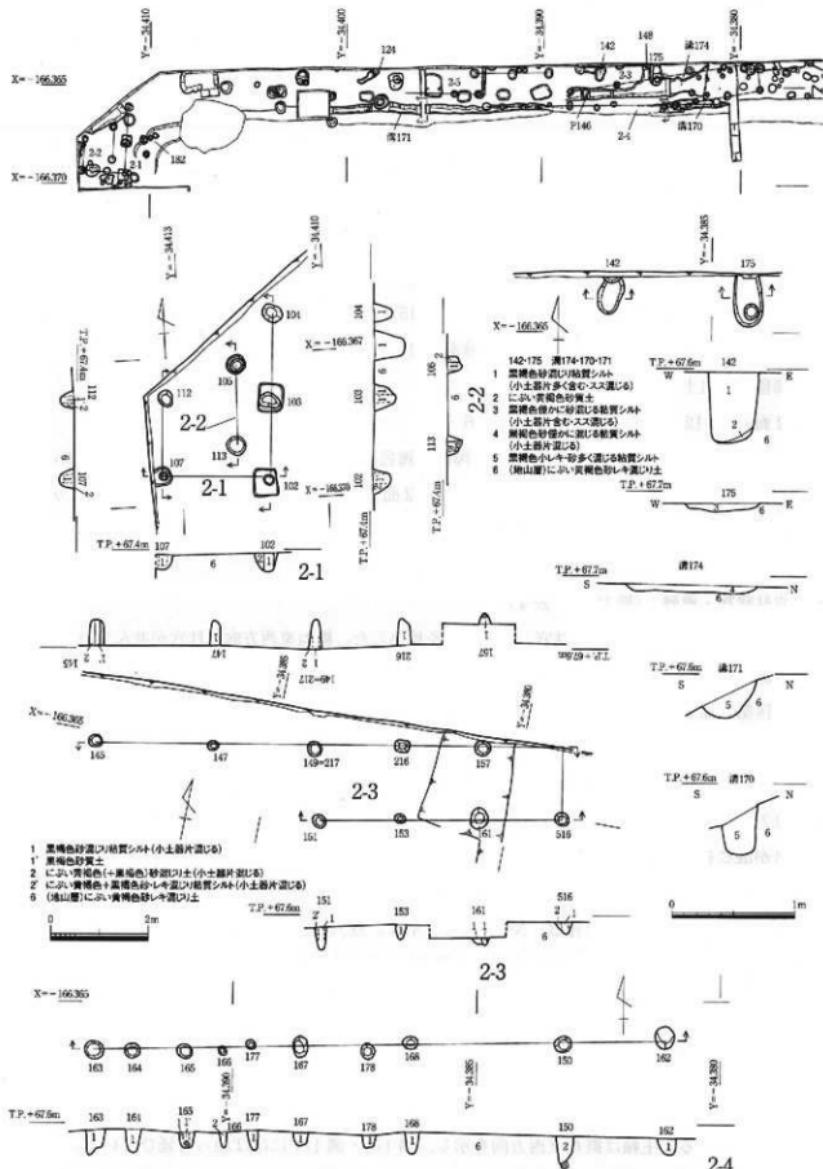
第2面では、数多くの建物柱穴、柵列などを検出した。概ね東西方向に柱穴が並んでいる状況は確認できたが、調査区の幅が狭いため、建物の規模や広がりを確定することはできなかった。

2区第2面で検出した掘立柱建物及び柵列となる柱穴列は、表4に示すとおりである。

柱穴列2-1は、2区西端で検出した建物で、桁行2間、梁間1間以上の南北棟である。柱間は1.7～2.2 mを測る。建物の主軸は、N-4°-Eを示す。柱穴形状は円形ないし橢円形状で、直径0.2～0.45 m、深さは0.3～0.65 mを測る。柱穴内埋土は、黒褐色砂混じり粘質シルトで、ススが混じる。小土器片を多く含む。あるいは、にぶい黄褐色砂質土である。

柱穴列2-3は、2区東部で検出した建物で、桁行5間、梁間1間の東西棟である。柱間は1.5～2.4 mを測る。建物の主軸は、N-80°-Eを示す。柱穴形状は円形状で、直径0.2～0.4 m、深さは0.4～0.65 mを測る。柱穴内埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトで、小土器片を多く含む。あるいは黒褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土である。P216からは土師器杯(29)、製塩土器(205)、P147からは上師器杯(32)、そのほか土師器皿片、甕片などが出土した。

柱穴列2-4は、2区中央部で検出した柵列で、間隔はそろわないが東西方向10間、約11.8 mにわたる。柱間は0.6～2.1 mを測る。柱穴内埋土は、黒褐色砂混じり粘質シルト、にぶい黄褐色砂質土である。主軸は概ね東西方向を示し、溝170・溝171にはほぼ沿って延びている。P150からは、土師器杯片などが出土した。また、P150・P165内には人頭大石が入る。



第12図 2区第2面造構平面・断面図

溝 170・溝 171・溝 172 (第 12 図)

溝 170・溝 171 は、調査区中央部南側で検出した東西方向に延びる溝である。途中、攪乱により分断されているが、本来統一していたものと考えられる。溝の検出幅は 0.3 ~ 0.5 m、深さは 0.2 ~ 0.5 m を測る。埋土は黒褐色小けい砂多く混じる粘質シルトで、遺物は出土しなかった。溝の断面はコの字状にやや深く切り込む。柵列とした柱穴列 2-4 に沿って直線的に東西方向に延びることから、建物範囲を区画する溝になるものと考えられる。

溝 172 は、調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝である。検出幅は 0.15 m、深さは 0.4 ~ 0.6 m を測る。細く深く切り込む。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトで、遺物は出土しなかった。溝下層には人頭大の石が並んで入る状況が見られた。溝 171・170 に直行する区画溝になるものと考えられる。

遺構 174・遺構 142・遺構 175 (第 12 図)

遺構 174 は、調査区中央部から東側にかけて東西方向に延びるもので、検出幅は 0.5 ~ 1.2 m、深さは 0.05 ~ 0.1 m を測る。断面は浅い皿状を示す。埋土は僅かに砂が混じる黒褐色粘質シルトである。流水状況が見られないことから、溝状の浅い遺構になるものと考えられる。遺構内から土師器杯 (28)、土師器甕片 (35)、土師器片、須恵器片、さらに製塙土器の細片が多く見られた。遺構内に廃棄したものと推定される。また、遺構 174 内の P 146 から白玉 (174) が出土している。遺構 142・遺構 175 の不定形のやや深い遺構内から、製塙土器の細片が多く出土した。遺構 142 及び遺構 175 は検出時において、東西方向に延びる溝 174 に続く南北方向の溝としていたが、断面の形状などから土坑状遺構になるものと考えられる。

遺構 142 は、やや長い楕円状を示す遺構で、検出幅は 0.4 m、深さは 0.5 ~ 0.6 m を測る。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトで、ススが多く混じる。遺構内から土師器杯 (33)、製塙土器 (187.189.194) のほか、製塙土器の細片が数多く出土した。

遺構 175 は、溝状に長い遺構で、検出幅は 0.4 ~ 0.7 m、深さは 0.1 ~ 0.6 m を測る。埋土は黒褐色僅かに砂混じる粘質シルトで、ススが多く混じる。遺構内から土師器杯 (24 ~ 27)、土師器甕 (36) の他、製塙土器 (188.196.203.204) の細片が数多く出土した。

遺構 174・175・142・P146 や周辺遺構、包含層から数多くの製塙土器片や白玉が出土した。これらの遺構内埋土にはスス・炭化物片が見られることから、火を伴う作業や祭祀が行われていたものと考えられる。平成 19 年度の試掘調査においても、製塙土器片が出土している。

掲載番号	形態	柱行		梁間		柱間 (m)	方位	柱形状	柱穴 (m)		持続
		間	(m)	間	(m)				規格	深さ	
2-1	建物	2	3.50	1	2.20	1.7 ~ 2.2	N-4° - E	楕円・円形	0.2 ~ 0.45	0.3 ~ 0.65	第 12 図
2-2	建物 / 柱列	1	1.70	—	—	1.7	N-2° - E	円形	0.38 ~ 0.4	0.35	第 12 図
2-3	建物	5	9.60	1	1.50	1.5 ~ 2.4	N-80° - E	楕円・円形	0.2 ~ 0.4	0.4 ~ 0.65	第 12 図
2-4	柵列	10	11.80	—	—	0.6 ~ 2.1	N-89° - E	楕円・円形	0.15 ~ 0.45	0.25 ~ 0.57	第 12 図
2-5	柵列	3	3.80	—	—	1.3 ~ 1.5	N-90° - E	楕円・円形	0.36 ~ 0.48	0.33 ~ 0.61	

表 4 2 区第 2 面建物・柱穴列一覧表

柱穴 (P165・P150・P113・P182) (第 12 図)

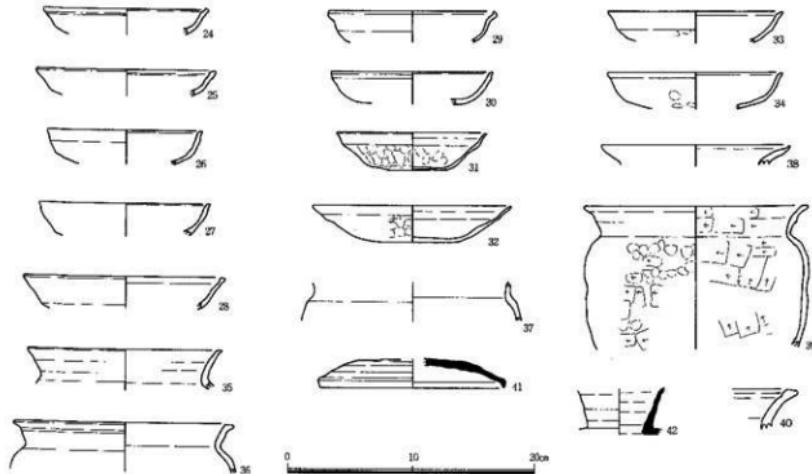
P165・P150 は、調査区中央部南辺の柵列に相当する柱穴列 2-4 の柱穴である。P165 は、検出形が概ね円形状で、直径が 0.32 m、深さは 0.35 m を測る。P150 は、検出形が梢円形状で、直径が 0.38 m、深さは 0.65 m を測る。いずれも柱穴内下層に人頭大の石が中央に入る。これらの柱穴列は柵列と見られるが、柱穴内に石を配していることから仮設的なものではなく、建物などに併設する柵列になるものと考えられる。

P113 は、調査区西端部で検出した柱穴列 2-2 の柱穴である。検出形は円形状で、直径 0.40 m、深さは 0.36cm を測る。柱穴内下層には人頭大の石が入る。

P182 は、調査区西端部で検出した柱穴である。検出形は円形状で、直径 0.30 m、深さは 0.20 m を測る。柱穴上層部に人頭大の石が入る。埋土中にも小石が多く見られた。P182 の周辺では、同様に柱穴内に小け、石の入るもののが幾つか見られた。柱穴を埋める際小石を含む土で埋め、整地したものと考えられる。

第 2 面出土遺物 (第 13・37 図、図版 15)

第 2 面では、建物柱穴、溝、他造構内から多くの遺物が出土した。出土遺物の大半は土師器片で、皿 (24.25)・杯 (26~34)・壺 (36)・甕 (35.37~40)・羽釜片などが見られた。また、須恵器杯・蓋 (41)・壺 (42)・壺体部片のほか、黒色土器片などが見られた。特に製塙土器片 (187 ~ 208.212) が顕著に見られたが、大半が細片であったため、復元、実測できるものは僅かであった。また、P 146 から土師器皿・杯・須恵器杯片などと共に白玉 (174) が出土した。包含層からは石鐵 (175) やサヌカイトの剥片 (176.177.179) などが出土した。出土した遺物は概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半 (7~9 世紀) に相当する。



第 13 図 2 区第 2 面出土遺物

第3面（第14図、図版7）

第2面から、IV層 黒褐色粘質シルト層及び暗褐色砂混じり粘質シルト層を除去した、V層 黒褐色砂混じり粘質シルト層上面で、第3面遺構を検出した。第3面のベース層となるV層は北堤部の東側で厚く、北堤中央部から西部で黒色+暗褐色砂混じり粘質シルト層となり、西側に向けて低くなる。検出高はT.P.67.6～67.4mを測る。第3面では主に大型の方形状の柱穴列を検出した。大型建物や柵列になるものと思われる。

掘立柱建物・柵列（第14図、表5）

第3面では、大型の建物柱穴を検出した。概ね東西方向に柱穴が並ぶ状況は確認できたが、調査区の幅が狭く、建物の規模や広がりを確定することはできなかった。

2区第3面で検出した掘立柱建物及び柵列となる柱穴列は、表5に示すとおりである。

柱穴列2-11は、2区西端部で復元した建物で、桁行2間、梁間1間以上の南北棟である。柱間は1.2～1.6mを測る。建物の主軸は、N-5°-Eを示す。柱穴形状は隅丸方形で、一辺0.55×0.7m、深さは0.3～0.4mを測る。埋土は黒褐色粘質シルト及び黒褐色砂混じり粘質シルトである。小土器片が混じるが判別できるものはなかった。

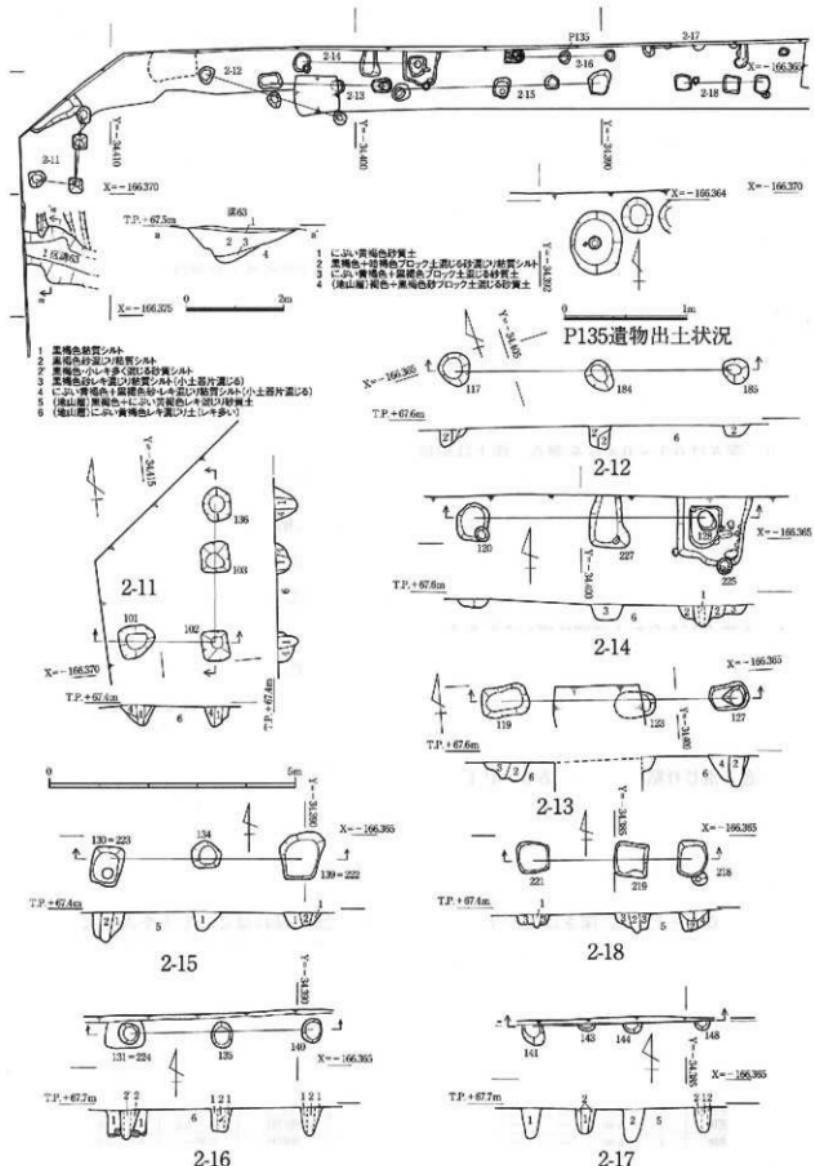
柱穴列2-12は、2区中央部やや西側で検出した建物柱穴列で、桁行2間以上、延長5.8mを測る。柱間は2.8～3.0mを測る。主軸はN-75°-Wを示す。柱穴形状は楕円形で、直径0.5～0.65m、深さは0.25～0.52mを測る。埋土は黒褐色砂・小石が多く混じるシルトで小石を多く含む。柱を抜いた後小石を含む土で埋め戻しをしたものと考えられる。

柱穴列2-13は、柱穴列2-12の東側で検出した建物柱穴列で、桁行2間、延長4.8mを測る。P123が試掘抗で切られるが、柱間は2.0～2.8mを測る。主軸はN-87°-Wでほぼ東西方向に並ぶ。柱穴形状は長方形で、一辺0.4～0.6m×0.7～1.0m、深さは0.28～0.67mを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトである。P127から土師器皿（34）、須恵器壺（42）、土師器羽釜片、須恵器片などが出土した。

柱穴列2-14は、柱穴列2-13の北側で検出した建物柱穴列で、桁行2間、延長4.8mを測る。柱間は2.3～2.5mを測る。主軸はN-90°-Wで東西方向に並ぶ。柱穴形状は概ね方形で、一辺0.6m×0.8～1.2m、深さは0.2～0.45mを測る。P128内部にはこぶし大や人頭大石が多く見られた。P128から製塙土器片、土師器皿・杯・碗・羽釜片・壺片、須恵器片などが出土した。

掘立番号	形態	桁行		梁間		柱間(m)	方位	柱形状	柱穴 (m)		標高
		間	(m)	間	(m)				規格	深さ	
2-11	建物	2	3.00	1	1.60	1.2～1.6	N-5°-E	隅丸方形	0.55～0.7	0.3～0.42	第14回
2-12	建物/P柵列	2	5.80	—	—	2.8～3.0	N-75°-W	楕円形	0.5～0.65	0.25～0.5	第14回
2-13	建物	2	4.80	—	—	2.0～2.8	N-87°-W	隅丸方形	0.5～0.94	0.28～0.67	第14回
2-14	建物	2	4.80	—	—	2.3～2.5	N-90°-E	方形状	0.65～1.1	0.18～0.42	第14回
2-15	建物	2	5.00	—	—	2.0～2.2	N-90°-E	方形状	0.52～1.0	0.25～0.6	第14回
2-16	建物	2	5.40	—	—	1.6～1.8	N-89°-E	楕円形	0.4～0.8	0.5～0.6	第14回
2-17	建物	3	4.00	—	—	1.0～2.5	N-90°-E	楕円形	0.35～	0.5～0.7	第14回
2-18	建物	2	3.50	—	—	1.5～2.0	N-90°-E	方形状	0.6～0.7	0.2～0.4	第14回
2-19	建物	1	1.40	1	2.00	1.4～2.0	N-5°-W	円・不定形	0.25～0.5	0.45～0.65	

表5 2区第3面建物・柱穴列一覧表



第14図 2区第3面遺構平面・断面図

柱穴列 2-15 は、調査区中央部で検出した建物柱穴列で、桁行 2 間、延長 5.0 m を測る。柱穴列はさらに西に延びる可能性がある。柱間は 2.0 ~ 2.2 m を測る。主軸は N-90°-W で東西方向に並ぶ。柱穴形状はやや不定形な方形状で、一辺 0.6 m × 0.6 ~ 1.0 m、深さは 0.25 ~ 0.6 m を測る。P 130 からは、土師器把手 (49)、土師器甕 (50)、P 139 からは、土師器皿・杯・羽釜 (48)・甕、須恵器杯 (52)・蓋 (51)・甕片、内黒の黒色土器椀片、須恵器蓋片などが出土した。P134 からは、内黒の黒色土器椀片、土師器皿・杯・甕片などが出土した。

柱穴列 2-16 は、柱穴列 2-15 の北側で検出した建物柱穴列で、桁行 2 間、延長 5.4 m を測る。柱間は 1.6 ~ 1.8 m を測る。主軸は N-89°-W でほぼ東西方向に並ぶ。柱穴形状は橢円形状で、検出径 0.4 ~ 0.8 m、深さは 0.25 ~ 0.6 m を測る。P 135 の柱痕内から、土師器杯 (31) が出土した。柱材を抜き取った後に、土師器杯を埋納したものと推測される。このほか、P 131・P 140 から製塙土器片、土師器皿・杯、内黒の黒色土器椀、土師器羽釜片、須恵器片などが出土した。

柱穴列 2-17 は、柱穴列 2-16 の東側で検出した建物柱穴列で、北壁に半切される。桁行 3 間、延長 4.0 m を測る。柱穴列はさらに西に延びる可能性がある。柱間は 1.0 ~ 2.5 m を測る。主軸は N-90°-W で東西方向に並ぶ。柱穴形状は橢円形状で、検出径 0.4 m、深さは 0.25 ~ 0.7 m を測る。P 148 からは、製塙土器 (200)、土師器片、P 143 からは、土師器杯片などが出土した。

柱穴列 2-18 は、柱穴列 2-17 の南側で検出した建物柱穴列で、桁行 2 間、延長 3.5 m を測る。柱間は 1.5 ~ 2.0 m を測る。主軸は N-90°-W で東西方向に並ぶ。柱穴形状は方形状で、一辺 0.6 m × 0.7 m、深さは 0.25 ~ 0.6 m を測る。P 218 からは、土師器杯 (43.44)、土師器杯高台 (45)、土師器壺 (46)、小型丸底甕 (47)・甕 (39) などが出土した。P 219 からは、土師器壺 (40)、製塙土器片 (198)、土師器羽釜片・杯片などが出土した。

建物柱穴列 2-13、2-15、2-18 は、柱穴の掘り方が大型の方形状を示すもので、ほぼ東西方向に主軸をもつ建物である。いずれも桁行 2 間を測る。調査区が狭く建物の幅や規模を確定することはできなかったが、それぞれの建物柱穴列は概ね同一の軸線上に並んでいた。隣り合う建物柱列の間隔は均一ではないが、方位を意識し建物が配置されたものと考えられる。調査区西端で検出した建物柱穴列 2-11 の建物北辺も、同一軸線上に接するものと考えられる。柱穴内より出土した遺物から、建物柱穴列 2-13、2-15、2-18 は、飛鳥・奈良時代～平安時代前半（7～9世紀）頃に相当するものと考えられる。方位を意識して配置された倉庫などの建物群が想定される。

建物柱穴列 2-14、2-16、2-17 は、柱穴の形状、柱間の数や距離が不均等であるが、いずれも建物柱穴列の主軸が、概ね N-90°-W の東西方向を示す。総じて柱穴内から遺物片が多く出土しており、柱穴内に土器が埋納されているもの（P135）なども見られることから、柱材を抜いた後柱穴を埋め戻し整地を行ったことがうかがえる。柱穴内より出土した遺物から、建物柱穴列 2-14、2-16、2-17 は、飛鳥・奈良時代（7～8世紀）頃に相当するものと考えられる。

これらのはかにも、建物の柱穴と考えられる柱穴は幾つか見られたが、調査区の幅が狭いため、建物として復元するには至らなかった。

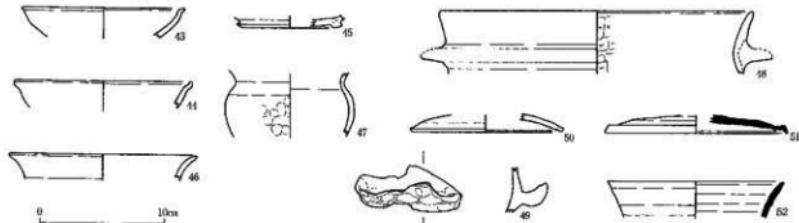
第3面及び包含層出土遺物（第15・16図、図版15）

第3面では、主に建物柱穴内から遺物が出土した。出土した遺物の大半は土師器で、皿・杯・高杯・壺・甕・羽釜片などが出土した。そのほか、内黒の黒色土器A類椀、須恵器杯・杯蓋・壺・甕・鉢などが見られた。また、製塙土器片が数多く出土した。飛鳥・奈良時代～平安時代前半（7～9世紀）頃に相当する。

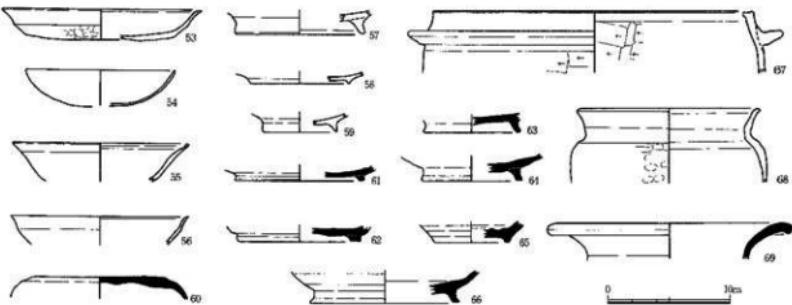
2区の遺物包含層からは、土師器皿（53）・杯（54.55）・椀（57）・壺・甕（68）・羽釜片（67）、須恵器杯（61.62）・杯蓋（60）・椀（63.64）・壺（65.66.69）・甕・高杯片、黒色土器椀（56.58.59）、瓦器椀、また、細片ではあるが青磁碗、白磁碗、綠釉陶器片などが出土した。そのほか、製塙土器片（187～208）、滑石製白玉（174）、サスカイト石鐵（175）・剥片（176.177.179）なども見られた。概ね古墳時代後期～鎌倉・室町時代（6世紀後半～12世紀頃）の遺物を含む。

小結

2区では、第1面で中世の耕作溝跡を検出した。第2面では、掘立柱建物の柱穴列や柵列、東西方向に直線的に延びる溝を検出したほか、遺構175・遺構142などから製塙土器片が多く出土した。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半（7～9世紀）頃に相当する。第3面では、主に大型の方形状の建物柱穴列を検出した。2時期の建物群があることがわかった。特に、方位を意識して配置された建物群が存在することから、一般的な掘立柱建物ではなく、整然と並ぶ郡衙や寺院の建物や回廊、豪族氏族の大型建物、倉庫群などが想起される。概ね飛鳥・奈良時代（7～8世紀）頃に相当する。



第15図 2区第3面出土遺物



第16図 2区出土遺物

3. 3区の調査

堤体改修部分の北堤部の東半部（東西約60m）を3区とした。細分すると4面の遺構面を確認した。3区は2区から続く北堤部の東西方向の調査区で、地山層は東側が僅かに高く成る。

第1面（第17図、図版8）

I層 提体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去したIII層上面で、東西方向に延びる溝及び南北方向を示す耕作溝、浅い小土坑、ピットなどを検出した。第1面として一度に検出したが、遺構に切り合が見られ、細分すると4層に分かれる。検出高はT.P. 67.4mを測る。

II層 旧耕土・床土層を除去すると東西方向に延びる溝を検出した。溝230・溝231は連なる溝で、検出幅0.15～0.3m、延長約23mを測り、断面が浅い皿状を示す東西方向の溝である。埋土は灰黄褐色砂混じり粘質シルトで、埋土内から土師器小皿片、瓦器小片などが出土した。溝は直線的に東西方向に長く延びることから、中世代の耕作用の排水溝、あるいは土地区画の溝になるものと考えられる。

溝230・溝231に切られるように、遺構294・300・307・319などの浅い落ち込み状の小土坑群を検出した。遺構294はやや南北方向に隅丸方形状に広がる小土坑で、検出幅約0.8m、検出長約1.5m、深さ0.03～0.05mで、断面形が薄い皿状を示す。埋土は黒褐色砂質シルトで細かい炭化物が含まれる。このほか、遺構300・307をはじめ所々に埋土に炭化物を含む浅い落ち込み状の小土坑が多く見られた。埋土内から、土師器片、黒色土器片、須恵器片などの細片が多く出土した。下層の溝などの底に炭化物が混じる土壤が堆積し、浅い落ち込み状の小土坑になったものと見られる。耕作地として機能していたものではなく、荒廃地であったと思われる。

炭化物の入る浅い落ち込み状の小土坑群を取り除いた下層面から、東西方向の溝や東西溝に切られる南北方向の溝を検出した。溝313は検出幅0.2～0.3m、延長約15m、深さは0.03～0.05mで、断面形は薄い皿状を示す東西方向の溝である。埋土は褐灰色粘質シルトで小土師器片を含む。黒色土器片、土師器片などが出土した。溝は直線的にやや長く延びることから、耕作用の排水溝、あるいは土地区画の溝と考えられる。

東西方向溝に切られる状況で、南北方向の溝（溝234・235・299・300など）を数条検出した。南北方向溝は検出幅が0.2～0.4mで、深さは0.03～0.1mを測る。断面は浅い皿状を示す耕作溝である。埋土は黒褐色ないし灰黄褐色砂混じり粘質シルトで、埋土内から須恵器小片、土師器小片・甕片、黒色土器片、製塙土器片などが出土した。南北方向の溝は調査区全域で見られることから、耕作地として利用されていたことがうかがえる。

第1面では、細分すると4層の遺構を確認することができた。上層の東西方向溝（溝230・231）は、鎌倉時代頃に相当する。東西方向溝に切られる浅い落ち込み状の小土坑群は、平安時代末頃から鎌倉時代に相当する。さらに、東西方向溝、下層の南北方向の耕作溝は平安時代末頃に相当するものと考えられる。

第2面 (第17・18図、図版8・9)

北堤中央部では、Ⅱ層 旧耕土・床土層及びⅢ層 灰黄褐色土層を除去したⅣ層上面で、第2面の遺構を検出した。東側に向かってやや低くなり、検出高はT.P.67.5～67.6mを測る。主に掘立柱建物の柱穴列や柵列を数多く検出した。数度にわたる建て替え痕がみとめられ、柱穴は重複しているものが多い。また、建物柱穴内には人頭大の石が入るもの、土師器杯など遺物を埋納するものが多く見られた。

掘立柱建物・柵列 (第17～21図、表6、図版8・9)

第2面では、数多くの建物柱穴、柵列などを検出した。概ね東西方向に柱穴列が並んでいる状況は確認できたが、調査区の幅が狭いため、建物の規模や広がりを確定することはできなかった。

3区第2面で検出した掘立柱建物及び柵列となる柱穴列は、表6に示すとおりである。

柱穴列3-1は、2区東端で検出した建物2-3に添って東西方向に並ぶ柱穴列で、桁行3間以上、延長約5.3mを測る。建物になると思われる。柱穴列の主軸はN-75°-Eを示す。柱穴内から土師器皿・杯・甕片・製塙土器片などが出土した。

柱穴列3-2は柵列である。桁行3間、延長3.4mを測る。柱穴内から土師器小片が出土した。

柱穴列3-3は建物と考えられる。柱穴の検出径は0.35～0.55mで隅丸方形状を示す。柱穴列の主軸は、N-82°-Wを示す。柱穴内には柱材を抜き取った後に人頭大の石を設置するもの(P392・390・389・381・364)がある。柱穴内から土師器杯(76.79)・皿(92)・台付杯(93)・甕(82)、須恵器杯・杯蓋(90)・壺(84)・甕、黒色土器片・製塙土器片(220)などが出土した。

柱穴列3-4は、桁行4間、梁間1間の建物で、主軸はN-81°-Eを示す東西棟である。柱穴内には柱材を抜き取った後に人頭大の石を設置するもの(P385-364)が見られた。柱穴内から土師器皿・杯(74.75)・甕・製塙土器片(213.221.222)、須恵器杯片などが出土した。

柱穴列3-5は、桁行2間、延長4.4mを測る柱穴列で、主軸はN-85°-Eを示す。柱穴内から土師器椀高台片・土師器把手・須恵器片などが出土した。

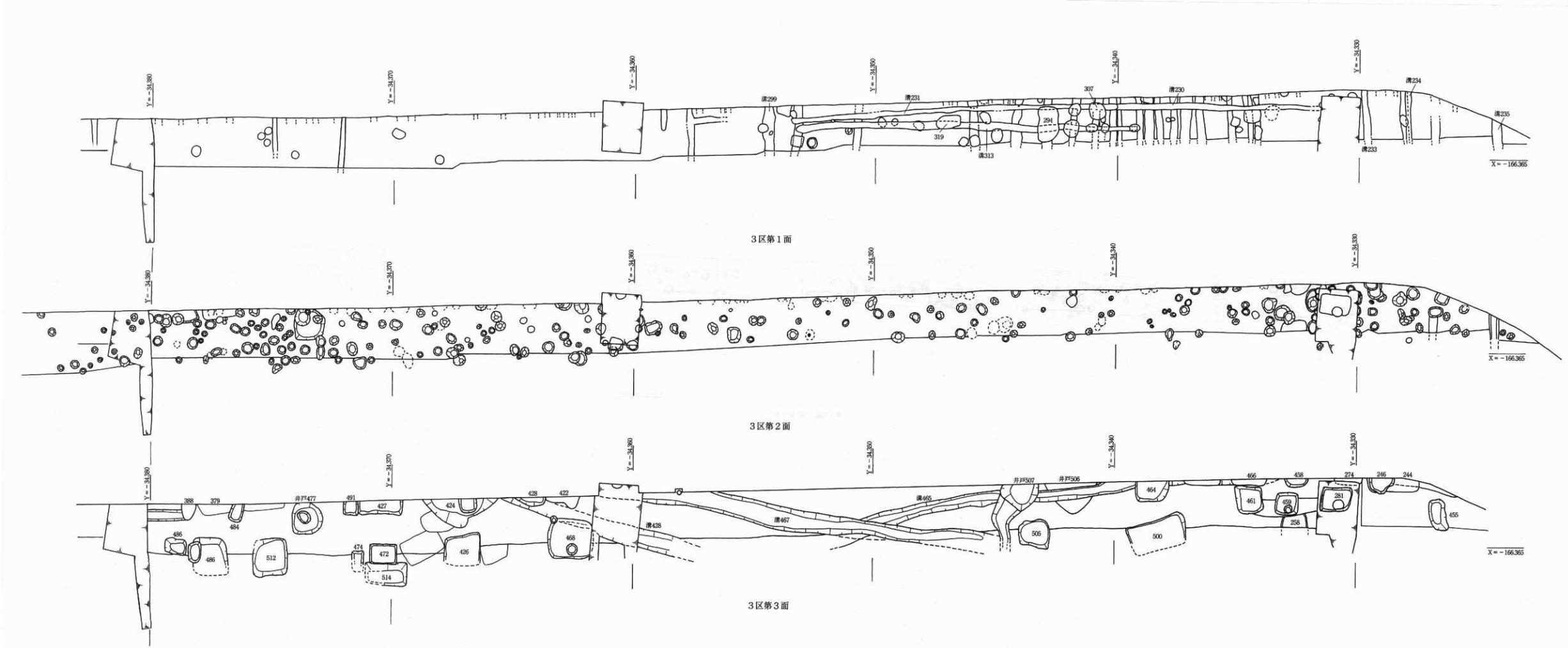
柱穴列3-6は、桁行3間、延長4.5mを測る柱穴列で、主軸はN-74°-Wを示す。柱穴内から土師器皿(73)・杯・碗・羽釜片・製塙土器片などが出土した。

柱穴列3-7は、桁行2間、梁間1間の建物で、主軸はN-85°-Eを示す東西棟である。柱穴内から土師器皿・杯片・甕片・須恵器平瓶(99・286)・製塙土器片(219)などが出土した。

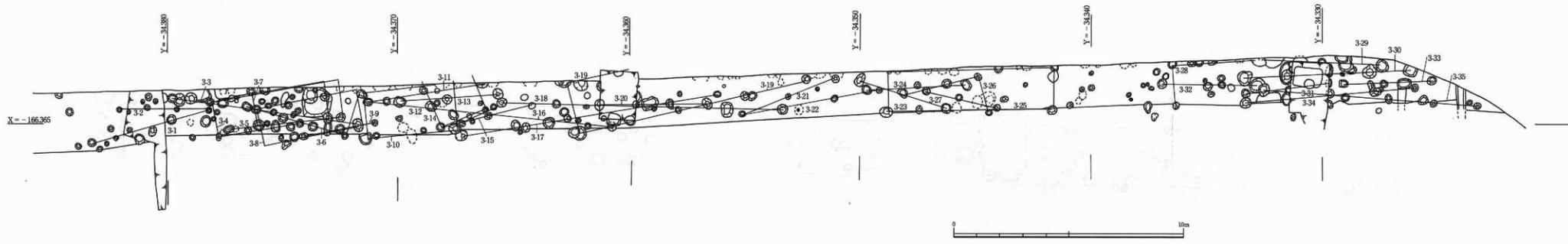
柱穴列3-8は、桁行3間、梁間1間の建物で、主軸はN-79°-Eを示す東西棟である。柱穴内から土師器杯片・甕片・須恵器杯片・小壺片・製塙土器片(216)などが出土した。

柱穴列3-9は、桁行2間、延長3.2mを測る柱穴列で、主軸はN-80°-Eを示す。柱穴内から土師器皿・杯片・須恵器平瓶・製塙土器片などが出土した。

柱穴列3-10は、桁行2間、梁間1間の建物で、主軸はN-83°-Eを示す東西棟である。北辺の柱穴については、北壁内で柱穴痕を確認した。いずれも検出径0.4～0.55mで梢円形状を示す。柱穴内から土師器小片が出土した。

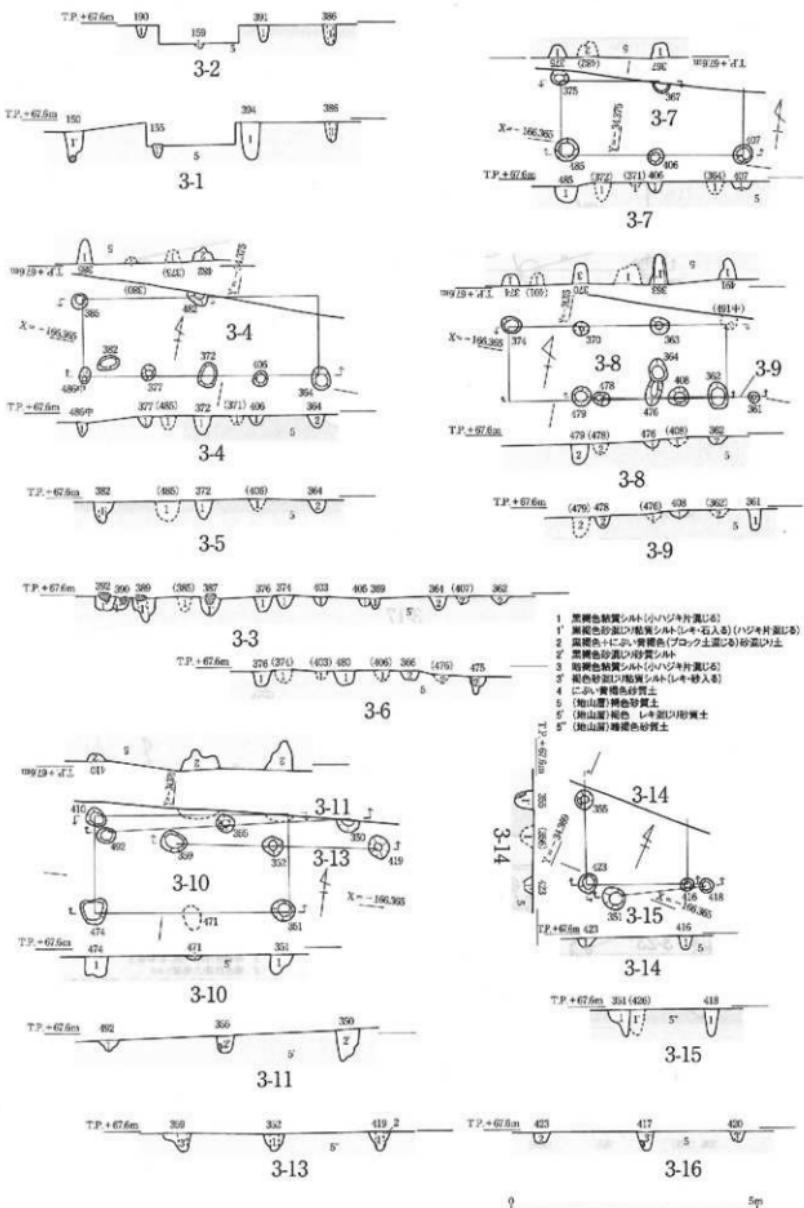


第17図 3区第1～3面造構平面図



第18図 3区第2面平面図

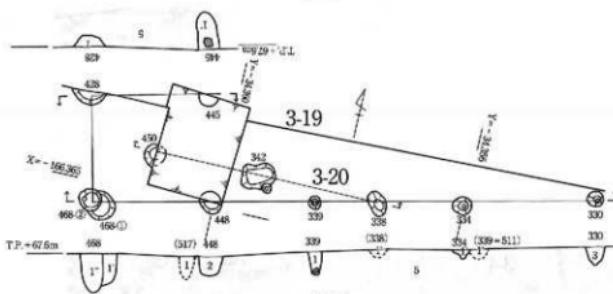




第19図 3区第2面遺構平面・断面図(1)



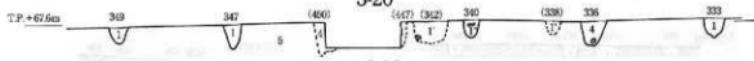
3-12



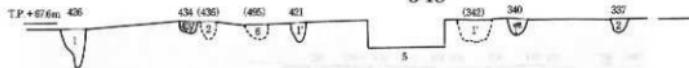
3-19



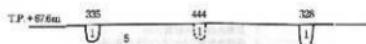
3-20



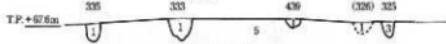
3-18



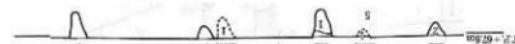
3-17



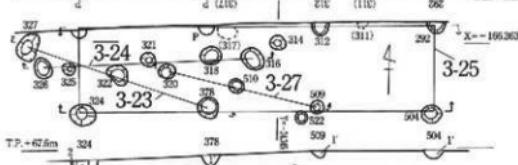
3-21



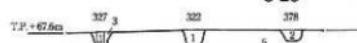
3-22



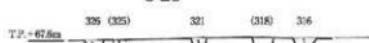
3-26



3-25



3-23



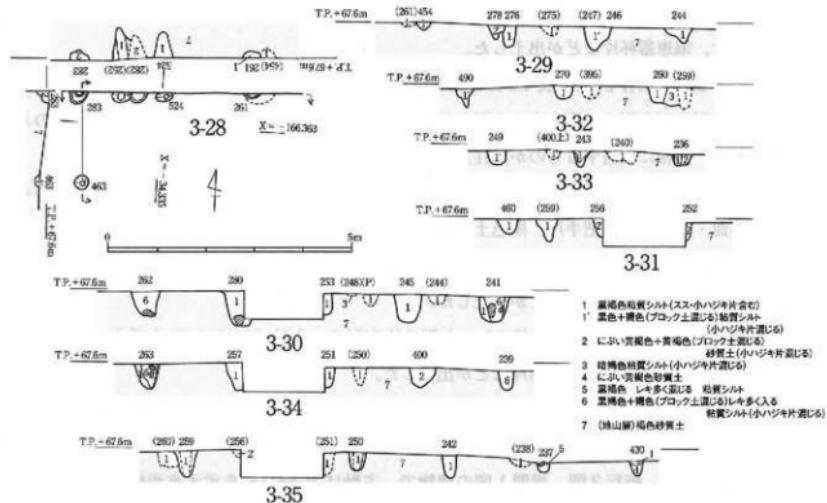
3-24



3-27

5m

第20図 3区第2面造構平面・断面図(2)



第21図 3区第2面造構平面・断面図(3)

柱穴列3-11は、桁行2間、延長5.0mを測る柱穴列で、主軸はN-81°-Eを示す。検出径0.35~0.5m、深さは0.2~0.65mで梢円形状を示す。埋土は黒褐色砂混じり砂質シルトで、小石などが含まれる。埋め戻し土と考えられる。柱穴内から遺物は出土しなかった。

柱穴列3-12は、桁行4間、延長10.6mを測る柱穴列で、主軸はN-85°-Wを示す。建物の柱穴と見られる。埋土は黒褐色ないし黒色砂混じり粘質シルトで、ススなどの炭化物が含まれる。柱穴内から土師器杯、黒色土器片、製塙土器片などが出土した。

柱穴列3-13は、桁行2間、延長4.2mを測る柱穴列で、主軸はN-87°-Eを示す。建物の柱穴と見られる。検出径0.5~0.55m、深さは0.3~0.65mで梢円形状を示す。遺物は出土しなかった。

柱穴列3-14は、桁行1間、梁間1間以上の建物で、主軸はN-25°-Wを示す。検出径は0.25~0.4m、深さは0.2~0.4mで円形を示す。遺物は出土しなかった。

柱穴列3-15は、桁行2間、延長4.0mを測る柱穴列で、主軸はN-28°-Wを示す。遺物は出土しなかった。

柱穴列3-16は、桁行2間、延長4.2mを測る柱穴列で、主軸はN-75°-Eを示す。埋土内に小石などが含まれる。埋め戻し土と考えられる。柱穴内から遺物は出土しなかった。

柱穴列3-17は、桁行5間、延長11.2mを測る柱穴列で、主軸はN-80°-Eを示す。柱穴内から土師器小皿・椀片・須恵器蓋片などが出土した。

柱穴列3-18は、桁行5間、延長12.3mを測る柱穴列で、主軸はN-88°-Wとほぼ東西方向を示す。柱穴内から土師器椀(78)、口縁端部「て」字状小皿片・盤片、黒色土器片などが出土した。

柱穴列3-19は、桁行4間、梁間1間以上の建物で、主軸はN-75°-Eを示す。埋土内に石が

入るもの（P 445・339・330）もあり、埋め戻し土と考えられる。柱穴内から土師器小皿・杯（95）、杯片・甕片、須恵器杯片などが出土した。

柱穴列 3-20 は、桁行 2 間、延長 4.8 m を測る柱穴列で、主軸は N-88°-W とほぼ東西方向を示す。柱穴の検出形は不定形で、埋土中に小石などが含まれる。柱材などを抜き取り埋め戻したものと考えられる。建物に相当するものか。柱穴内から土師器小片が出土した。

柱穴列 3-21 は、桁行 2 間、延長 4.4 m を測る柱穴列で、主軸は N-70°-E を示す。柱穴内から土師器皿・椀・甕片・把手片・黒色上器椀片などが出土した。

柱穴列 3-22 は、桁行 3 間、延長 4.1 m を測る柱穴列で、主軸は N-80°-E を示す。柱穴内から土師器皿・杯片・製塙土器片などが出土した。

柱穴列 3-23 は、桁行 2 間、延長 4.0 m を測る柱穴列で、主軸は N-72°-W を示す。柱穴内から土師器小皿・皿・杯片・須恵器片などが出土した。

柱穴列 3-24 は、桁行 2 間、延長 4.4 m を測る柱穴列で、主軸は N-87°-W とほぼ東西方向を示す。柱穴内から土師器小皿・杯・椀片・須恵器片などが出土した。

柱穴列 3-25 は、桁行 3 間、梁間 1 間の建物で、主軸は N-88°-E を示す東西棟である。北壁断面で 2 柱穴を確認した。柱穴内からは土師器小皿・杯片・須恵器片などが出土した。

柱穴列 3-26 は、桁行 2 間、梁間 1 間の建物で、主軸は N-75°-E を示す。P 318 からは土師器皿・杯・椀片・甕（83）、黒色土器椀片・青磁碗片・焼土塊などが出土した。

柱穴列 3-27 は、桁行 2 間、延長 3.2 m を測る柱穴列で、主軸は N-78°-W を示す。柱穴内から土師器皿・杯・椀・甕片・須恵器甕片などが出土した。

柱穴列 3-28 は、桁行 2 間、梁間 1 間の建物で、主軸は N-86°-E を示す東西棟である。柱穴内からは土師器皿・杯片・黒色土器椀片などが出土した。

柱穴列 3-29 は、桁行 3 間、延長 5.6 m を測る柱穴列で、主軸は N-87°-W とほぼ東西方向を示す。柱穴は検出径約 0.6 m の隅丸方形状を示す。建物柱穴と考えられる。柱穴内から土師器皿・杯・椀・甕片・黑色土器片などが出土した。

柱穴列 3-30 は、桁行 4 間、延長 7.3 m を測る柱穴列で、主軸は N-86°-E とほぼ東西方向を示す。柱穴は検出径 0.5 ~ 0.6 m の隅丸方形状を示す。建物柱穴と考えられる。柱穴内には石が入るもの（P 262・280・241）も見られた。柱穴内から土師器小皿・皿（71）・杯・椀・甕（89）・羽釜片・黒色土器椀（86 ~ 88）・須恵器片などが出土した。

柱穴列 3-31 は、桁行 2 間、延長 3.6 m を測る柱穴列で、主軸は N-83°-E を示す。建物柱穴と考えられる。埋土は地山ブロック土が混じる埋め戻し土である。土師器小片などが出土した。

柱穴列 3-32 は、桁行 2 間、延長 4.0 m、主軸は N-90°-W で東西方向を示す。建物柱穴と考えられる。柱穴内から土師器皿・杯・椀・羽釜片・甕片・須恵器片などが出土した。

柱穴列 3-33 は、桁行 2 間、延長 4.0 m を測る柱穴列で、主軸は N-88°-E とほぼ東西方向を示す。柱穴列 3-32 と同一線上に並ぶ。柱穴内から土師器皿・杯・甕片などが出土した。

柱穴列3-34は、桁行4間、延長7.4mを測る柱穴列で、主軸はN-84°-Eを示す。建物柱穴と考えられる。柱穴内には石が入るもの(P 263・251・239)も見られた。P 251では土師器高杯脚部(80)、須恵器壺片、土師器皿・杯、黒色土器片などの遺物の上に、人頭大の石が3~4個入れられていた。柱穴内から土師器小皿(70.72)・皿・杯・壺片・羽釜片、黒色土器碗(85)、須恵器片など多くの遺物が出土した。

柱穴列3-35は、桁行5間、延長9.3mを測る柱穴列で、主軸はN-86°-Wとほぼ東西方向を示す。建物柱穴と考えられる。柱穴内から土師器小皿・皿・杯・碗(77)・羽釜・壺・壺片、黒色土器片、須恵器片などが出土した。

このほか、建物・柱穴列として復元できなかったが、柱穴内に人頭大の石を入れたものや、土器片を埋納したものなどが幾つか見られた。P 398では土師器小皿・杯片などと一緒に、人頭大の石や軽石、焼土塊などが入れられていた。また、P 390ではこぶし大の凝灰岩が入れられていた。

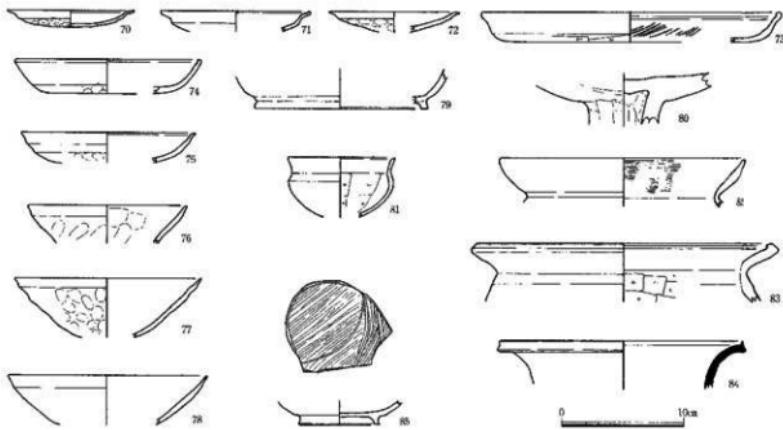
第2面では、多くの建物柱穴列・柵列を検出した。一時期にどの位の建物が並存したかは不明であるが、柱穴列の主軸の方向、柱穴内から出土した遺物・埋土などで、僅かに違いが見られた。幾度となく建物が建て替えられたものと推測される。第2面で検出された建物柱穴列・柵列は、概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半(7~10世紀)頃に相当する。

柵柵番号	形態	桁行		梁間		柱間(m)	方位	柱形状	柱穴(m)		柵列
		間	(m)	間	(m)				幅	深さ	
3-1	建物/P列	3	5.30	—	—	1.7~1.8	N-75°-E	円形	0.3~0.44	0.3~0.4	第19回
3-2	柵列	3	3.40	—	—	1.2~1.3	N-90°-E	円形	0.22~0.36	0.1~0.4	第19回
3-3	建物	5	8.30	—	—	1.3~1.8	N-82°-W	円・圓丸方形	0.3~0.58	0.16~0.52	第19回
3-4	建物	4	5.00	1	1.70	1.2~1.7	N-81°-W	楕円	0.22~0.52	0.2~0.5	第19回
3-5	建物/P列	2	4.40	—	—	2.2~2.3	N-85°-E	楕円	0.3~0.52	0.26~0.42	第19回
3-6	建物/P列	3	4.50	—	—	1.4~1.7	N-74°-W	圓丸方形	0.28~0.44	0.2~0.38	第19回
3-7	建物	2	3.80	1	1.60	1.6~2.0	N-85°-E	円形	0.3~0.5	0.12~0.34	第19回
3-8	建物	3	4.60	1	1.50	1.4~1.5	N-79°-E	楕円・円形	0.3~0.56	0.15~0.62	第19回
3-9	建物/P列	2	3.20	—	—	1.5~1.6	N-80°-E	円形	0.24~0.44	0.15~0.43	第19回
3-10	建物	2	4.00	1	2.00	2.0	N-83°-E	楕円形	0.36~0.56	0.12~0.6	第19回
3-11	建物/P列	2	5.00	—	—	2.5	N-81°-E	楕円形	0.34~0.5	0.2~0.64	第19回
3-12	建物	4	10.6	—	—	2.5~2.7	N-85°-W	楕円	0.3~0.5	0.2~0.5	第20回
3-13	建物/P列	2	4.20	—	—	2.0	N-87°-E	楕円形	0.5~0.54	0.22~0.65	第19回
3-14	建物	1	2.00	1	1.80	1.8~2.0	N-25°-W	円形	0.28~0.38	0.2~0.38	第19回
3-15	建物/P列	2	4.00	—	—	2.0	N-29°-W	圓丸形	0.3~0.36	0.55	第19回
3-16	建物	2	4.20	—	—	2.0~2.2	N-75°-E	円形	0.24~0.4	0.2~0.4	第19回
3-17	建物/P列	5	11.20	—	—	2.1~2.3	N-80°-E	楕円・円形	0.34~0.5	0.22~0.8	第20回
3-18	建物/P列	5	12.30	—	—	2.3~2.5	N-88°-W	円・圓丸方形	0.36~0.6	0.34~0.52	第20回
3-19	建物	4	10.40	1	2.20	2.2~3.0	N-75°-E	円形	0.24~0.62	0.2~0.8	第20回
3-20	建物	2	4.80	—	—	2.3	N-89°-W	不定形な方形状	0.38~0.7	0.26~0.7	第20回
3-21	建物/P列	2	4.40	—	—	2.1~2.2	N-70°-E	円形	0.22~0.32	0.34~0.5	第20回
3-22	建物/P列	3	4.10	—	—	1.8~2.2	N-80°-E	円形	0.26~0.46	0.26~0.45	第20回
3-23	建物/P列	2	4.00	—	—	2.0	N-72°-W	楕円形	0.42~0.6	0.25~0.4	第20回
3-24	建物/P列	2	4.40	—	—	2.2	N-87°-E	楕円形	0.32~0.5	0.2~0.3	第20回
3-25	建物	3	7.20	1	1.80	1.8~2.6	N-88°-E	円形	0.3~0.54	0.12~0.56	第20回
3-26	建物	2	3.50	1	1.60	1.4~1.9	N-75°-E	歪む楕円形	0.28~0.42	0.22~0.5	第20回
3-27	P列	2	3.20	—	—	1.5	N-78°-W	円形	0.3~0.34	0.1~0.3	第20回
3-28	建物	2	3.60	1	2.00	1.8~2.0	N-86°-E	円形	0.3~0.36	0.12~0.68	第21回
3-29	建物	3	5.60	—	—	1.7~1.8	N-87°-W	圓丸方形	0.58~0.6	0.15~0.48	第21回
3-30	建物	4	7.30	—	—	1.7~1.8	N-86°-E	圓丸方形	0.48~0.62	0.46~0.7	第21回
3-31	建物/P列	2	3.60	—	—	1.7~1.9	N-83°-E	円形	0.25~0.46	0.3~0.38	第21回
3-32	建物	2	4.30	—	—	2.0	N-90°-E	円・圓丸方形	0.38~0.65	0.26~0.4	第21回
3-33	建物	2	4.00	—	—	1.8~2.0	N-88°-E	円形	0.36~0.38	0.2~0.3	第21回
3-34	建物	4	7.40	—	—	1.7~2.0	N-84°-E	円形	0.28~0.5	0.4~0.6	第21回
3-35	建物	5	9.30	—	—	1.8~1.9	N-88°-W	円・圓丸方形	0.3~0.5	0.18~0.55	第21回

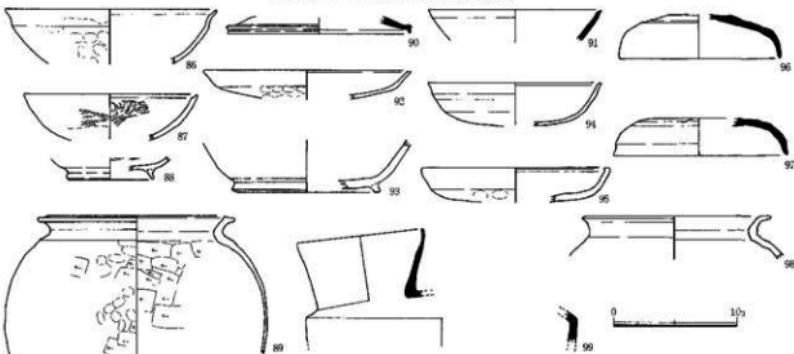
表6 3区第2面建物・柱穴列一覧表

第2面出土遺物（第22・23図、図版16・17・22）

第2面では、建物柱穴内から多くの遺物が出土した。細片が多く実測できたものは僅かであった。P 262から口縁端部を「て」字状にする小皿(71)、P 245から内外面に暗文を施す黒色土器A類椀(86～88)、P 251から脚柱が面を成す土師器高杯(80)などが出土した。出土遺物の大半は土師器片で、小皿(70～72)・皿(73.92)・杯(74.75.79.93～95)・椀(76～78)・高杯(80)・小壺(81)・甕(82.83.89)・羽釜片などが出土した。そのほか、内黒の黒色土器A類椀(85～88)、須恵器杯(91)・杯蓋(90.96.97)・壺(84)・甕片などが見られた。製塙土器片(213.214.216.217.219～222)も数多く出土した。さらに、実測できなかったが青磁碗片、緑釉陶器片やサヌカイトの剥片などが出土した。建物柱穴内から出土した遺物は、概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半(7～10世紀頃)に相当する。



第22図 3区第2面出土遺物(1)



第23図 3区第2面出土遺物(2)

第3面（第17・24図、図版10）

第2面から、IV層 黒褐色砂混じり粘質シルト層及び、黒褐色及びワーブ褐色粘質シルト層を除去したV層 暗褐色砂混じり粘質シルト層上面で、第3面の遺構を検出した。第3面は東側に向かってやや高くなり、検出高はT.P.67.4～67.60mを測る。

第3面では、主に大型の方形状遺構（柱穴）や井戸を検出した。柱穴は、一辺約0.6m以上を測る長方形状のものと、一辺約1m以上を測る大型の隅丸方形状の柱穴が見られた。検出した柱穴は、東西方向に等間隔に並んでいる状況が確認できた。大型の掘立柱建物や柵列になるものと考えられる。

第3面で検出した方形状遺構、大型方形状遺構、及び柱穴は、表7に示すとおりである。

方形状遺構（第24図、表7、カラー図版2・17）

第3面の中央部付近で、概ね東西方向に並ぶ方形状遺構（柱穴）を検出した。柱穴と柱穴の間の距離が不均等であるが、西側の2区第3面において、同様の方形状の柱穴列（2-13、2-15、2-18など）が見られることから、建物柱穴列になるものと考えられる。

列3-①（P 388・P 484・P 491・P 424①）は、中央部北壁に沿って検出した柱穴列である。いずれの柱穴も北側が北壁に切られる。柱穴列の同一軸線上に井戸477がかかれることから、列3-①は2分され、3-①の西側部がP 388-P 491、東側部はP 491-P 424①になる。西側部のP 388-P 491は、柱間が約2.3mを測る。東側部のP 491-P 424①は、柱間が約5.0mを測る。各柱穴は検出幅0.5～0.7m、残存長約0.6mを測り、概ね長方形状を示す。埋土は黒褐色砂・小けい混じり粘質シルトで、ほぼ一気に埋められたものと考えられる。P 388から須恵器杯（91）、P 484から土師器杯（94）、そのほか須恵器壺、土師器甕片などが出土した。

列3-②（P 486①・P 474）は、3区中央部で検出した東西方向の柱穴列で、検出延長は約7.3mを測る。P 486①は列3-①の西側部P 388に対置する遺構で、柱間は南北方向に約2.0mを測る。P 474は列3-①の東側部P 491に対置する遺構で、柱間は南北方向に約2.5mを測る。各柱穴は概ね検出幅0.5～0.6m、残存長0.6～0.88mを測り、長方形状の隅丸方形状を示す。柱穴内から遺物は出土しなかった。

P 489は列3-②P 486①の西側に位置する方形状遺構（柱穴）で、検出幅0.9m、検出長0.7mを測る東西方向に長い長方形状を示す。柱穴から土師器杯片などが出土した。

P 455は調査区東端に位置する方形状遺構（柱穴）で、検出幅1.25m、検出長0.6mを測り、長方形状を示す。柱穴内から遺物は出土しなかった。

東西方向に並ぶ方形状遺構（柱穴）列3-①と列3-②は、2区第3面で検出した柱穴列のように等間隔で明瞭な列を成すものではなく單一的に検出されたものであるが、東西方向の同一軸線上を意識し、また南北方向で柱穴列の各柱穴が概ね対置しているなど、規則的な要因がうかがえる。これらのことから、本来は2区第3面で検出した建物柱穴と同様に、方位を意識して配置された大型建物群が広がっていたものと考えられる。

大型方形遺構（柱穴）（第24図、表7、カラー図版2、図版10・17）

第3面の西半部と東半部で、東西方向に並ぶ大型方形遺構を検出した。一つの遺構の規模が大きく、概ね東西方向に並んでいる状況は確認できたが、遺構の規模や広がりを確定することはできなかった。3区第3面で検出した大型方形遺構及び柱穴は、表7に示すとおりである。

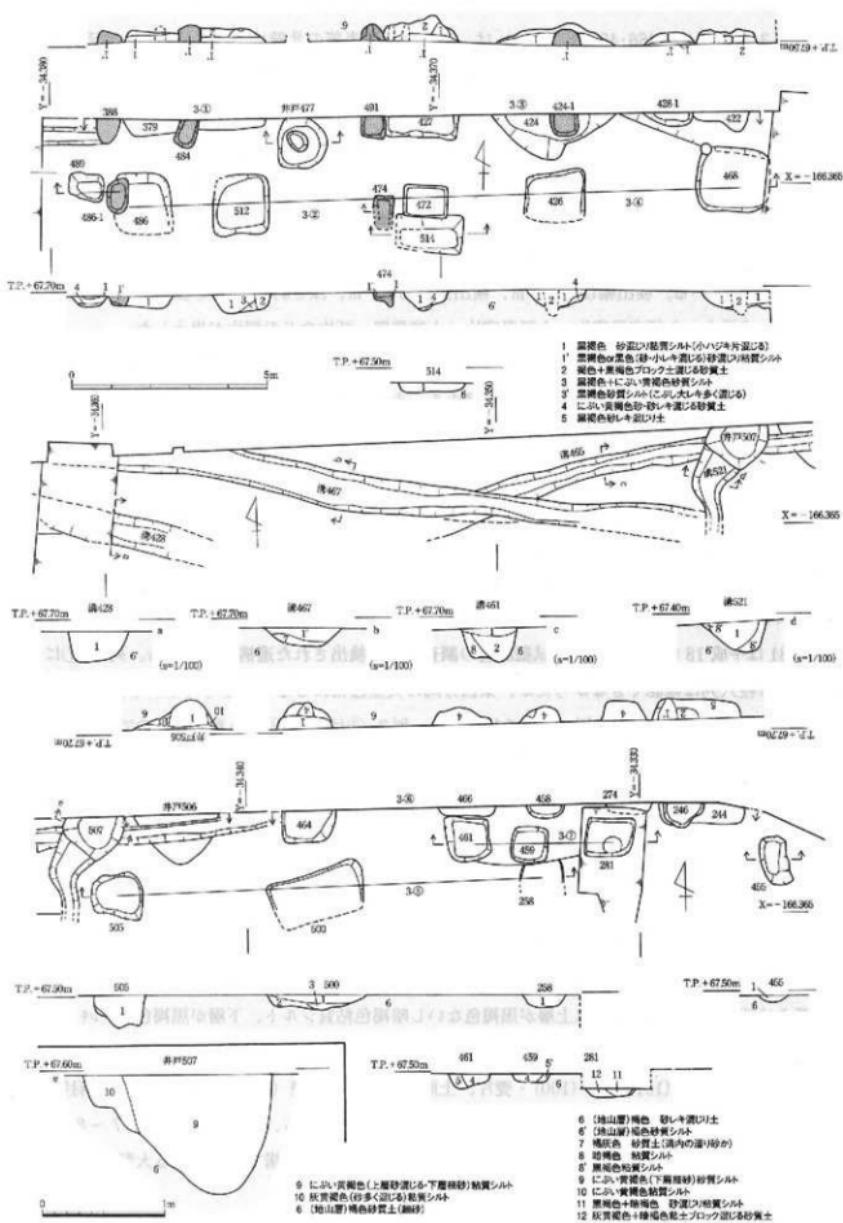
列3-③（P 379・379②・427・424・422）は、3区中央部北壁に沿って検出した東西方向の大型方形遺構（柱穴）列である。検出延長は約16.2mを測る。北壁に切られるため各遺構の規模は不明である。列3-③の軸線上に井戸477があることから、列3-③は2分され、列3-③西側部がP 379-P 379②、東側部がP 427-P 424-P 422となる。P 379-P 379②の遺構間は約2.0mを測る。遺構の検出幅は約1.8mで、大型の隅丸方形を示す。P 427-P 424-P 422の遺構間は4.0～4.5mを測る。検出形状は、P 427が東西方向に長い方形状、P 424は三角形状、P 422は不定形な方形状を示す。遺物は土師器細片のみの出土であった。

列3-④（P 486・512・472+514・426・468）は、列3-③の約2.5m南側で平行して東西方向に並ぶ大型方形遺構（柱穴）列である。検出延長は約12.3mを測る。各遺構（柱穴）は列3-③の遺構（柱穴）にそれぞれ対置する。列3-③同様に東西に2分し、列3-④西側部がP 486-P 512、列3-④東側部がP 472とP 514-P 426-P 468となる。列3-④西側部P 486-P 512の遺構間は約3.0mを測る。遺構の検出幅は約1.5m、残存長約1.25m、深さ約0.4mを測り、大型の隅丸方形を示す。遺物は土師器の細片が出土した。列3-④東側部P 472とP 514-P 426-P 468の遺構間は4.0～4.5mを測る。P 514はP 472に切られる。建物の拡張や建て替えが行われたものと見られる。P 472の検出幅は約1.2m、検出長約1.0m、P 426の検出幅は約1.5m、検出長約1.2m、P 468の検出幅は約1.75m、検出長約1.6mを測る。土師器杯、碗、壺片などが出土した。いずれも大型の隅丸方形を示す。

列3-⑤（P 505・500・258）は、調査区東半部で検出した東西方向に並ぶ大型方形遺構（柱穴）列である。検出延長は約11mを測る。各遺構間は5.5～6.0mを測る。P 505の検出幅は約1.3m、残存長約1.0mを測り、大型の長方形を示す。P 500の検出幅は約2.5m、残存長約1.2mで、やや傾く大型の長方形を示す。P 258は検出幅約1.0m～、残存長約0.6mを測る。遺構の南側は池内にかかり詳しい形状は確認できなかった。遺構内から土師器杯片などが出土した。

掲載番号	形態	桁行 間 (m)		梁間 間 (m)	柱間 (m)	方位	柱形状	柱穴 (m)		備考
		前	後					規格	深さ	
3-①	建物/P列	3	12.3	—	—	2.0～5.0	N-88°-E	0.5×0.7+α～	0.25～0.4	第24図
3-②	建物/P列	1～3	7.3	—	—	6.8	N-88°-E	0.5×0.8+α～	0.2～0.35	第24図
3-③	建物/P列	4	16.2	—	—	2.5～4.5	N-88°-E	1.5～1.9×1.5+α	0.25～0.6	第24図
3-④	建物/P列	4	12.3	—	—	2.5～4.5	N-88°-E	1.2～1.5×0.8+α	0.3～0.6	第24図
3-⑤	建物/P列	2	11.0	—	—	5.0～5.5	N-88°-E	1.3×1.2/2.4×1.4	0.3～0.68	第24図
3-⑥	建物/P列	4	10.8	—	—	2.0～1.8	N-88°-E	1.0～1.5×α	0.35～0.55	第24図
3-⑦	建物/P列	2	4.8	—	—	1.7～2.0	N-89°-E	0.95～1.2×1.0+α	0.2～0.35	第24図
P489	建物P	—	—	—	—	—	長方形	0.9×0.7	0.2～0.3	第24図
P464	建物P	—	—	—	—	—	大型方形	1.35×0.7+α	0.55	第24図
P258	建物P	—	—	—	—	—	大型方形	1.05×0.6+α	0.28	第24図
P455	建物P	—	—	—	—	—	長方形	1.3×0.7	0.15	第24図

表7 3区第3面建物柱穴一覧表



第24図 3区第3面造橋平面・断面図

列3-⑥(P464・466・458・274・244)は、調査区東側半部の北壁に沿って検出した東西方向に並ぶ大型方形遺構(柱穴)列である。検出延長は約10.8mを測る。各遺構間は2.0~2.5mであるが、P464がやや離れて約4.5mを測る。P464は検出幅が約1.4m、残存長約0.8m、深さ約0.55mを測り、大型の隅丸方形形状を示す。埋土内から須恵器杯蓋(96.97)、須恵器甕、土師器甕、羽釜片などが出土した。P466は検出幅が約1.4m、P458は検出幅が約1.1m、P274は検出幅が約1.3mを測る。北壁に切られるため遺構の形状は不明瞭だが、概ね隅丸方形形状を示す。P466から土師器壺(98)、土師器杯・皿・甕片などが出土した。P244は遺構の最深部をP246としている。検出幅は約2.2m、検出長が約0.7m、深さ約0.65mを測り、隅丸方形形状を示す。遺構内から須恵器甕片、土師器甕片、土師器皿・杯片などの細片が出土した。

列3-⑤と列3-⑥は、南側に約2mの間隔でほぼ平行に並ぶ大型方形遺構(柱穴)列である。列3-⑥のP464は列3-⑤のP500に対置する。また、列3-⑥のP458は列3-⑤のP258に対置する。列3-⑥のP466やP244に対置する遺構を確認することはできなかったが、列3-⑤と列3-⑥で東西方向の大型建物になるものと考えられる。

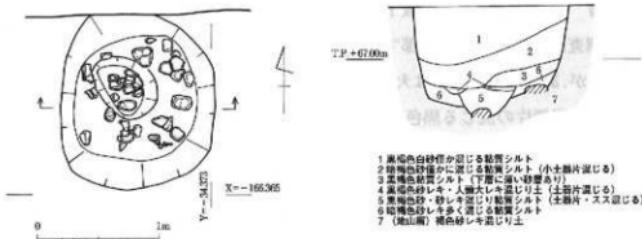
列3-⑦(P461・459・281)は、調査区東側半部の中央部で列3-⑤と列3-⑥の間で検出した東西方向に並ぶ大型方形遺構(柱穴)列である。検出延長は約5.0mを測る。各遺構間は1.2~1.5mを測る。いずれの遺構も検出幅が1.0~1.3m、検出長が0.9~1.2mで、隅丸方形形状を示す。遺構内から土師器皿・杯・椀高台・甕片・須恵器杯・杯蓋・甕片などが出土した。P281は平成18年度に実施した試掘調査の調査区4で検出された遺構に相当する。列3-⑦に対置する柱穴列は確認できなかったが、東西方向の大型建物になるものと考えられる。列3-⑦のP459は列3-⑤のP258を切っている状況から、列3-⑦は列3-⑤より新しいものである。幾度か建物の建て替えが行われたものと見られる。

井戸447・井戸507・井戸506(第24・25・26図、カラー図版3、図版11・16・17)

第3面では、幾つかの井戸を検出した。調査区西半部では、列3-①の同一軸線上で井戸477を検出した。また、調査区中央部では、東西方向に延びる溝456の上層で井戸507を検出した。さらに、井戸507に近接して井戸506を検出した。

井戸477は、検出径が1.2~1.4mを測るやや梢円形状の素掘りの井戸である。検出高はT.P.67.4mを測る。井戸の断面はゆるやかな筒状を示す。中央部がわずかに段を成して深くなる。深さは約1mを測る。埋土は上層が黒褐色ないし暗褐色粘質シルト、下層が黒褐色砂・け多く混じる粘質シルト、最下層は砂礫土層で人頭大石が多く見られた。井戸内最下層の人頭大石の上面から、須恵器杯(101)・蓋(100)・甕片、土師器杯片・壺・甕(102.103.104)・塙片・羽釜片・サヌカイト剥片や移動式竈片などが出土した。出土した遺物から、飛鳥・奈良時代(7~8世紀頃)の様相を示す。第3面で検出された方形遺構、大型方形遺構で形成される大型建物群の時期に相当するものと考えられる。

井戸507は、調査区中央部で検出した素掘りの井戸である。井戸の西南側には溝521が取り

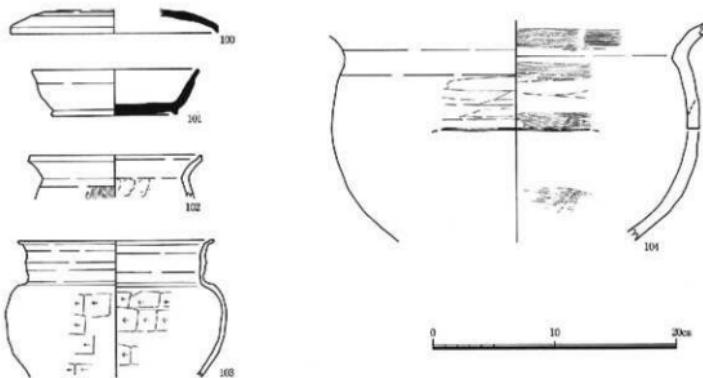


第25図 3区第3面井戸477平面・断面図

付く。検出高はT.P.67.58 mを測る。北壁に切られるためやや不明瞭であるが、検出形は隅丸方形を示す。検出径は約1.5m、深さは約1.0 mを測る。井戸の断面は溝の方向にやや広くなるが緩やかななり鉢状を成す。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで上層は砂が多く、下層は細砂が多く混じる。単一層の埋土であることから、一時期に埋没したものと考えられる。井戸内から僅かに土師器の小片が出土した。

溝521は井戸507に取り付く溝で、南北方向を示す。検出幅は0.4～0.9 m、深さは0.08～0.2 mを測る。溝底は井戸に向かってわずかに低くなる。埋土は黒色ないし黒褐色粘質シルトである。土師器の細片が出土した。

井戸506は、井戸507の東側で検出した素掘りの井戸である。北壁に切られるため全容は不明である。溝456の断面で確認することができた。検出高はT.P.67.5 mである。検出径は約2.1m、深さは約1.0 mを測る。検出形は隅丸方形を示す。断面は口の広いなだらかななり鉢状を示す。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで下層は細砂が多く混じる。概ね単一層の埋土であることから、一時期に埋没したものと考えられる。井戸内から遺物は出土しなかった。



第26図 3区第3面井戸477出土遺物

第3面下層相当層（第17・24図、図版10）

第3面では、調査区西半部及び東半部で大型の方形遺構（柱穴）で構成される大型建物と井戸などを検出したが、調査区中央部では大型建物等と同時期に相当する遺構は検出されなかった。この区间では、土師器細片の混じる黒色ないし黒褐色砂僅かに混じる粘質シルトが堆積する状況が見られた。層厚は0.1～0.2mを測る。整地土に相当するものと考えられる。この整地土層を除去した面で、東西方向の溝428・溝467・溝465を検出した。検出高はT.P.67.55mを測る。

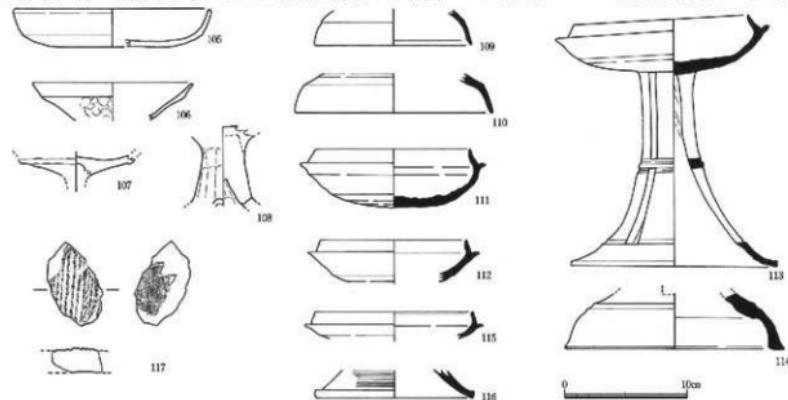
溝428・溝467・溝465（第24・27図、カラー図版3、図版10・16・18）

調査区中央部で、やや傾くが東西方向に直線的に延びる溝を3条検出した。

溝428は、調査区中央の西南部でやや東南東に傾くが東西方向に直線的に延びる溝である。溝の西端は遺構428に切られる。検出長は約8.5m、検出幅は約0.8m、深さは0.3～0.4mを測る。断面はやや深みのある皿状を示す。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトで、土師器皿・杯(105)・甕片・須恵器片などが出土した。

溝467は、調査区中央の北壁に沿ってやや東南東に傾くが東西方向に直線的に延びる溝である。溝428とほぼ平行に並ぶ。検出長は約17m、検出幅は0.8～1.0m、深さは0.2～0.25mを測る。断面は浅い皿状を示す。埋土は黒褐色砂多く混じる粘質シルト、下層は褐灰色砂質土である。溝内から土師器皿・杯(106)・楕・高杯(107,108)・甕・羽釜・須恵器杯身(111,112)・杯蓋(109,110)・高杯(113)・器台(114)・壺・甕・弥生土器甕(139～144)・磨き石(172)など多くの遺物が出土した。また、一箇所に遺物がまとまって出土する状況が見られた（カラー図版3下）。溝内に土器を設置し祭祀を行ったものと考えられる。古墳時代後期（6世紀後半）頃に相当する。

溝465は、調査区中央から東半部で北壁に沿ってやや西南西に傾くが東西方向に直線的に延びる溝である。検出長は約15m、検出幅は0.4～0.5m、深さは0.3～0.45mを測る。断面はU字状に深い様相を示す。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルト、下層はにぶい赤褐色砂質土である。



第27図 3区第3面溝467他出土遺物

溝465内からは、土師器杯・壺・甕片・須恵器杯身(115)・高杯脚底部(116)・甕片などが出土した。溝465が溝467に切られることから、溝465は溝467に先行するものである。しかしながら、大きな時期差は見られず、いずれも古墳時代後期(6世紀後半)頃に相当する。

これらの溝は人為的に掘削された溝である。直線的に施されることから区画溝になるものと思われる。

最終面(地山直上面)(第28図、図版11)

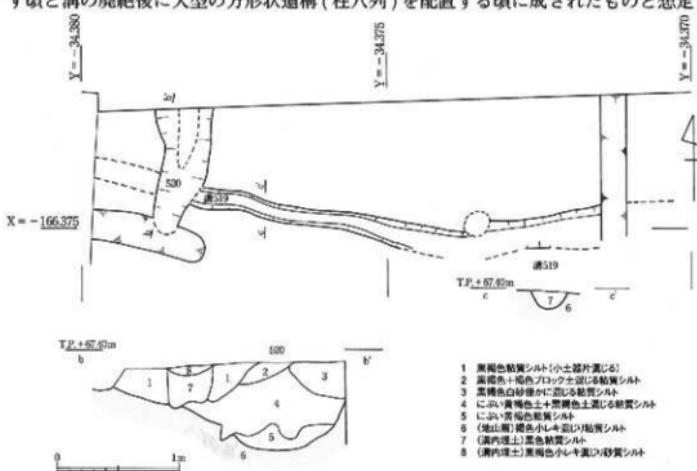
東西方向の溝検出面から、褐色及び暗褐色砂質土層を除去した地山直上面で、溝519と溝状土坑520を検出した。検出高はT.P.67.3~67.4mを測る。調査区中央部の地山層は僅かに谷状に低くなる。

溝519(第28図、図版11)

調査区中央部で、僅かに弧を成し東西方向に延びる溝を検出した。検出長は約9.5m、検出幅は0.3~0.5m、深さは0.1~0.2mを測る。断面はU字状を示す。埋土は黒色砂僅かに混じる粘質シルトである。遺物は出土しなかった。人為的に掘削された溝に相当する。

溝状土坑520(第28図)

調査区中央部で、溝519を切る状況で検出した遺構である。溝状土坑として検出したが、検出状況から素掘りの井戸と考えられる。検出長は南北方向に約2.0m、検出幅は0.5~1.0m、深さは北側が半円状に深く約0.7m、南側は浅く約0.2mを測る。埋土は黒褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土などがまだら状に堆積している。また、最深部下層には人頭大の石が幾つか見られた。埋土内から、外面に刷毛目を施す土師器甕片などが僅かに出土した。古墳時代に相当する。第3面下層において幾層かの整地土層が見られた。整地を行った時期として、東西方向の溝を施す頃と溝の廃絶後に大型の方形状遺構(柱穴列)を配置する頃に成されたものと想定される。

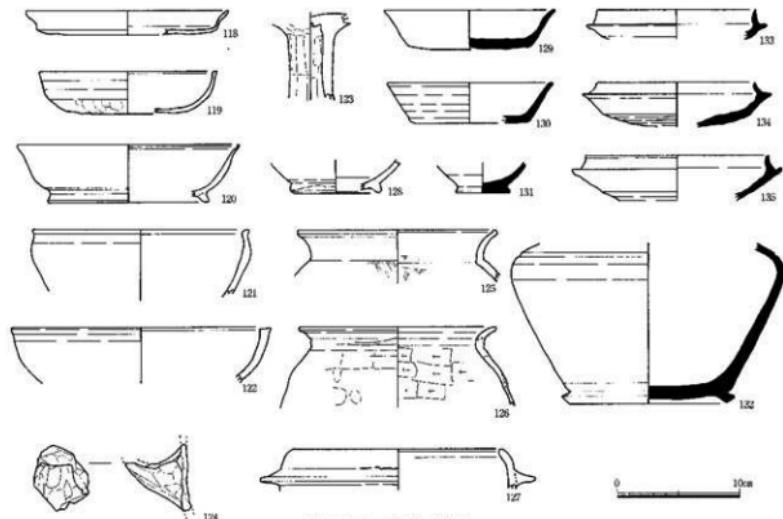


第28図 3区最終面遺構平面・断面図

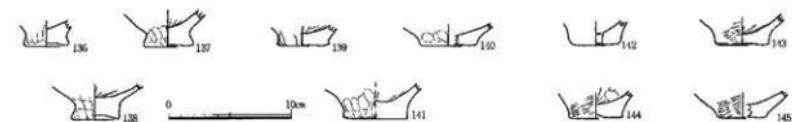
3区包含層及びその他の出土遺物（第29・30図、図版18・20）

3区では多くの遺物が出土した。主に第2面・第3面で検出された建物柱穴、大型の方形状遺構、井戸などから出土した飛鳥・奈良時代～平安時代（7～11世紀）頃の遺物が多く主となるが、第3面下層の東西方向溝内から古墳時代後期（6世紀後半）頃の須恵器、土師器、弥生土器壺底部片や製塙土器、石製品などが出土した。

包含層から出土した遺物の大半は土師器片で、細片が多く実測できたものは僅かであった。主に、土師器小皿・皿（118）・杯（119.120）・椀・鉢（121.122）・高杯脚部（123）・把手（124）・鏡（125・126）・羽釜片などが出土した。このほか、内黒の黒色土器A類椀、縄釉陶器碗高台（128）、青磁碗片、須恵器杯（129・130）・蓋杯・杯身（133～135）・高杯・小瓶（131）・台付壺（132）・壺・壺片、瓦質羽釜（127）、瓦器椀片などが出土した。さらに、サヌカイト剥片（180～182）、製塙土器片（209～211、213～223）などが出土した。中でも、第3面下層の東西方向の溝467内や第3面の包含層から弥生土器の壺底（136～145）が多く出土した。壺の体部片は多く出土しているが細片が多く復元及び実測することはできなかった。底部外面を指でなで、低い台状の底とするもの（136～138）、外面底部を指でなで平らな底とするもの（139～141）、外面にたたきを施し平らな底とするもの（143～145）、底部に孔があるもの（142）などが見られた。



第29図 3区出土遺物(1)



第30図 3区出土遺物(2)

小結

3区では、第1面で耕作溝跡を検出した。概ね中世に相当する。第2面では、掘立柱建物の柱穴列や柵列などを検出した。特に製塙土器片が多く出土した。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半（7～10世紀）頃に相当する。第3面では、方位を意識して配置された大型の方形状の建物柱穴列を検出した。主に2時期の建物群があることがわかった。これらの建物群は一般的な建物ではなく、整然と並ぶ寺院や官衙的施設、有力氏族の大型建物や倉庫群などが想起される。概ね飛鳥・奈良時代（7～8世紀）に相当する。第3面下層では古墳時代の遺物を含む直線的に東西方向に延びる溝や井戸などを検出した。溝内から遺物がまとまって出土しており、祭祀が行われたものと見られる。概ね古墳時代後半（6世紀後半）頃に相当する。建物などは確認されなかったが、古墳時代にはこの地の集落が営まれていたことがうかがえる。また、谷地に盛土を施し平坦にするなど、幾度か整地を行う状況が確認された。出土遺物では特に製塙土器、弥生土器甕底部などが多く見られた。

平成19年度調査のまとめ

今回の発掘調査でいくつかの成果を得ることができた。

①調査の結果、古墳時代後半から平安時代後期頃まで存続した集落域であることが判った。

第2面・第3面で検出された建物群は、山城廃寺における集落の隆盛期に当たる。第2面で検出された建物群の中には、方位を意識して配置された掘立柱建物や柵列が多く建ち並び、柱穴は幾重にも重なり合う状況が確認できた。主に第3面で検出された方位を意識し計画的に整然と立ち並ぶ大型建物群は、一般的な建物ではなく寺院や官衙的施設あるいは、有力氏族の大型建物や倉庫群を想起させるものである。

②焼土を伴う溝や土坑や製塙土器が多く出土する遺構などが見られ、火を伴う作業が行われていた工房や作業場などの建物が存在する可能性がうかがえた。

③古墳時代後半頃から大規模な整地が幾度も成され、山城廃寺における土地利用の状況とその変遷をうかがうことができた。

④平安時代以降、一時期荒廃し浅い落ち込み状小土坑がみられたが、中～近世代には南北方向の耕作溝や東西方向の溝などが見られ、耕作地として利用されていたことがうかがえた。

⑤出土遺物として、飛鳥時代から平安時代の遺物が主を成すが、製塙土器や弥生土器片などが多く出土した。今回の調査では弥生時代に相当する遺構は確認できなかったが、近辺に弥生時代の遺構が存在するものと見られる。

⑥今回検出した大型建物群は、渡来系氏族である「山代」氏や、調査地北側の降幡神社西側に想定されている「山城廃寺」に関連する建物群や集落である可能性が高い。「山城廃寺」が存続していた時期に相当する古代の大型建物群の存在が明らかとなった。

第4節 平成20年度の調査

河南町大字山城字宮ノ前に所在する「山城新池」における府営ため池等整備事業（南河内農と緑の総合事務所）に先立ち、平成19年度に引き続き山城廃寺の発掘調査を実施した。

発掘調査は、昨年度実施した試掘調査の結果を元に、東堤部の全長約200mの内75mを対象とし4区とした。調査面積は約450m²を測る。発掘調査は、平成20年10月20日から同年12月25日に現地調査を終了し、平成21年2月2日に工事検査を受け終了した。調査終了時から、遺物、図面、写真等の整理を行った。

1.4区の調査

「山城新池」における堤体改修部分の東堤部(南北約75m)及び堤体下層東側張出部(東西約6m)を4区とした。4区は南から北へ低くなる。地山層も南側で高く、北側は谷状に低くなる。

調査では遺構面を2面検出した。調査の結果遺構の重複が確認され、概ね4時期の遺構が確認された。上面で確認された遺構のうち、上下関係が明らかなものを第1面遺構、第2面遺構、第3面遺構とした。調査区中央部で検出した下面の遺構は、第3面に相当する。

第1面遺構（第31図、図版12）

I層 堤体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去した面で遺構を検出した。検出した遺構の上面に当たる。調査区北半部は谷状に低くなり検出面はT.P.67.48mとなる。南半分では地山直上層でT.P.67.88mとなる。上面の中でも上下関係が最も新しい遺構を第1面遺構とした。

溝1・3（第31図）

調査区南端で検出した東西方向の溝で、耕作溝と見られる。溝1の検出幅は0.45～0.55m、深さ0.1m、検出長1.5mを測る。埋土内から天目茶碗片が出土した。溝3の南側は搅乱に切られる。検出幅は0.7m～、深さは0.03m、検出長は1.5mを測る。遺物は出土しなかった。

溝174（第31図、図版12）

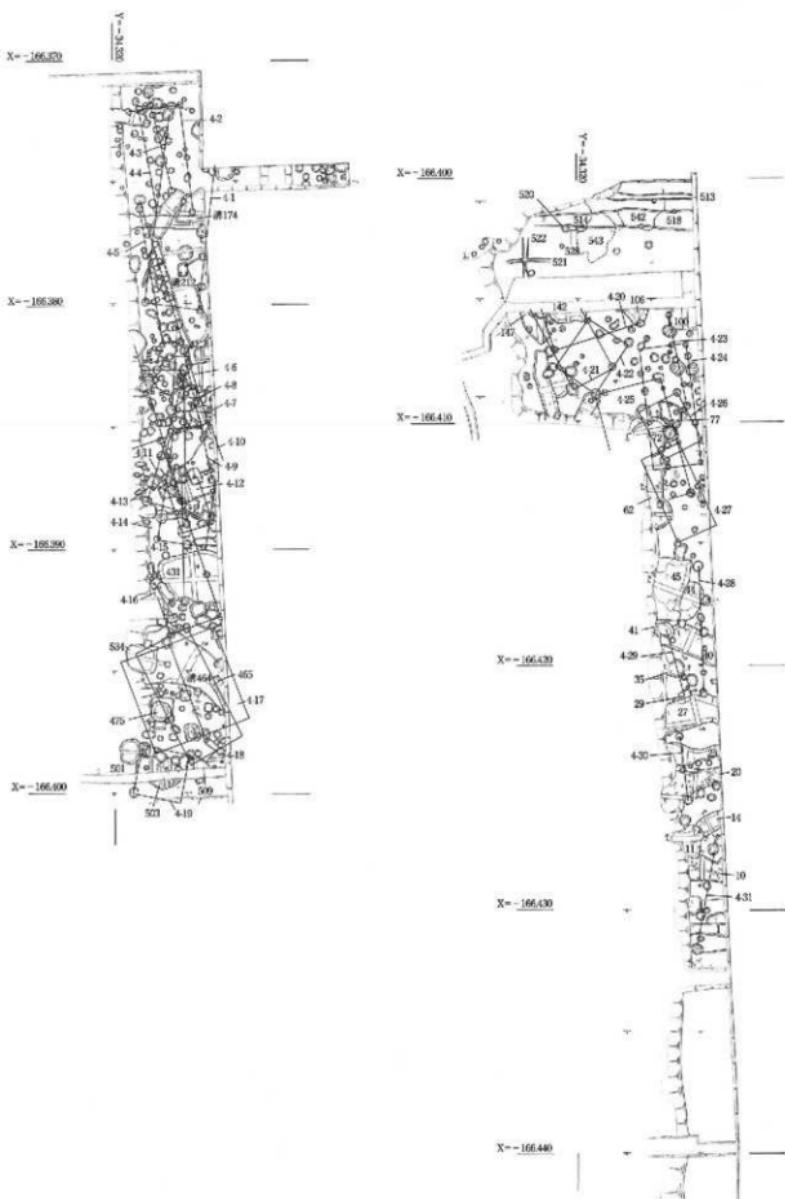
溝174は、調査区北半部で検出した東西方向の溝である。検出幅は0.55m、深さは0.05m、検出長は3.0mを測る。遺物は出土しなかった。耕作溝と見られる。

溝513・518・521・522（第31図）

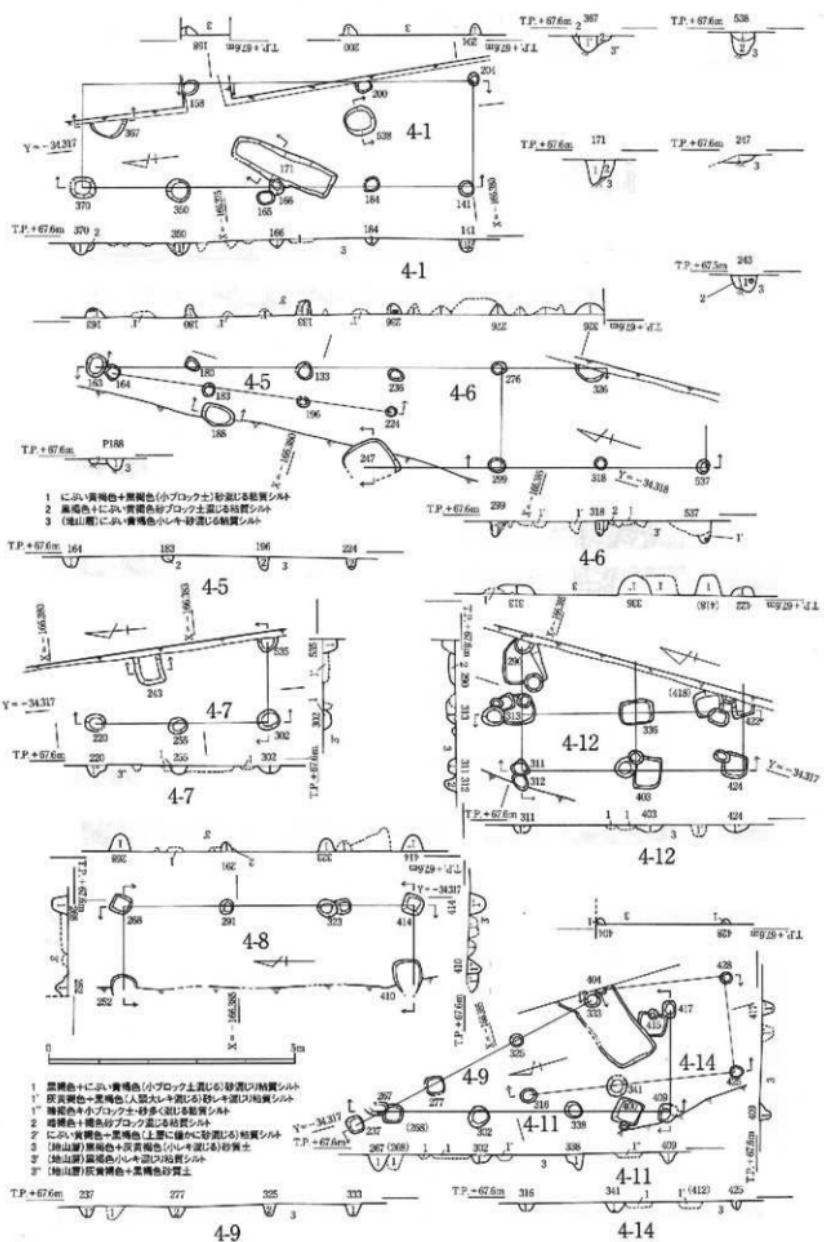
調査区中央部は、昭和28年に山城新池が北へ拡張される以前の堤体部分にあたり、北半部より検出面がやや高くなる。検出面はT.P.67.8mとなる。北半部の遺構がやや低い位置から検出されるのは、池を築造する際に皿状に旧地方面を掘り窪めたためと考えられる。

溝513・518は、調査区中央部で検出された東西方向に延びる溝である。溝513の検出幅は0.25m、深さ0.12m、検出長3.5mを測る。溝518の検出幅は0.8m、深さ0.1m、検出長は6.5mを測る。溝内から上師器皿・碗・壺（155）、内黒の黒色土器碗片、須恵器壺片、土師器羽釜片などが出土した。概ね平安時代頃（9～10世紀）に相当するものと考えられる。

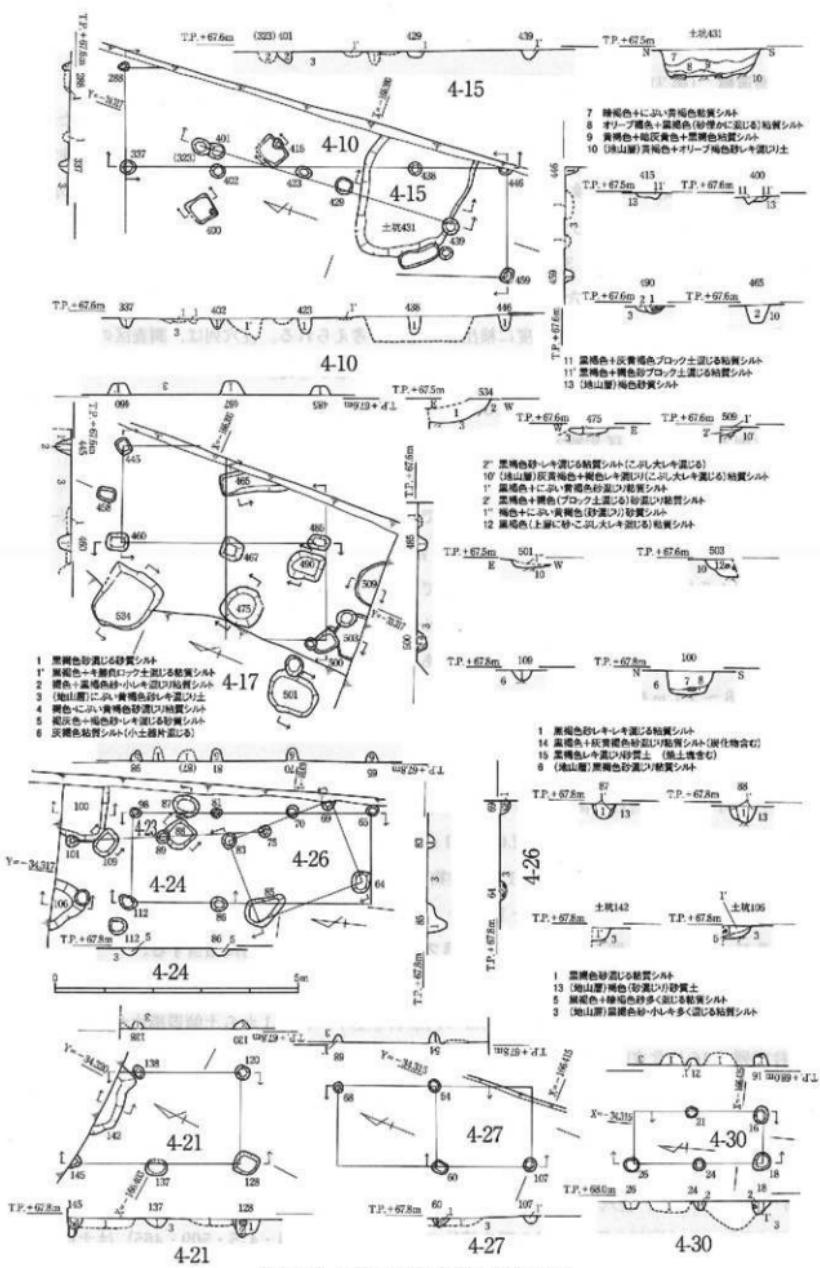
溝521と溝522は十字状に交わる溝である。溝の検出幅は0.1～0.25m、深さは0.1mを測る。いずれも耕作溝と見られる。



第31図 4区構造平面図



第32図 4区第2面造構平面・断面図(1)



第33図 4区第2面透構平面・断面図(2)

第2面遺構（第31図、カラー図版2・図版12）

I層 堤体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去した面で遺構を検出した。検出した遺構の上面に当たる。上面の中で大半の遺構が第2面相当遺構に当たる。主に掘立柱建物の柱穴列や柵列を数多く検出した。検出面は調査区北半部でT.P.67.48m、南半分でT.P.67.88mとなる。遺物はほとんど出土しなかった。概ね奈良時代～平安時代頃に相当するものと考えられる。

掘立柱建物・柵列（第31・32・33図、図版12・13、表8）

第2面では、数多くの柱穴列を検出した。掘立柱建物や柵列になるものと思われる。柱穴は重複しており、数時期の遺構を一度に検出したものと考えられる。柱穴列は、調査区の幅が狭く柱穴の繋がり、広がりなどの規模を確定することはできなかった。

4区第2面で検出した掘立柱建物及び柵列なる柱穴列は、表7に示すとおりである。

柱穴列4-1は、調査区北端で検出した建物で、桁行4間、梁間1間以上、柱間は1.9～2.0mを測る。建物の主軸はN-6°-Eを示す。柱穴は円形ないし隅丸方形状を呈す。

柱穴列4-6は、桁行6間、梁間1間の建物で、柱間は1.8～2.3mを測る。主軸方向はN-17°-Wを示す。埋土中に石やけが入る。けを多く含む土で埋め戻したものと見られる。

柱穴列4-7は、桁行2間、梁間1間の建物で、柱間は1.7～1.8mを測る。東側の柱穴列は東壁に切られ、不明である。建物の主軸方向はN-5°-Eでほぼ南北方向を示す。

柱穴列4-8は、桁行3間、梁間1間の建物である。主軸方向はN-1°-Eでほぼ南北方向を示す。柱間は1.8～2.1mを測る。柱穴は方形状ないし隅丸方形状を呈す。

柱穴列4-10は、桁行4間、梁間2間の縦柱建物で、主軸方向はN-20°-Wを示す。柱間は1.8～2.0mを測る。柱穴の検出形は円形ないし隅丸方形状を呈す。

柱穴列4-12は、桁行2間、梁間2間の縦柱建物で、主軸方向はN-22°-Wを示す。柱間は1.8～1.9mを測る。柱穴は一辺約2.0×3.0mの方形状を呈す。

柱穴列4-13は、桁行1間、梁間1間の建物で、柱間は2.0～2.5mを測る。主軸方向はN-28°-Eを示す。柱穴（P 415-P 400-P 313）は一辺0.5×0.5mの方形状を呈す。他の柱穴と重複するが、他の柱穴に切られることから、第2面でも古い時期の建物に相当する。

柱穴列4-14は、桁行2間、梁間1間の建物で、主軸方向はN-10°-Eを示す。柱間は1.8～2.5mを測る。柱穴の検出径は1.0～2.0mの円形状を呈す。P 341から土師器細片が出土した。

柱穴列4-16は北東隅の柱穴を欠くが、桁行1間以上、梁間1間以上の建物で、柱間は1.3～1.6mを測る。柱穴（P 443-P 453-P 435）は、一辺約0.4×0.65mの長方形状を呈す。主軸方向はN-20°-Wを示す。柱穴列4-17に近接し、ほぼ同一の主軸方向を示す。

柱穴列4-17は、桁行2間、梁間2間の縦柱建物で、主軸方向はN-23°-Wを示す。柱間は1.8～2.4mを測る。柱穴は一辺約2.0×3.0mの方形あるいは隅丸方形状を呈す。

柱穴列4-18は桁行2間、梁間1間の建物で、柱穴（遺構534・475・509・465）は土坑状ないし溝状を示す。遺構534は一辺約1.3mの方形状を呈す。遺構475は一辺約0.8mの方形状を

呈す。遺構 503 は一辺約 0.85 m の方形状を呈す。遺構 465 は北壁にかかるが、検出幅 0.5 m、検出長 1.4 m 以上を測る溝状を呈す。遺構内埋土には、多くの石やブロック土が混じる。

柱穴列 4-20 は、中央張出部で検出した桁行 2 間、梁間 2 間の建物で、主軸方向は N-74°-E を示す。柱間は 1.8 ~ 2.0 m を測る。柱穴は円形状を呈す。

柱穴列 4-24 は、中央張出部から南半部で検出した桁行 3 間、梁間 1 間の建物である。主軸方向は N-8°-W を示す。柱穴の検出形は円形状を呈す。P 81 から土師器の細片が出土した。

柱穴列 4-25 は、西側は攪乱で柱穴を確認できなかったが建物である。主軸方向は N-15°-W を示す。柱穴の検出形は隅丸方形状を呈す。埋土内に大小の鉢が多く混じる。

柱穴列 4-26 は、南半部で検出した建物で、桁行 1 間、梁間 1 間、柱間 1.8 ~ 2.2 m を測る。主軸方向は N-18°-W を示す。柱穴は隅丸方形状ないし土坑状を呈す。

柱穴列 4-27 は、南半部で検出した建物で、桁行 2 間、梁間 1 間、柱間 1.8 ~ 1.9 m を測る。主軸方向は N-25°-W を示す。P 60 から須恵器杯の細片が出土した。

柱穴列 4-29 は桁行 2 間、延長約 3.0 m を測る。主軸方向は N-17°-W を示す。遺構 41 は一辺約 0.55 m のやや歪な方形状を呈す。遺構 35 は一辺 0.7 m の隅丸方形状を呈す。遺構 29 は一辺約 0.5 m の方形状を呈す。柱穴列 4-30 は桁行 2 間、梁間 1 間の建物で、主軸方向は N-15°-W を示す。柱間は 1.3 ~ 1.5 m とやや狭い。

掲載番号	形態	桁行 間 (m)	梁間 間 (m)	柱間 (m)	方位	柱形状	柱穴 (m)		特徴	
							規模	深さ		
4-1	建物	4	7.90	1	2.20	1.9~2.0	N-6°-E	隅丸形・方彌	0.22 ~ 0.5	0.14 ~ 0.28 第32回
4-2	建物	2	4.45	1	2.20	2.2~2.25	N-6°-W	隅丸形・方彌	0.25 ~ 0.3	0.1 ~ 0.2
4-3	建物/P列	2	4.20	—	—	2.1	N-13°-W	楕円形	0.25 ~ 0.45	0.1 ~ 0.25
4-4	建物	2	4.25	1	1.90	2.0~2.2	N-11°-W	隅丸形・方彌	0.18 ~ 0.3	0.1 ~ 0.2
4-5	建物/P列	3	5.70	1~	—	1.8~2.0	N-9°-W	楕円形	0.2 ~ 0.35	0.14 ~ 0.28 第32回
4-6	建物	4~6	12.50	1	2.00	1.8~2.3	N-17°-W	隅丸方形	0.25 ~ 0.48	0.2 ~ 0.44 第32回
4-7	建物	2	3.55	1	1.80	1.7~1.8	N-5°-E	楕円形	0.35 ~ 0.45	0.12 ~ 0.24 第32回
4-8	建物	3	6.00	1	1.50	1.45~2.35	N-1°-E	方彌・凹・不定形	0.28 ~ 0.4	0.18 ~ 0.34 第32回
4-9	建物/P列	3	5.50	—	—	1.75~1.9	N-11°-W	円・隅丸方形	0.26 ~ 0.36	0.2 ~ 0.22 第32回
4-10	建物	4	7.75	2	4.30	1.8~2.0	N-20°-W	円形	0.18 ~ 0.3	0.18 ~ 0.3 第32回
4-11	建物	3	6.00	1	2.10	1.8~1.9	N-16°-W	方彌・椭円	0.26 ~ 0.4	0.18 ~ 0.32 第32回
4-12	建物	2	4.40	1~2	2.50	1.8~1.9	N-22°-W	隅丸方形	0.3 ~ 0.7	0.16 ~ 0.4 第32回
4-13	建物	1	2.70	1	1.90	1.9~2.7	N-28°-E	方彌	0.46 ~ 0.6	0.15 ~ 0.3
4-14	建物	1	4.30	1	2.00	1.8~2.5	N-19°-W	円形	0.25 ~ 0.4	0.1 ~ 0.2 第32回
4-15	建物	2	5.00	—	—	2.3~2.7	N-90°-E	円形	0.32 ~ 0.35	0.1 ~ 0.22
4-16	建物/P列	1	1.60	1	1.20	1.2~1.6	N-20°-W	方彌	0.32 ~ 0.67	0.1 ~ 0.2
4-17	建物	2	4.20	2	4.00	1.8~2.4	N-23°-W	方彌	0.26 ~ 0.46	0.2 ~ 0.32 第33回
4-18	建物	2	5.10	1	2.40	2.4~2.5	N-28°-W	隅丸方形・上坑状	0.3 ~ 1.2	0.1 ~ 0.25
4-19	建物	1	2.00	1	2.00	2.0	N-10°-E	椭円	0.25 ~ 0.45	0.1 ~ 0.28
4-20	建物	2	3.70	1	1.50	1.5~2.0	N-74°-E	隅丸方形・楕円	0.25 ~ 0.42	0.1 ~ 0.3
4-21	建物	2	3.50	1	1.90	1.7~2.1	N-28°-W	隅丸方形・椭圓	0.2 ~ 0.48	0.14 ~ 0.4 第33回
4-22	建物	1	2.50	1	1.95	1.95~2.5	N-32°-E	丸・椭円	0.2 ~ 0.4	0.1 ~ 0.21
4-23	建物/P列	2	3.95	—	—	1.85~2.1	N-8°-W	丸・椭円	0.2 ~ 0.3	0.13 ~ 0.18 第33回
4-24	建物	3	4.80	1	1.80	1.55~1.8	N-6°-W	丸・椭円	0.2 ~ 0.4	0.15 ~ 0.25 第33回
4-25	建物	2	4.90	1	2.60	2.3~2.6	N-15°-W	隅丸方形・椭円	0.35 ~ 0.5	0.1 ~ 0.23
4-26	建物	1	2.20	1	1.80	1.8~2.2	N-18°-W	丸・上坑狀	0.3 ~ 0.9	0.15 ~ 0.4 第33回
4-27	建物	2	3.80	1	1.80	1.8~1.9	N-25°-W	丸・椭円	0.18 ~ 0.32	0.14 ~ 0.2 第33回
4-28	建物/P列	2	5.20	—	—	2.4~2.8	N-3°-W	丸・椭円	0.28 ~ 0.44	0.1 ~ 0.17
4-29	建物/P列	2	3.00	—	—	1.3~1.6	N-17°-W	土坑状	0.5 ~ 0.8	0.17 ~ 0.25
4-30	建物	2	2.70	1	1.00	1.0~1.4	N-8°-W	丸・椭円	0.22 ~ 0.36	0.15 ~ 0.28 第33回
4-31	建物/P列	3	4.20	—	—	1.3~1.5	N-9°-E	隅丸方形	0.3 ~ 0.45	0.1 ~ 0.28

表 8-4 区建物・柱穴列一覧表

建物柱穴、その他の遺構（第31・32・33図、表8、図版13）

遺構243・247は、調査区北半部の柱穴列4-6・4-7付近で検出した遺構である。概ね一辺約0.8mの長方形状あるいは橢円形状を呈す。大型建物の柱穴になるものと考えられる。柱穴間は約2.5mを測る。遺構243から半分に割れた人頭大ほどの磨き石（173）が出土した。柱穴内に廃棄したものと見られる。

遺構367・遺構538・遺構175は、北半部北端で検出した柱穴である。いずれも建物柱穴になるものと考えられる。遺構367は西壁に切られるが、検出径約0.75mの隅丸方形状を呈す。遺構538は東側張出部で北壁に切られるが、検出径約0.75mを測る隅丸方形状を呈す。いずれの柱穴内にけが多く含まれる。遺構175は西壁に切られるが、検出径約0.5mを測る橢円形状を呈す。遺構内から須恵器杯身（161）・杯蓋（159）、土師器片などが出土した。柱穴内に埋納したものと考えられる。概ね6世紀後半の様相を示す。

遺構171は、北半部で検出した幅0.6m、検出長2.8mの溝状遺構である。深さは0.5mを測る。埋土は黒褐色及びにぶい黄褐色アラク土混じる石・け混じり粘質シルトである。

遺構490は、柱穴列4-17に近接する遺構で、一辺0.55×0.7mの隅丸方形状を呈す。遺構501は柱穴列4-17に近接する遺構で、一辺0.8×1.0mの隅丸方形状を呈す。遺構503は遺構501に近接する遺構で、一辺約1.2mの方形状を呈す。埋土内にはけが多く含まれる。遺物は出土しなかった。いずれも建物の柱穴になるものと思われる。

P87・P88は、調査区中央部の柱穴列4-23に近接して検出した建物柱穴である。P87は検出径約0.5mを測る橢円形状を呈す。P88は一辺0.5×0.6mの隅丸方形状を呈す。埋土はいずれも黒褐色砂・け混じる粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

土坑106・土坑142は、調査区中央部で検出した不定形土坑である。埋土は黒褐色砂混じり粘質シルトであるが、僅かであるが、スス・炭化物が含まれる。

焼土坑100は、調査区中央部で検出した方形状の土坑である。西壁と搅乱によって切られるが一辺約1.0m以上の方形状を呈す。堀り方はコの字状を示す。埋土は黒褐色と灰黄褐色砂混じり粘質シルトであるが、ふいご羽口片（167～171）、焼土塊や炭化物などが出土した。遺構100とその周辺で鍛冶関連作業が行われていたものと考えられる。

調査区中央部で溝518の下層からP519・P520と両遺構を繋ぐ様に溝状遺構528を検出した。遺構の埋土内には炭化物が多く含まれる。また、縄釉陶器片、製塙土器、土師器皿、羽釜片などの細片が出土した。

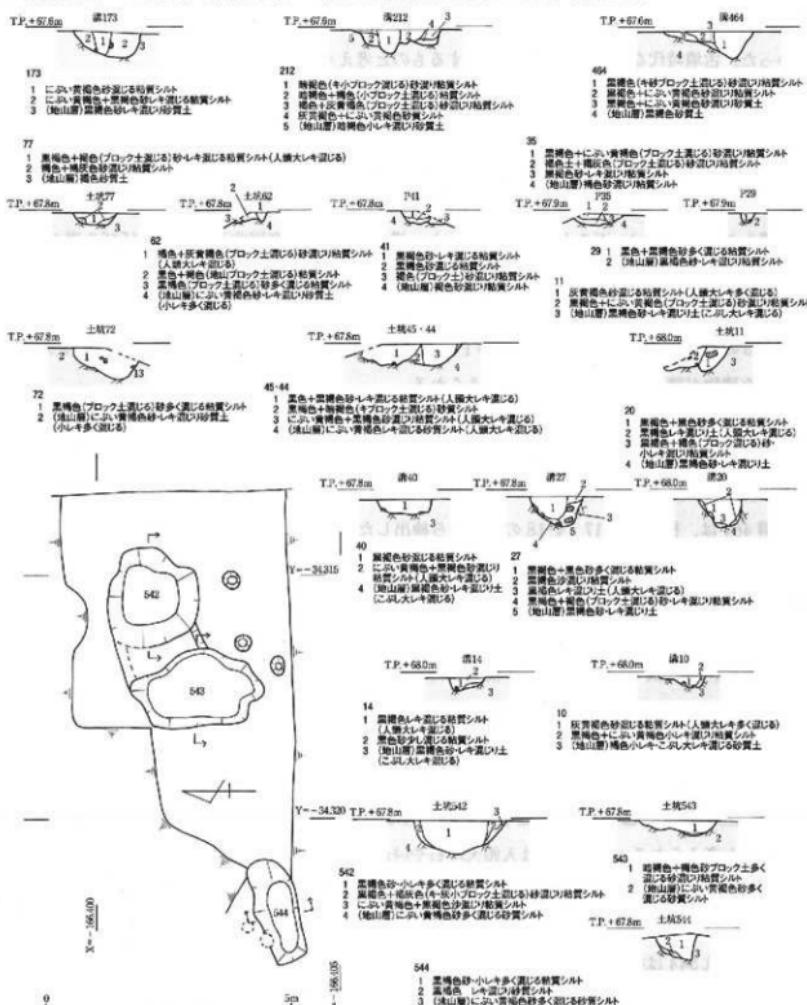
調査区中央部から南半部で遺構77・72・62を検出した。

遺構77は調査区中央部で検出した土坑で、検出幅約0.5m×0.5mのやや丸みを帯びた方形状を呈す。深さは0.25～0.3mで埋土中に大小のけを多く含む。

遺構72は、遺構77の南側に近接して検出した遺構である。西側は搅乱のため不明である。検出幅は約1.7mの隅丸方形状を呈す。断面は鉢状に深くなつており、最深部で約0.65mを測る。

井戸であったと考えられる。埋土は黒色ないし黒褐色砂混じり粘質シルトで埋土内に人頭大け・小けが多く混じる。一度に埋め戻されたものと考えられる。

遺構 62 は、遺構 72 の南側に近接して検出した土坑である。西側は搅乱のため不明である。検出幅は 0.5~0.8 m、検出長は約 3.5 m、深さは 0.2~0.4 m を測る。埋土は黒褐色ないしにぶい灰黄褐色アーロク土が多く混じる砂・け・泥混じり砂質土で大小のけがが多く混じる。



第34図 4区第3面遺構平面・断面図

第3面遺構（第31図、図版13）

I層 堤体の盛土層及びII層 旧耕土・床土層を除去した面で遺構を検出した。検出した遺構面の下面に当たる。また、調査区中央部で、IV層 黒褐色ないしれーブ褐色砂質シルトを除去したV層 黒褐色及び黄褐色砂け混じり粘質シルトの上面で遺構面を確認した。第3面相当の遺構に当たる。主に、東西方向の溝や不定形土坑などを検出した。検出面は調査区北半部でT.P.67.48 m、中央部でT.P.67.75 m、南半分でT.P.67.85 mとなる。遺物はほとんど出土しなかった。古墳時代ないしそれ以前に相当するものと考えられる。

不定形土坑・溝（第31図、図版13）

調査区北半部で、直線的に南北に延び（溝212）、さらに東側に屈曲して延びる溝（溝173）を検出した。溝212は、検出幅約1.0 m、延長約4.8 mを測る。溝の主軸は概ねN-20°-Wを示す。深さは0.2～0.3 mを測る。北に向かって低くなる。埋土は暗褐色及び灰黃褐色ブロック土混じる粘質シルトで、小けい・石などが多く見られた。溝212から90度屈曲して東側に延びる溝173を検出した。検出幅約1.5 m、延長は約1.0 m、深さは約0.5 mを測る。埋土はにぶい黄褐色及び黒褐色砂け混じり粘質シルトで、小けい・石が多く含まれる。溝内からは遺物は出土しなかった。溝173の上面に須恵器杯蓋・杯身を伴うP175や建物の柱穴などが溝を切りこんでいることから、主要な建物が建てられる以前の溝と考えられる。

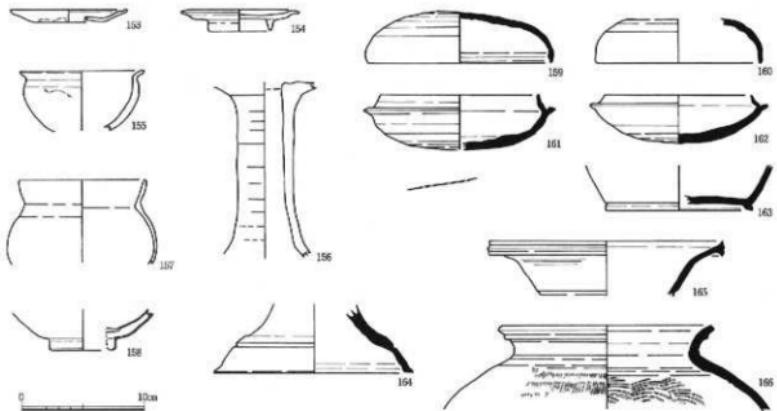
不定形土坑431は、東側が壁で切られるが検出幅は約2.2×2.5 m以上、深さは約0.6 mを測る。埋土は主に黒褐色及び黄褐色粘土ブロック混じる粘質シルトで、下層は砂け層で大小の石・けいが混じる。遺物は出土しなかった。

溝464は、柱穴列4-17・4-18の下層から検出した溝である。概ね南西南から北東北に延びるもので、検出幅は1.5～2.4 m、延長は約3.5 m、深さは0.2～0.5 mを測る。埋土は黒褐色及びにぶい黄褐色砂混じり粘質シルトで下層に代大小の石・けいが多く入る。流水堆積によるものではなく一度に土石流のごとく埋まったような様相を示す。遺物は出土しなかった。

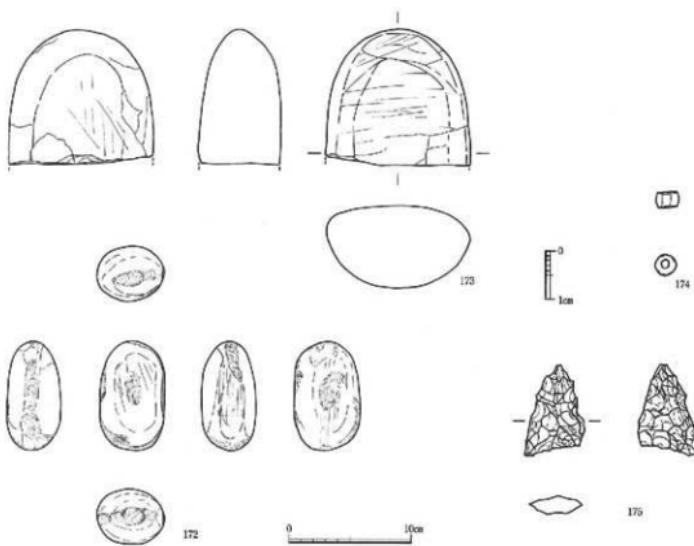
土坑44・45は、調査区南半部で検出した不定形土坑である。やや隅丸方形状の土坑44を方形状の土坑45が切っている。土坑44は検出幅約1.8 mである。土坑45は一辺約2.5 mを測る。深さは約0.6 mである。埋土中には人頭人の石やけいが多く含まれている。遺物は出土しなかった。

溝40・27・20・14・10は、調査区南半部で検出した東西方向の溝である。検出幅はいずれも0.8～1.0 mで深さは0.2～0.6 mを測る。溝底は起伏に富んでおり、人工的なものではなく自然流路と考えられる。埋土中には人頭大の石やけいが多く含まれている。遺物は出土しなかった。

調査区中央部の地山直上面で、不定形土坑542・543・544を検出した。土坑524は一辺約2.0×2.0 mのやや凹凸のある方形状を呈す。土坑543は検出幅約1.7×2.8 mのやや歪な方形状を呈す。土坑544は検出幅約0.8 m、延長約2.2 mの溝状を呈す。埋土はいずれも黒褐色砂・小けい多く混じる粘質シルトである。遺物は出土しなかった。起伏のある自然の窪地に流入土が堆積したものと考えられる。



第35図 4区出土遺物



第36図 出土遺物(石器・石製品)

4区の出土遺物 (第35・36図、図版19・20)

4区の調査では、遺物はあまり出土しなかった。コンテナで5箱である。堤体上の包含層から出土した遺物(土師器片や須恵器片)がほとんどで、遺構から出土した遺物はわずかにコンテナ1箱である。

中でも建物柱穴から出土したものはほんの僅かである。P 175 から須恵器杯身（161）・杯蓋（160）、P 436 から須恵器台片（164）・壺片などが出土した。また、実測することはできなかったが、P 519・P 520・遺構 528 から綠釉陶器片、製塙土器、土師器皿、羽釜片などの細片が出土している。さらに、方形状遺構 243 内から磨き石（173）が出土した。遺構 100 からは焼土塊と共にふいご羽口の細片（168～171）などが出土した。

包含層からは、細片であるが土師器皿・小皿（153）・台付皿・杯・高杯（156）・壺（157）・甕・羽釜・須恵器杯身（162）・杯蓋（160）・杯（163）・高杯・器台・壺・甕（165.166）、黒色土器片、瓦器碗片・羽釜片などが出土した。さらに、サヌカイト剥片（183～166）、製塙土器片（224）、などが出土した。そのほか、青磁碗（158）や綠釉陶器片、瓦片などもわずかながら見られた。

出土した遺物は、主に奈良時代～平安時代頃の遺物が多く見られた。また、古墳時代後期頃の須恵器や土師器、さらに、黒色土器碗片、瓦器碗片なども見られ、概ね古墳時代から中世に至るまでの時期に相当する。

平成 20 年度調査のまとめ

4 区の発掘調査では、いくつかの成果が得られた。

検出した主な遺構として、耕作溝や建物柱穴列を検出することができた。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代頃の集落域に相当するものと考えられる。検出した建物は多く見られたが、北堤部付近（2 区・3 区）では検出した建物の主軸方向が同一のものが並ぶなど整然としていたが、東堤部では、建物の主軸方向がやや異なるものが見られた。寺院の建物や回廊、倉庫群などではなく、一般的な建物や作業小屋などになるものと考えられる。また、ふいご羽口の検出や焼土を含む土坑、溝状遺構などが見られたことから、工房的な作業が行われていた可能性もうかがえた。

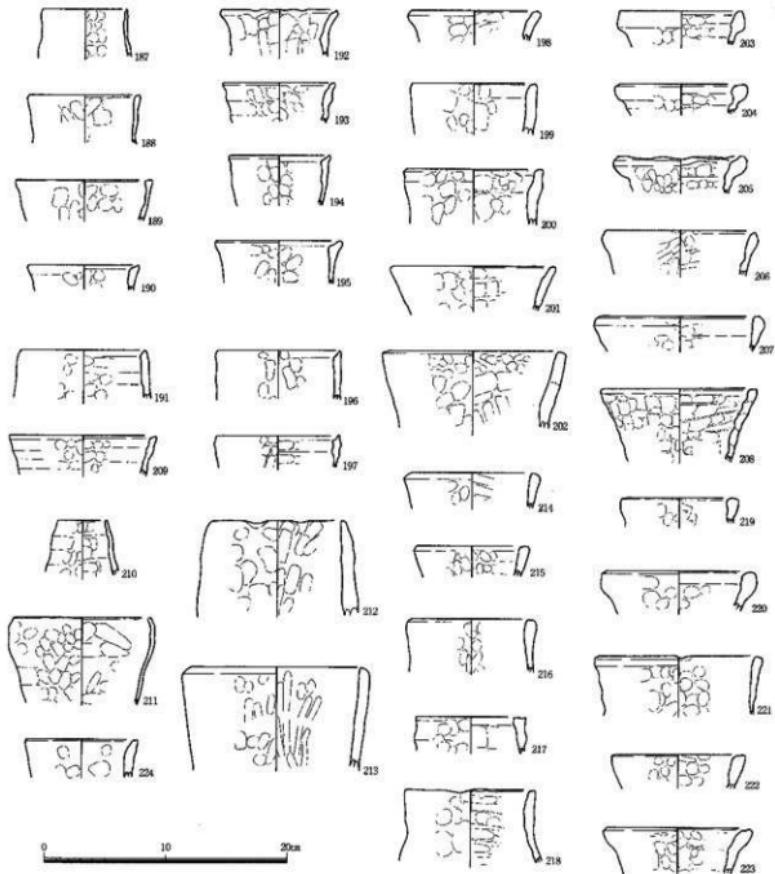
さらに、古墳時代以前に相当する溝・不定形土坑などを検出した。検出した遺構は幅が広く、また深いものが多いことから、旧地形は起伏に富んでいたものと考えられる。

今回、昭和 28 年以前の旧池（南側池）北堤部とハガネ部、さらに現池東堤部のハガネ部を確認した。「山城新池」は昭和 28 年頃に北側に拡張されているが、拡張した際の「山城新池」の堤体部のハガネ部（主に浸透水の止水と堤防の強度を保つための堤体中央部にコアなる部分で、コア材となる粘土混じりの別土一ハガネ上一を突き固めたもの）を確認することができた。

今回の調査では、山城新池の堤体部下層に遺構が遺存することが判った。「山城新池」は昭和 28 年頃に北側に拡張されているが、旧耕作土上に遺物を多く含む池の中の掘削土を堤体として盛上げている状況が観察できた。かつての池中においても、掘立柱建物跡や溝跡が広がっていたものと推測される。集落域が広範囲に広がっていたことが確認できた。

製塙土器（第37図、図版22）

調査区の2区・3区より薄コンテナ1箱分の製塙土器片が出土した。いずれも細片のものばかりで、完形に復元できるものはなかった。製塙土器は、2区から3区にかけての北堤中央部で出土している。主に、2区第2面溝状遺構174とその周辺の遺構及び包含層から、また3区西半部の第2面の柱穴や包含層から多くの製塙土器が出土した。2区の遺構174は東西方向に広がる浅い溝状遺構で、土師器杯、甕などの遺物が出土した。埋土内には、ススや炭化物が混じる。溝状遺構174内のP146からは白玉（174）が出土している。さらに、近接する溝状遺構175からは、遺構内に廃棄されたと思われる多くの製塙土器片が出土した。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半（7～9世紀頃）に相当する。



第37図 出土遺物（製塙土器）

出土した製塙土器の中でも、概ね口縁部が残存しているもので形態が判るものを見出し実測をした。製塙土器の大半は、形状が逆円錐形（4類）や円筒形（5類）を示し、器壁が厚く内外面に指圧痕が残るものである。中でも、器壁が厚く逆円錐形で口縁端部に平坦面を持つもの（4類a - 189・198・199・208・216・222）や、口縁端部を外反気味に肥厚するタイプのもの（5類- 203 ~ 205・220）が多く見られた。また、僅かであるが厚手の深鉢形または鉢形で口縁部が直線的に立ち上がり端部に平坦面を持つもの（1類b - 218・224）や内面に布目压痕を持つもの（6類- 212・213）なども見られた。1類及び4類、5類の製塙土器は和泉や紀州・淡路など大阪湾南岸で生産されたものと考えられている。内面に布目压痕を持つものは「六連式土器」と称され、主に筑紫・北九州地区で生産されたものと考えられている。製塙土器の生産地として、大阪湾南岸部の泉州から淡路のもの、内面に布目压痕を持つ筑紫・北九州地区的ものが含まれており、生産手法や形態、胎土などの差異が多様で多くの地域からこの山城の地に製塙土器が搬入されたことを示している。また、製塙土器の出土により、この地で多くの塩が消費されていたことがわかった。

概ね奈良時代（8世紀頃）に、畿内で製塙土器の出土が急増する傾向にある。奈良時代には円筒形の製塙土器生産が大阪湾沿岸で盛んになる。平安時代初期頃まで生産が続くが、その後は一気に激減する。大阪湾沿岸の生産地として、泉佐野市湊遺跡や阪南市田山遺跡、岬町山田海岸遺跡、小島東遺跡、小島北磯遺跡などが知られている。律令期において、塩は調庸の重要な税目であり、流通ルートが確立されていく。古くから開けた山城の地は、竹之内峠や水越峠などの街道が人和や飛鳥に通じる陸のルートと石川・大和川から海に通じるルートが共存する交通の要衝であり、塩の流通ルートがこの地を経由していたものと考えられる。この時期に大量に製塙土器が出土する例は、官衙や在地豪族の居館、大規模集落などで見られる。

高槻市安満遺跡、嶋上郡衙跡、大阪市難波京、寝屋川市讚良群条里遺跡、藤井寺市林遺跡などが知られる。山城廃寺の近郊では、富山林市尾平遺跡で奈良時代の土師器杯・皿・甕や須恵器杯・墨書き土器などと共に池中から一括して製塙土器が出土している。また、羽曳野市駒ヶ谷遺跡では、8世紀代の井戸424から土師器杯・皿・須恵器杯などと共に2000点以上の製塙土器が出土している。墨書き土器や奈良三彩小壺なども出土しており、一般的な集落とは異なる公的な施設であったと考えられている。山城の地は「山城廃寺」の寺域に近接する有力氏族「山代氏」の大型建物群からなる大規模な集落域であると考えられることから、交易品として塩がこの地で多く流通していたものと想定される。

平成18年度の試掘調査の際にも、製塙土器が多く出土した。この中に内面に布目压痕を持つものが幾つか見られたことから、その生産地を探るべく製塙土器の胎土分析を試みた。類似資料として、同河南町の平石古墳群から出土した製塙土器を比較対象とした。分析の結果は、第5章第1節にて報告されている。

最後に文末ながら、製塙土器の同定については、横山洋氏（大阪歴史博物館）にご教示いただいた。記して感謝いたします。

第5節 小結（付図2）

山城魔寺の調査では、全調査区で数多くの掘立柱建物や井戸、溝などの遺構を検出することができた。主に中世の耕作溝や飛鳥・奈良時代～平安時代頃の大型柱穴を伴う掘立柱建物跡や古墳時代後半頃の溝跡などを検出し、概ね古墳時代後期～平安時代頃の集落域となることが判明した。また、飛鳥・奈良時代には、郡衙や寺院などの関連施設と考えられるような整然とした大型建物の配置になるなど、やや特異性を感じられるものである。しかしながら、柱穴内や遺構からの遺物が少なく、それぞれの建物の時期を確定することは困難であった。そこで、建物の主軸方向や柱穴の検出状況、遺構の重複関係などから建物の傾向を検討し、遺構の変遷に合わせ、時期的な分類を行った。各調査区によって遺構の時期には若干の年代幅や差があるが、大きくI～V期の時期的区分を設定した。

I期—地山直上層で検出した自然流路、不定形土坑などを伴う時期。

4区第3面で検出した溝464・10・14・20・25・27・40、不定形土坑431・44・45、3区地山直上面で検出した溝519・200、1区最下層で検出した溝63などが該当する。建物跡は確認されなかった。時期的に古墳時代あるいはそれ以前に相当する。

II期—古墳時代後期の遺物を含む東西方向の溝を伴う時期。大規模な整地が施される。

①3区第3面で検出した東西方向の下層溝465を中心とした時期である。溝の主軸方向はN-75°-E(=N-15°-W)を示す。他に、1区南側で検出した溝64・21、溝に伴う柱穴列1-4・1-7などが該当する。概ね古墳時代後期頃に相当する。

②3区第3面で検出した東西方向の上層溝428・467を中心とした時期である。溝の主軸方向はN-75°-W(=N-15°-E)を示す。他に、2区第3面で検出した柱穴列2-12などが該当する。概ね古墳時代後期頃に相当する。

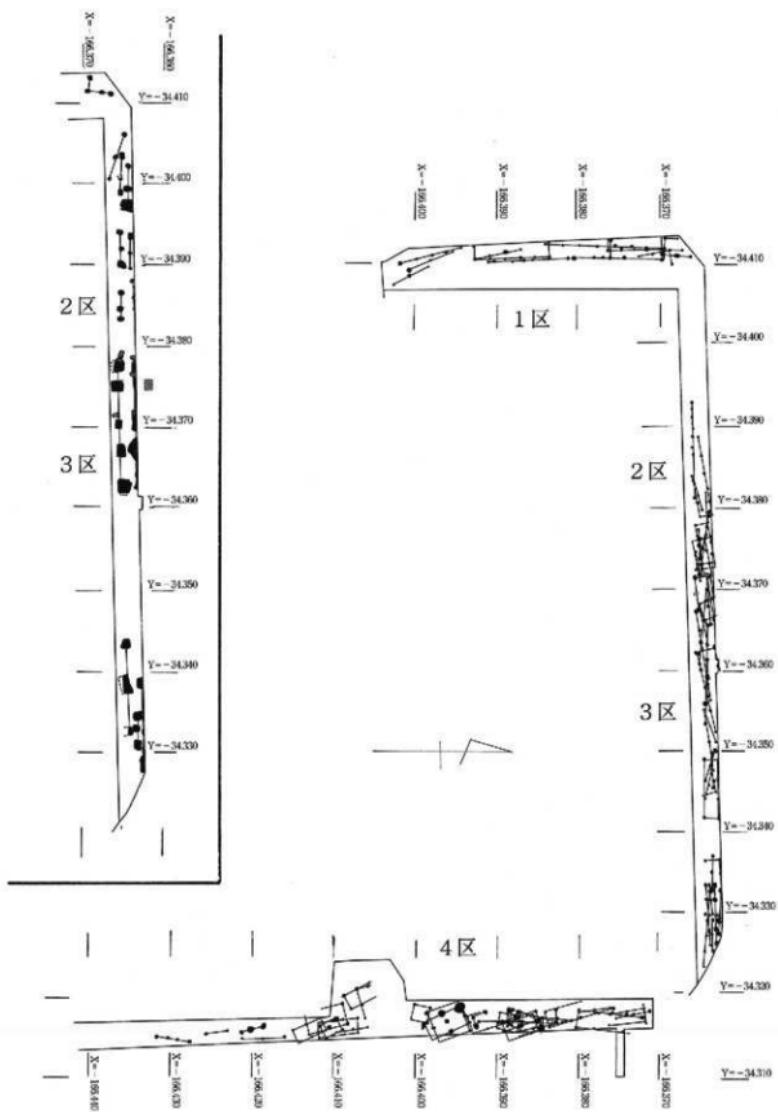
III期—大型方形状遺構、方形状遺構などで構成された建物を伴う時期。大規模な整地を行い、方位を意識した計画的な建物配置を施す。整然と並ぶ郡衙や寺院の建物や回廊、豪族氏族の大型建物、倉庫群などが想起される。

①大型方形状遺構で構成された柱穴列を中心とする時期である。建物の主軸方向は、東西方向(真北)N-3～0～3°-W(=N-90°-E)を示す。3区第3面で検出した大型方形状遺構列3-③・3-④・3-⑤、井戸477などが該当する。概ね飛鳥・奈良時代に相当する。

②方形状遺構で構成された柱穴列を中心とする時期である。建物の主軸方向は、東西方向(真北)N-3～0～3°-W(=N-90°-E)を示す。3区第3面で検出した方形状遺構列3-①・3-②、2区第3面で検出した2-11～19などが該当する。概ね飛鳥・奈良時代に相当する。

IV期—集落の隆盛期で、掘立柱建物や関連施設が多く配置される時期。概ね奈良時代～平安時代頃に相当する。幾度となく建て替えが行われている。方位を意識し建物が配置されているが、建物の主軸方向にやや違いが見られた。

①柱穴列の主軸方向がN-6～10°-E(=N-85°-W)を示す。4区第2面4-1、4-14、4-19、



第38図 建物・柱穴列配置図

4-31、3区第2面3-3、3-12などが該当する。建物として桁行3間以上のものなど、規模の大きな建物が見られ、工房、作業場に相当するものと考えられる。

②柱穴列の主軸方向がほぼ東西方向或は南北方向 N-5～0～5°-W (=N-90°-E) を示す。1区第2面1-1、1-2、1-8、1-9、1-10、2区第2面2-1、2-2、2-4、3区第2面3-7、3-13、3-20など、4区第2面4-7、4-8、4-15、4-28などが該当する。集落の建物配置の中心となるものと考えられる。柱穴内に人頭大の石を入れるもの、土器を埋納するなどが見られた。柱穴内遺物から概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半頃に相当する。

③柱穴列の主軸方向が N-6～10°-W (=N-85°-E) を示す。2区第2面2-3、3区第2面3-3、3-10、3-12、4区4-2、4-23、4-24などが該当する。柱材を抜き取った後に人頭大の石を設置するもの、炭化物が含むまれるものがみられた。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半頃に相当する。

④柱穴列の主軸方向が N-11～17°-W (=N-75°-E) を示す。1区第2面1-3、1-4、1-7、3区第2面3-1、3-4、3-8、3-16、3-26、4区第2面4-3、4-4、4-9、4-25が該当する。概ね飛鳥・奈良時代～平安時代前半頃に相当する。

⑤柱穴列の主軸方向が N-17～25°-W (=N-70°-E) を示す。主に4区第2面4-6、4-10、4-12、4-16、4-17、4-20、4-26、4-27などが該当する。概ね平安時代前半頃に相当する。

⑥その他、柱穴列の主軸方向の傾きが大きいもの。4区第2面4-11、4-13、4-18、4-21などが該当する。

V期—集落の中心が移動し、建物を伴う集落域から荒廃、耕作地へと変換する時期。

主に3区第1面で、一時期荒廃し浅い落ち込み状小土坑がみられたが、その後各調査区第1面で南北方向の耕作溝や東西方向の溝などが見られるなど、耕作地として利用されていたことがうかがえた。概ね平安時代末から室町・鎌倉時代に相当する。

山城廃寺の主な遺構の変遷は、大きくV時に区別され、中でもⅢ期・Ⅳ期が山城廃寺の遺構の隆盛期であることがわかった。特に、Ⅲ期の方位を意識し整然と並ぶ大型建物群は、隣り合う建物との間隔や主軸方向がほぼ揃っており、整然と並ぶ寺院建物や回廊、豪族氏族の大型建物、倉庫群などが想起され、調査区北側に想定されている山城廃寺に関連する建物群や集落であったと考えられる。また、Ⅳ期において製塙土器を伴う建物や遺構、溝、さらにふいご羽口小片を含む焼土坑なども検出されていることから、一般的な居住域だけではなく、工房や作業エリアがあったものと考えられる。

この地の氏族であった「山代」氏や、降幡神社周辺に在ったとされる山城廃寺については、不明な点が多いが、難波から飛鳥・大和へ向かう交通の要所に位置するこの地の重要性が改めてうかがわれる。今後の調査によって、正確な建物の配置や建物、遺構の性格など、やや一般的な集落とは異なる性格を持つ山城廃寺の集落について、解明されるものと思われる。

第4章 調査地周辺で採取された遺物

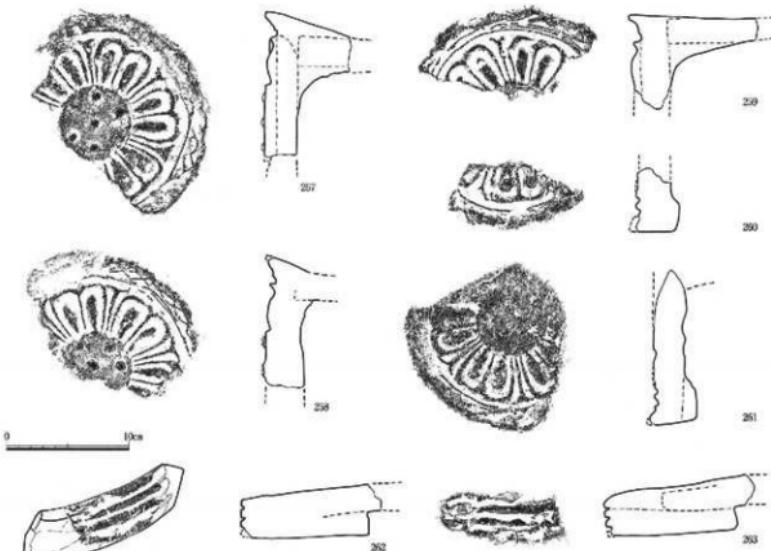
第1節 瓦 (表9)

山城廃寺では、今回の調査地の北側に位置する降幡神社周辺で、古くから地元の愛好家によって幾つかの古瓦が採集されている。古瓦の中には白鳳期（7世紀後半）の軒丸瓦なども含まれており、この付近に古代の寺院（山城廃寺）があったと想定されている。

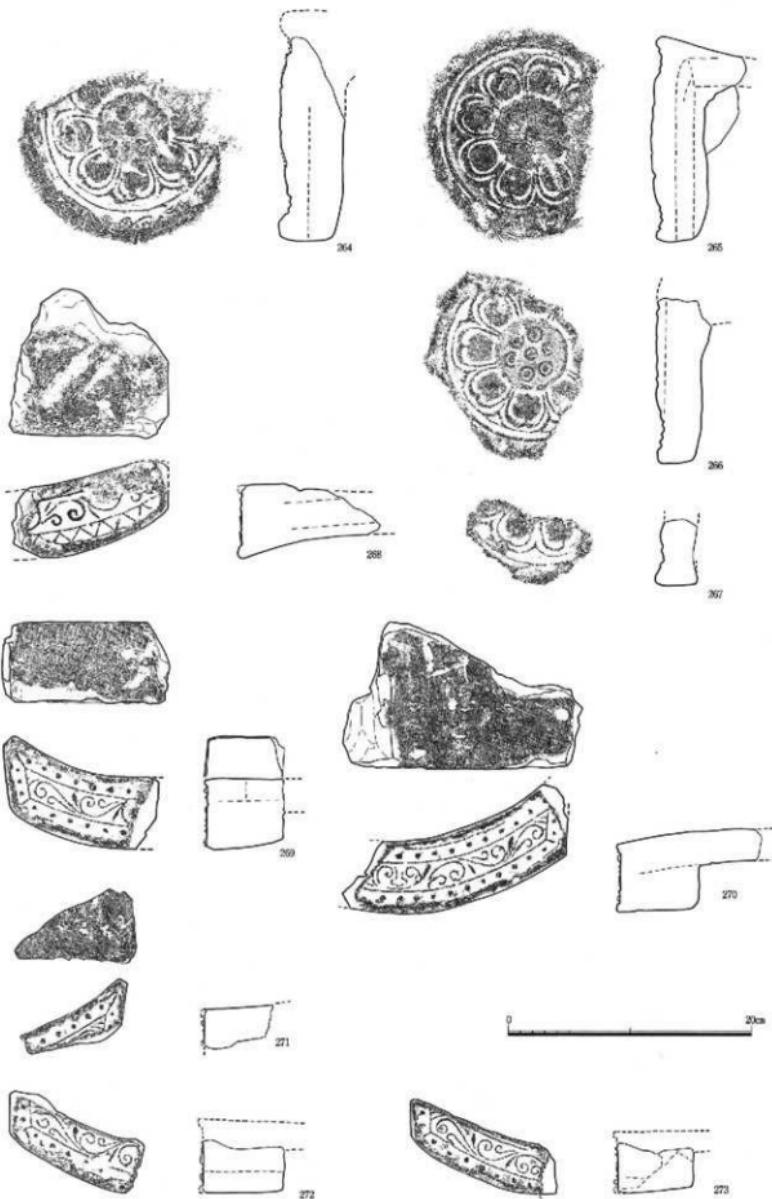
採集された古瓦はこれまでに、個別に紹介、報告されていた。今回、これまでばらばらであった資料をまとめて掲載することとした。また、上田睦氏によって成された三嶋家所蔵瓦の分類をそのまま踏襲した。本書で掲載した古瓦の資料（実測図・拓本・写真）と、これまでに掲載された主な文献は、表9 採取瓦一覧表にまとめた。

三嶋家所蔵瓦（第39～41図、図版24～26）

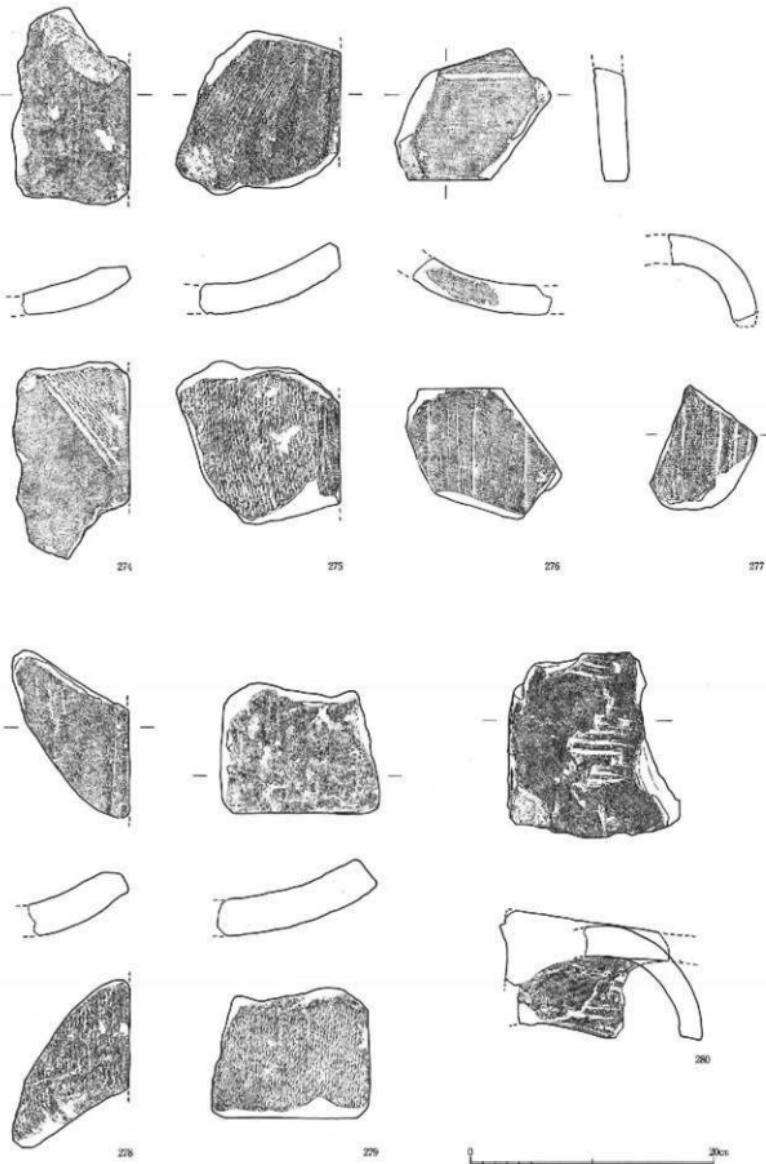
山城廃寺周辺から出土した古瓦として、故三嶋太郎氏によって採集された古瓦がある。これらの古瓦は、山城廃寺が古代寺院跡として周知される起因となった資料である。古瓦を採集した降幡神社周辺には三嶋氏の所有地があり、昭和7・8年頃に降幡神社社殿の改築の際に出土した瓦などを採集されたとのことである。三嶋太郎氏は、郷土史研究に造詣が深く、降幡神社周辺だけでなく、周辺地域の考古遺物の採集に努められていたようである。



第39図 三嶋家所蔵瓦(1)



第40図 三崎家所蔵瓦(2)



第41図 三鶴家所蔵瓦 (3)

今回本書に掲載した三嶋家所蔵の山城廃寺の古瓦は、軒丸瓦 10 点、軒平瓦 8 点、丸瓦 1 点、平瓦 5 点である。このほか、山城廃寺で採集したとされる瓦片が幾つか見られたが、実測するには至らなかった。なお、故三嶋太郎氏によって採集された古瓦は、これまでに『節・香・仙』¹などに紹介され、形式分類が成されている。

軒丸瓦 複弁蓮華文軒丸瓦(Ⅰ類)と単弁蓮華文軒丸瓦(Ⅱ類)の2種に分類される。

I類 複弁6葉蓮華文軒丸瓦(247～261) いずれも複弁6葉の蓮華文で、川原寺系に属する。中房には比較的小さい蓮子を1+6に配すが周環がない。花弁は端部が切込み反転した彫りの深いもの。直立内斜面縁の周縁には線鋸齒文が二重に施される。内傾した周縁の面の下段に圓線が巡る。直径約18.0cm、厚さ約2.0cm、周縁幅2.0cm、中房径約6.0cmを測る。やや小降りである。

II類 単弁8葉蓮華文軒丸瓦(264～267) いずれも単弁8葉の蓮華文である。外縁の内側斜面に唐草文を配する。外区と内区との間に圓線が巡る。花弁は弁端が切込み反転する。その中に大きく子葉を配する。間弁から続く圓線が花弁外側をつつむ。中房は大きい凸形を呈す。太い周環のある蓮子を1+8に配する。直径17.4cm、厚さ4.5cm、外区幅2.3cm、中房径5.8cmを測る。

II類軒丸瓦は、和泉では池田寺・坂本寺・秦廃寺・小松里廃寺、河内では法通寺・丹比廃寺などで出土している池田寺式軒丸瓦であるが、なかでもやや退化した形式のものとみられる。

軒平瓦 重弧文軒平瓦(Ⅰ類)と均正唐草文軒平瓦(Ⅱ類・Ⅲ類)の3種に分類される。

I類 4重弧文軒平瓦(262.263) 瓦当面は4重弧文を施す。瓦当厚3.4cm、頸部幅9.8cmを測る幅広の頸部を有する。川原寺出土の重弧文軒平瓦と類似した特徴を有する。

II類 均正唐草文軒平瓦(268) 内区に均整唐草文を配するが、上下区に珠文、下外区に鋸齒文を配する天星地水の軒平瓦である。瓦当厚6.0cm、内区幅2.6cmを測る。

III類 均正唐草文軒平瓦(269～273) 内区には垂飾りを中心とする均整唐草文を配する。外区は上下区ともに珠文、脇区にも珠文を配する平城宮系の軒平瓦である。瓦当厚5.2cm、内区幅2.0cm、脇区幅1.4cm、外区幅1.6cmを測る。

平瓦(274～276.278.279) いずれも桶巻作りの平瓦である。凸面には繩目叩き痕、凹面には布目痕、桶枠痕が残るもののが見られる。なかでも276は、凸面に布目痕、桶枠痕が残る凸面布目痕桶巻作り平瓦である。川原寺、和泉寺などで見られる製作技法のものである。平瓦はこのほかにも、細片が幾つか見られたが図化するには至らなかった。

丸瓦(277) 細片のため詳細は不明であるが、模骨使用で粘土板作りの丸瓦である。凹面には布目痕が見られる。丸瓦はこのほかにも、細片が幾つか見られたが図化するには至らなかった。

その他(280) 軒丸瓦であるが、瓦当面が剥離したものである。丸瓦の凸面および四面側壁部に粗い平行線の刻み目が見られる。瓦当部と丸瓦を接合するに当たり粘土で補強する際、はがれにくくする工夫がされたものと思われる。粗い平行線の刻み目のほかに、凸面では叩き目のスリ消し痕、凹面では布目痕が残る。

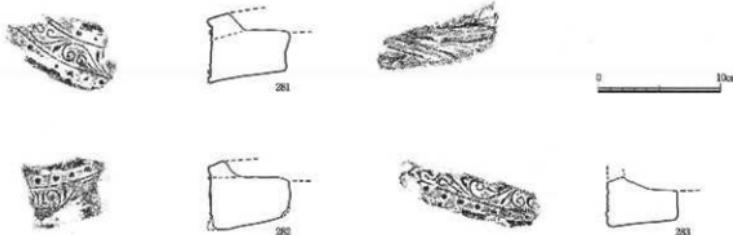
岡田家所蔵瓦（第42図、図版27）

山城廃寺周辺から出土した古瓦として、故岡田正雄氏によって採集された古瓦がある。これらの古瓦は、山城廃寺の瓦資料の数少ない貴重な資料である。古瓦を採集されたのは降幡神社の位置する河南町大字山城字宮ノ前の台地上で、以前に三嶋太郎氏の所有地付近とされている。岡田正雄氏は小学校に勤務するかたわらで、住職であった円照寺の所蔵文章の整理・研究、さらには地元・地域の歴史を探る研究として南河内から奈良盆地の南部の遺跡を踏破し、多くの考古資料の採集をされたとのことである。

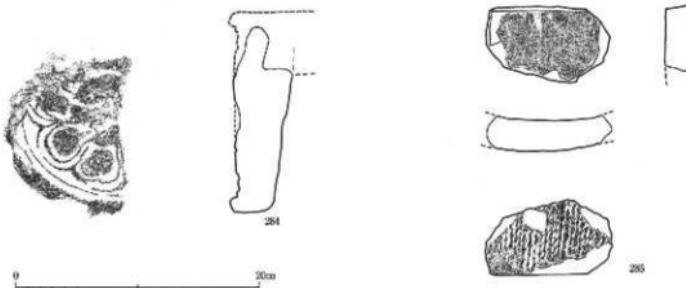
今回本書に掲載した岡田家所蔵の山城廃寺の古瓦は、軒平瓦3点である。なお、岡田正雄氏によって採集された古瓦は、「寛弘寺遺跡発掘調査概要・XIII」³に紹介されている。

山城廃寺に関連する軒平瓦は、重弧文軒平瓦（I類）と均正唐草文軒平瓦（II類・III類）の3種に分類される。岡田家所蔵の古瓦はいずれも分類のIII類に相当する。

軒平瓦（281～283） 内区に垂飾りを中心とする均正唐草文を配する軒平瓦で、外区には上下区ともに珠文を配する。平城宮系の軒平瓦である。いずれも、平瓦の広端部の下部に粘土を張って厚くして瓦当とする頸部を有する軒平瓦で、接合部において平瓦部分が剥がれ欠落している。中でも281の頸部裏面には、接合する際に施された刻み目の痕跡が見られる。また、283の上面には、平瓦の凹面に施した刻み目が転写され残っている。瓦当厚約5.2cm、内区幅約2.0cm、頸部幅6.0～6.8cmを測る。



第42図 岡田家所蔵瓦



第43図 近つ飛鳥博物館所蔵瓦

近つ飛鳥博物館所蔵瓦（第43図、図版27）

今回の発掘調査期間中に近つ飛鳥博物館職員と随行者が降幡神社付近で発見し、採集した瓦で、軒丸瓦と平瓦の2点である。採集された瓦は、現在近つ飛鳥博物館にて保管、所蔵されている。また、「大阪府立近つ飛鳥博物館 館報12」⁴⁾で紹介されている。

軒丸瓦(284) 単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、軒平瓦のⅢ類に相当する。外縁と花弁の間に圓線が巡る。花弁は弁端が切込み反転する。その中に大きく子葉を配する。間弁から続く圓線が花弁外側をつつむ。中房は大きい凸形を呈す。蓮子は確認できなかった。丸瓦と瓦当の接合部で欠損している。瓦当断面および裏面では、丸瓦と接合するために充填した粘土の痕跡が見られる。復元径約17.2cm、厚さ4.2cmを測る。

平瓦(285) 桶巻作りの平瓦で、凸面には綱目叩き痕、凹面には布目痕、桶枠痕が残る。残存長10.0cm、残存幅6.2cm、厚さ2.4cmを測る。

まとめ

山城廃寺でこれまでに採集された古瓦は、上田氏によりⅢ類に大別され軒丸瓦が確認されなかつたⅢ類を除いて軒瓦がセット関係を示すことが明らかとなった。さらに、創建瓦であるⅠ類は川原寺で出土した瓦と類似する。また、凸面布目痕桶巻作りの平瓦は、山城廃寺近郊の鎌織細井魔寺跡から多く出土しており、石川流域における有数の古代寺院とのつながりを感じさせる。

Ⅱ類は和泉の池田寺・秦廃寺、河内の法通寺などで出土した瓦の中で最も退化した文様で、池田

本番	成年:	種類	分類	第1番-1	1	「シンガシタム資料」 ²⁾	2	「淀谷寺」 ³⁾	3	「高畠12」 ⁴⁾	4	飛鳥白鳳「新空向」 ⁵⁾	5	「高畠」 ⁶⁾	6	7
257	第39回 図版24	二地家	軒丸瓦	複印6葉蓮華文	1 (P.4)	(P.7)	資料十九#	資料二〇#		図2		2 (P.9)	[83]	図4		
258	第39回 図版24	三地家	軒丸瓦	複印6葉蓮華文			資料十九#	資料二〇#								図4
259	第39回 図版26	三地家	軒丸瓦	複印6葉蓮華文	3 (P.4)	(P.7)										
260	第39回 図版26	三地家	軒丸瓦	複印6葉蓮華文	2 (P.4)	(P.7)										
261	第39回 図版24	三地家	軒丸瓦	複印6葉蓮華文	4 (P.4)	(P.7)				図2						
262	第39回 図版25	三地家	軒丸瓦	直筋文	6 (P.4)	(P.7)	資料十九	資料十九					3 (P.9)			図4
263	第39回 図版25	三地家	軒丸瓦	直筋文	5 (P.4)	(P.7)				図2						
264	第40回 図版24	三地家	軒丸瓦	単弁5葉蓮華文	7 (P.5)	(P.7)		資料二一								
265	第40回 図版24	三地家	軒丸瓦	単弁8葉蓮華文	9 (P.5)	(P.7)				図2			[83]			
266	第40回 図版24	三地家	軒丸瓦	単弁8葉蓮華文			資料二二	資料二二#								
267	第40回 図版24	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	8 (P.5)											図2
268	第40回 国版25	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	10 (P.5)	(P.8)	資料二二	資料二二		図2			[83]			
269	第40回 国版25	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	11 (P.5)	(P.8)	資料二三	資料二三		図2						
270	第40回 国版25	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	13 (P.5)	(P.8)	資料二二			図2			[83]			
271	第40回 国版25	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	14 (P.5)											
272	第40回 国版25	三地家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文	12 (P.5)	(P.8)										
273	第40回 国版25	三地家	軒平瓦	複印8葉蓮華文	15 (P.5)	(P.8)										
274	第41回 国版26	三地家	平瓦		17 (P.5)	(P.8)										
275	第41回 国版26	三地家	平瓦		18 (P.5)											
276	第41回 国版26	三地家	平瓦		16 (P.5)	(P.8)	資料二〇	資料二〇								
277	第41回 国版26	三地家	丸瓦													
278	第41回 国版26	三地家	平瓦													
279	第41回 国版26	三地家	平瓦													
280	第41回 国版26	三地家	軒丸瓦		19 (P.5)											
281	第42回 国版27	岡田家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文						図8	国版32					
282	第42回 国版27	岡田家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文						図8	国版32					
283	第42回 国版27	岡田家	軒丸瓦	複印8葉蓮華文						図8	国版32					
284	第43回 国版27	近つ飛鳥	軒丸瓦	複印8葉蓮華文								写真1-2				
285	第43回 国版27	近つ飛鳥	平瓦									写真3-4				

表9 採取瓦一覧表

寺式軒丸瓦の退化形式と考えられている。Ⅲ類は平城宮系の軒平瓦とされている。これまでに採集された古瓦から、山城廃寺は白鳳期（7世紀後半から8世紀初頭）頃に造営されたものと考えられる。山城廃寺ではいまだ寺院跡に関連する遺構の検出は見られないが、白鳳期の中央や他の有力氏族の古代寺院と関わりをもつ壯麗な寺院跡であることがうかがえる。そして、山代忌寸真作が生きた時代にもこの寺が存続していたことがうかがえる。

今回掲載した採集瓦資料については、所蔵管理者及び寄託者の許諾をいただき、資料調査を実施することができた。三嶋家所蔵瓦については、故三嶋太郎氏のご子息の三島守氏とご家族によって大切に保管、所蔵されている。資料調査に際し多大なご理解とご協力を賜り、瓦資料を借用させて頂いた。三嶋家にはこのほかにも、寛弘寺古墳群などで採集された埴輪や傘形土製品、金環、土器類などの遺物が保管、所蔵されている。また、岡田家所蔵瓦については、故岡田正雄氏のご家族である岡田貞夫氏によって太子町立竹内街道歴史資料館へ寄託され、同館にて保管、所蔵されている。資料調査に際し快く許諾して頂き、同館にて資料調査を実施することができた。これも、三嶋守氏とご家族様、岡田貞夫氏とご家族様をはじめ、太子町教育委員会及び太子町竹内街道歴史資料館の職員、大阪府立近つ飛鳥博物館の職員など多くの方々にご教示、ご協力を頂いたことによるものである。文末になったが、感謝とお礼を申し上げたい。

<参考文献>

- *1上田聰ほか「山城廃寺(一須賀廃寺)出土古瓦」大阪府文化財調査速報 第36号『節・香・仙』
大阪府教育委員会文化財保護課 1982
- *2藤澤一夫「河内飛鳥の古文化～特に河南町域について～」第3回近つ飛鳥風土記の丘歴史講演会レジュメ
「近つ飛鳥と仏教文化」河南町・河南町教育委員会 1990
- *3小林義孝「喜志遺跡・寛弘寺古墳群・山城廃寺その他～岡田正雄氏採集考古資料一」
『寛弘寺遺跡発掘調査概要・X III』 1994
- *4市本芳三「山城廃寺出土瓦」「大阪府立近つ飛鳥博物館 官報12」「大阪府立近つ飛鳥博物館 2008
- *5奈良国立文化財研究所總務文化財センター 埋蔵文化財ニュース40『飛鳥白鳳寺院関係文献目録』 1983
- *6大阪府教育委員会「附章 桤河泉の古代寺院」「新堂廢寺」 2001
- *7上林史郎「一須賀古墳群三昧」「大阪府立近つ飛鳥博物館 官報91」「大阪府立近つ飛鳥博物館 2005
- *8大阪府教育委員会「鎌織經井廃寺発掘調査概要」 1985
- *9藤澤一夫「桜河泉出土古瓦様式分類の一試企」『考古学評論3 仏教考古学論叢』 東京考古学会 1941
- *10鳥崎久恵「桜河泉古代寺院文献目録」第1回 桤河泉古代寺院フォーラム「桜河泉の古代寺院とその周辺」
泉南市教育委員会・桜河泉古代寺院研究会・桜河泉文庫 1997
- *11上田聰「飛鳥時代の河内國出土軒瓦」「河内古代寺院巡礼」大阪府立近つ飛鳥博物館 2007
- *注 表9の分類において、軒平瓦の「均正唐草文I」はⅢ類、「均正唐草文II」はⅡ類に相当する。

第2節 碓石

今回の調査地の北方には、楠木の巨木の傍らに降幡神社の小さな祠が安置されている。巨木の根が小さな祠や石段、石回いを地中から動かし、今にも倒れそうに傾いている。この小さな祠の周辺は、古くから古瓦や土器片などが散布することで知られている。この周辺で採集された古瓦については先に述べたが、この降幡神社付近ではこれまでに建物の礎石（礎石1）が見つかっている。礎石1については、この周辺の住民の方の話では、昭和40～50年代に降幡神社周辺の道路を整備する際に土中から発見されたとのことである。長年、降幡神社の傍らに放置されていたが、昭和60年代に河南町職員により回収され、河南町の総合運動場（現　ぶくぶくドーム）の用地内に移設された。この礎石については、1990年に開催された第3回近つ飛鳥風土記の丘歴史講演会「近つ飛鳥と仏教」の資料に礎石の写真が掲載されている。今回、改めて実測を行い紹介することとなった。

近年になって、降幡神社の西隣の畠地内から新たな礎石（礎石2）が発見された。土地所有者の方のお話によると、畠地の地中に大きな石があり、耕作に支障が出るため取り上げようと周りを掘り下ろしたが動かすことができず、しばらくそのまま露出していたとのことである。そのような折、降幡神社を訪れた方が、その大石の側面に柱座の突出する円弧があることを発見し、考古学関係者に知られることとなったようである。この礎石については、土地所有者の方の意向を伺いながら河南町職員と対応を協議していくよう進めている。



第44図 降幡神社周辺図(寺域推定図)

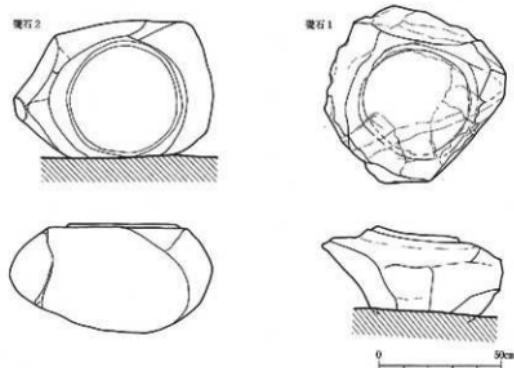
礎石2は現在埋め戻され、周辺地には野菜などの作物が実っている。

礎石資料については、礎石2が現存する土地の所有者及び礎石1を保管・所蔵している河南町教育委員会の許諾をいただき、資料調査を実施した。資料調査に際しご理解、ご協力いただいた土地所有者、河南町教育委員会及びぶくぶくドームの職員をはじめ、多くの方々にご協力、ご教示をいただいた。記して感謝いたします。

礎石1 現在ぶくぶくドームで保管されている礎石である。礎石1は幅約0.75m×0.80m、厚さ約0.4mの台形状を呈する。上面はほぼ平坦で、直径0.44m、高さ約0.02mの柱座を造り出している(円形柱座差造出礎石)。側面は大きく四方向を荒く削り、微調整を加えるものである。礎石の表面は磨耗が著しく、細かい亀裂が多く見られた。

礎石2 降幡神社の西隣の畠地内から発見された礎石である。礎石2は横になっており、上面が側方を向いている。丸みを帯びた石の2方向を斜めにカットし形を整えている。礎石2は上面を平坦にし、直径0.44m、高さ0.15mの柱座が造り出されている。

板状石 現在ぶくぶくドームで保管されている礎石1の傍らに、礎石の周辺で発見された板状石が見られる。表面はやや凸面を成すが整った長方形形状に整形され、側辺に沿って浅い直線状の切込みを施す加工石である。一辺の長さは0.9m×0.7mで、厚さ約0.2mを測る。長辺の約0.1m内側にやや段を成すように直線的な切り込みを施す。基壇などに用いられたものであろうか、用途・詳細は不明である。これらの石は花崗岩とみられる。



第45図 磂石実測図

	幅①(cm)	幅②(cm)	厚(cm)	形態	柱座	径(cm)	柱座	高(cm)	その他
礎石1	75	73	45	やや方形状	44	2			表面劣化著しい亀裂入る
礎石2	83	57	44	長方形状	44		1.5		表面劣化著しい

表10 磂石計測表

降幡神社（第44図）

山城廃寺の遺跡範囲のなかで、最も中心的な位置を占める降幡神社について紹介してみたい。降幡神社は、古来南大伴村と北大伴村（現在の富田林市と河南町山城付近）の共同の鎮守社として祀られてきた。式内社ではないが、国初以来の古社である。祭神は天忍日命・ニニギノ尊・彦火々出見尊・ウガヤフキアエズノ尊・神ヤマトイワレ彦尊（神武天皇）である。皇祖の神々をお守りする武神、天忍日命を主神としていることから、この地はかつて大伴氏の支族の祖廟であり、その祖神を祀ったものとされている。現在も周辺の地名に「大伴」が残る所以であろう。

現在、降幡神社は楠木の巨木の根元に崩れかけた石段と石垣に囲まれた小さな祠が配されている。かつては、境内七百三十五坪、あるいは東西三十一間半、南北二十六間の境内に社と拝殿、木の一ノ鳥居と石の二ノ鳥居があり、さらに幅二間四尺、長寸三十二間の馬場があったようである（『大阪府全志』）。明治40年には、神主が居ないことから老須賀神社に合祀せられた。この合祀に因連して、廃社扱いにするのが忍びないと、氏子や村役達が境内や社殿を保護し復興することに苦心努力した。以後約30年にわたり、官庁と住民の紛争が続いた。その間にも鬱蒼とした森は伐られ、境内は開かれて田畠となった。長年の紛争の末、昭和初期（昭和7.8年頃か）に神社社殿の改築が成され、旧神域にささやかな小祠が祀られた。当時降幡神社周辺に所有地を持っておられた三島大郎氏の貴重な資料の中に、復興された降幡神社境内の写真があり、拝見させていただいた。写真の中の降幡神社は整然とした造りのものであった。おそらく現在残っている石段と石垣は当時改築されたものであるが、石垣の上には外から中に入れないように板の垣根が巡り、階段上には門が取り付けられていた。また現在巨木となっている楠木は当時の写真ではなく、境内の周辺に木立が立ち並んでいる。石段の前には広い用地があり、緩やかな木の階段を登って来るようになっている。境内は周辺よりやや高く盛り上がっている。基壇を想定させる。広い用地の向かって右側には、木造の手洗い場が見られる。その傍らには、礎石と思われる巨石が一石、動かないよう小石をかませて配置されている様子がうかがえる。写真の中の風景が何時頃まで続いていたのかは定かではないが、当時の面影は今は見られない。

天忍日命を祖神とする「大伴氏」は、その本拠地が大和盆地東南部（橿原市・桜井市・明日香村付近）とされている。古くから天皇に従属し、雄略天皇の頃には大伴守屋は大連を賜り、中央で霸権を確立していた。孫の金村が大連であった時が全盛期であった。欽明天皇の代で政策の失敗により金村は失脚し、以後摂津国住吉群（現在の大坂市住吉区帝塚山付近）の邸宅に引き籠る。大伴氏は蘇我氏、物部氏との権力争いに敗れ、政治的指導権を失い、中央政界から疎外されるようになる。以後、蘇我氏の勢力下に入り僅かに命脈を保つこととなる。時は経ち、都が平城に遷されると、大伴氏は宮の東北に当たる佐保に邸宅を構えたとされている。

大伴氏の祖神を祀った降幡神社を建てたであろう大伴氏の支族が何時頃この地に居たのかは定かではない。周辺地に「大伴」の地名が残る一方で、奈良時代には「山代郷」と称され、渡米系氏族である山代忌寸の一族がこの地を本拠地としていたとされている。

山城庵寺の寺域（第44図）

降幡神社周辺では、これまでに白鳳期（7世紀後半）の瓦片や建物の礎石などが見つかっており、降幡神社の西側に古代の寺院跡（山城庵寺）があったと推定されている。飛鳥・奈良時代には、渡来系氏族により多くの古代寺院が建立され、とりわけ南河内の石川流域には古代寺院が一斉に成立し、この地域は濃密な伽藍建立地域となっていた。莫大な運営経費を支えるだけの経済力を有する氏族・地方豪族が点在していたものと推定される。この地の小字名は「宮ノ前」である。まさしく宮の如く壯麗な寺院の存在を暗示するものである。

山城庵寺の寺域については、藤澤一夫氏により寺域推定範囲が示されている。この地は、北流する千早川と梅川の中間に位置し、標高約70mを測る河南台地の先端部にあたる。台地の西側は千早川に向かって急崖を成し、台地の先端も段丘崖により区画され、東側には細い南北谷が刻まれている。降幡神社の南側には台地の中央部付近まで細い東西方向の谷が入る。降幡神社から谷を挟んで約150m南側に今回の調査地である山城新池がある。降幡神社の西側は、東西約120m、南北約300mにおよぶ田畠地で、今も条里が見とれる平坦地となっている。この中でも降幡神社を東西方向の基準とし、ほぼ正方位を示す軸線上で、西側に延長して南北約1町半、東西約1町の寺域範囲を推定している。寺域推定範囲内からは礎石1が出土している。現在までに、古瓦や礎石以外に古代の寺院跡に関する考古学的な資料は見つかっていない。

今回の調査地である山城新池は、明治29年（1913）に造られた人造池で、昭和26年には北側区画が拡張されたものである。北側拡張部は元々この地にあった条里区画（東西約1町、南北約半町）に相当する。山城新池が造られる以前には、降幡神社の南側の谷を挟んでさらに南側にも南北約200～300m、東西約100mの方形状区画が存在していたことになる。今回の発掘調査の北側堤体部（2区・3区）では、正方位を意識した大型方形状遺構（柱穴）列が検出され、いわば寺院に伴う大型建物や回廊を想定せるものである。瓦などの出土は無かったが、寺城の南限の遺構となり得るのではないだろうか。

奈良時代から平安時代頃には、山城地区は「山代郷」と称されていた。「山代郷」の名は、奈良時代に山代忌寸一族などの山代氏が当郷を本拠地としていたことによるものである。渡来系氏族である山代忌寸氏が何時頃この地を本拠地にしたのかは定かではない。これまでに史料として『正倉院丹裏古文書』や『新撰姓氏録』、さらに奈良県五條市で発見された山代忌寸真作墓誌などから、この頃には山代郷で支配的地位を占める有力氏族であったと推定される。「山城庵寺」は、この山代氏の氏寺として大和政権の影響を受け建立されたものと考えられる。

今回の調査で検出した大型の掘立柱建物は、「山城庵寺」にかかわる集落跡、あるいは一時期の寺域に関連する建物である可能性がうかがえる。「山城庵寺」の寺域と伽藍配置、周辺の集落の様子、また合祀される以前の降幡神社の様相については、いまだ不明である。今後、周辺の発掘調査により、この地域の歴史がより一層解明されるものと期待したい。

第3節 弥生土器

既往の調査（第46図、図版22・23）

山城廃寺は、昭和49年の農道拡幅工事の際遺物が出土したこと、同年緊急調査が実施され、調査の結果、新規発見遺跡として周知された遺跡である。当時は「山城遺跡」^{※1}とされていた。調査の成果として、深く刻まれた数条の溝が検出された。また、溝の中から良好な弥生土器、サヌカイト片などが多く出土している。出土した弥生土器の内2点(225,229)は、当時調査地の東側で発掘調査が実施されていた弥生時代の大高地性集落である東山遺跡^{※2}の報告書に掲載されている。この弥生土器2点のほかに未報告の遺物があることがわかり、改めて遺物実測・写真撮影をし、まとめて掲載することとした。

225は壺形土器である。口径20.7cm、頸部径14.8cm、体部最大径31.2cm、残存高18.5cmを測る。やや直立気味に斜上方に伸びる頸部にほぼ水平に曲がる口縁部を持つ。口縁端部は上方に強く張出し、下方は少し張出す。口縁部内面には列点文、口縁端部外面には波状文を施す。体部外面肩部はクシ彫麻状文3条、その下に横方向の刷毛目、腰部には波状文が施される。口縁部から頸部内面はナデ、体部内面はヘラ状工具による縦方向のナデ、一部に斜め方向の刷毛目が見られる。外面に焦げた黒斑が見られる。

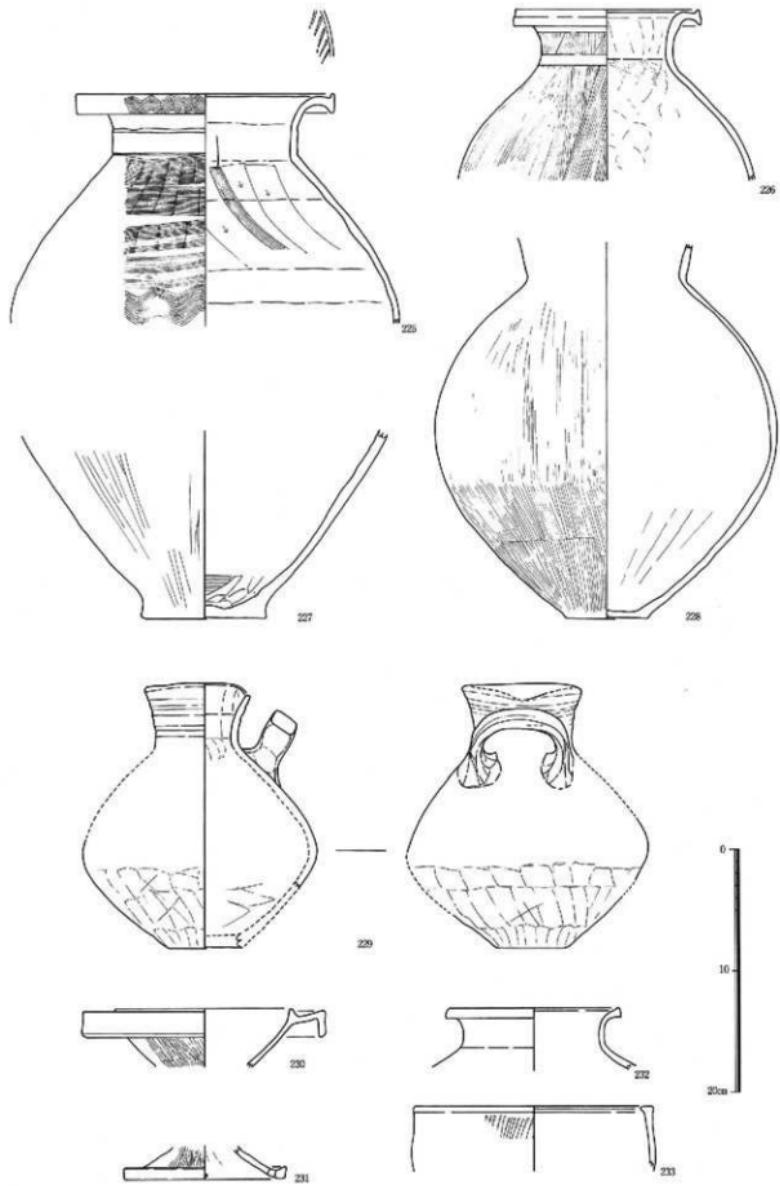
226は壺形土器である。口径15.0cm、頸部径11.0cm、体部最大径24.2cm、残存高14.0cmを測る。ややカーブして斜めに広がるやや短い頸部に水平方向に広がる口縁部を持つ。口縁端部は上方に立ち上がり、下方にやや張出す。端面には工具による強い横ナデにより僅かに段を成す。体部はやや丸みを持つ。頸部及び外面体部は概ね縦方向の刷毛目を施す。口縁部内面は指ナデで指圧痕が残る。体部内面は一部に刷毛目が残るが概ね抑制され後ナデを施す。

227は壺形土器の底部である。底部径10.0cm、体部最大径30.0cm、残存高15.0cmを測る。平底から体部は斜上方に伸びるもの。外面は粗い縦方向のミガキ、内面はナデ、底部付近に一部に刷毛目と指ナデ痕が残る。

228は口縁部がないため不明瞭だが壺形土器で短頸壺になるものと思われる。頸部径13.0cm、体部最大径28.0cm、残存高30.7cmを測る。平底からやや丸みのある胴部である。外面は縦方向のミガキの後に板状工具によるナデを施す。体部底部付近は縦方向のミガキを施す。内面は下方から上方への板状工具によるナデである。外面には黒斑が見られる。

229は水差し形土器である。口径8.7cm、頸部径6.8cm、胴部径19.2cm、高さ21.6cmを測る。胴部はやや丸みのある算盤珠様で、短く直行する口縁部を持つ。把手側の口縁端部で一部窪みを施す。口縁部外面には3条の回線文が施されるが、体部は無文である。胴部から底部にかけてヘラミガキ痕が見られる。また、体部外面には黒斑が広い範囲で見らる。

230は水平口縁をもつ高杯である。口縁内面突帯部径14.4cm、口縁部径19.8cm、残存高4.8cmを測る。杯部は緩やかに斜上方に伸び口縁部は外側に屈曲して水平口縁となる。口縁部内面には短い内面突帯が巡る。ほぼ水平に伸びた口縁から端部は垂下し広い面をもつ。杯部外面は



第46図 既調査出土遺物(弥生土器)

縦方向のミガキが施される。

231は高杯の脚底部である。230の底部に相当するものと見られる。底径13.2cm、残存高2.7cmを測る。浅いハの字状に開く脚底部で、端部は外上方に肥厚して伸び端面を成す。外面は縦方向のミガキが施される。内面にはナデが施される。

232は壺形土器である。口径13.8cm、頸部径11.6cm、残存高5.0cmを測る。やや緩やかにカーブして斜上方に伸びる短い頸部から口縁部は外方に伸び、口縁端部は僅かに上下方向に肥厚する。内外面は磨耗が著しく調整は不明である。

233は台付無頸鉢の鉢部である。口径19.6cm、残存高5.3cmを測る。口縁部は僅かに内湾して上方に伸び、口縁端部は内側に少し肥厚して伸びる。外面は磨耗が著しく不明瞭であるが、描画状文と見られる。

掲載した遺物のほかに、溝状遺構や包含層から高杯、壺、甕、鉢などの破片が多く出土している。しかしながら、復元・実測するまでには到らなかった。コンテナ2箱におよぶ。いずれも弥生時代中期後半（Ⅲ～Ⅳ様式）頃に相当する。

その他の遺物

「山城遺跡」から出土した弥生土器として2点を紹介した「南河内における初期農耕社会の動向」^{※1}の中で、南河内で出土した銅鐸について記されている。

向山より銅鐸出土のこと

「元禄四年の春、向山に内一すか領字犬上山、南口忠右衛門所有の山畠に、ため池を掘らんとて、鹿丸右衛門と、大念寺前の久兵衛と云日用の者供。唐鋤を以大地をうがつ。其土中よりつり鐘に似てそれにも非、からがねにて作りたる、何共しがねを掘出したり。(後略)」

(野村豊・油井喜太郎編『河内屋可正旧記』『近世庶民資料』昭和30年)

出土地点は、「一すか領字犬上山」とあり、「一須賀の山城遺跡の近くであろう。」とされているが、現在の山城廃寺内で無いとしても、山城の地の周辺で銅鐸が出土したことがうかがえる。

<註・引用文献>

※1 昭和49年3月に実施された緊急の発掘調査で、遺物・遺構が発見されたため新規発見遺跡として通知したこと始まる。

当初、遺跡名は「山城廃寺」ではなく、「山城遺跡」とされていた。また一時期「一須賀廃寺」となり、昭和60年代に「山城廃寺」と改名し今に至っている。

※2 大阪府教育委員会『東山遺跡』大阪府文化財調査報告書 昭和54年

※3 菅原正明「南河内における初期農耕社会の動向」「東山遺跡」大阪府教育委員会 昭和54年

第5章 自然科学分析

第1節 製塙土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

河南町に所在する山城廃寺は、大阪平野南東部を北流する東条川と梅川に挟まれた段丘上に立地する。背後には金剛山地北西麓に相当する山地が広がっている。山城廃寺は、白鳳時代の瓦が出土する寺院跡として知られており、今回行われた発掘調査では、飛鳥～奈良時代とされる製塙土器が、須恵器や土師器および瓦と共に多数出土している。出土した製塙土器は、内面に布目压痕のある「六連式土器」とされており、主に山口や福岡に分布することから、これらの地方から塙とともに運ばれたものであるとの発掘調査所見が示されている。本報告では、製塙土器の材質(胎土)の岩石学的特性を明らかにすることにより、既存の各地域における地質資料との比較から、上述した所見について検討を行い、土器製作地に係わる資料を作成する。

1 試料 (図版 28)

試料は、山城廃寺より出土した製塙土器片 14 点と関連試料として提供された河南町平石川流域に分布する平石古墳群で確認された奈良時代の集落跡より出土した製塙土器片 8 点の合計 22 点である。試料には、それぞれ山城廃寺資料 1～資料 14、平石古墳群資料 1～資料 8 という試料名が付されている。

2 分析方法

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、松山ほか(1999)の方法に従う。メカニカルスチージュを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果 (図版 31・32)

観察結果を図 1～3 に示す。なお、各試料における各鉱物片・各岩石片の計数値は大阪府教育委員会に保管されている。図 1 に示された鉱物および岩石は、比較的出現頻度の高いものを選択したものである。今回の試料は、鉱物片および岩石片の種類構成により A～C 類に分類され、

粒径組成からは、a～f類に分類される。碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が15～25%の範囲にあるが、特にある値にまとまる傾向は見出せない。以下に各分類について述べる。

a) 鉱物・岩石組成

A類：鉱物片は石英と長石類のみ。岩石片は、チャート、泥岩、砂岩の堆積岩類と凝灰岩、流紋岩・ディサイトの火碎岩・火山岩および深成岩の花崗岩類が混在する。なお、凝灰岩および流紋岩・ディサイトは、基質が完晶質であることから中生代白亜紀に日本各地で噴出したディサイト・流紋岩質の凝灰岩や溶結凝灰岩および溶岩などに由来する。また、砂岩の基質には酸化鉄が多く含まれていることも認められた。今回の試料の中には、上述した鉱物・岩石組成に加えて火山ガラス（第四紀更新世の未固結テフラ層に由来する）を少量含む試料や図1には示されていない植物片を少量含む試料も認められたことから、基本的な組成をA1類とし、火山ガラスを含む試料をA2類、植物片を含む試料をA3類に細分した。

B類：鉱物片は石英と長石類のみ。岩石片は、チャート、泥岩、砂岩の堆積岩類と深成岩の花崗岩類が混在する。A類との違いは、凝灰岩および流紋岩・ディサイトの岩石片が含まれないことである。

C類：鉱物片は石英と長石類および図1には示されていない少量の黒雲母が含まれる。岩石片は凝灰岩と流紋岩・ディサイトのみである。

b) 粒径組成

a類：極粗粒砂をモードとする。

b類：粗粒砂をモードとする。そのうち、粗粒シルトに第二のピークがある組成をb1類とし、細粒砂に第二のピークがある組成をb2類とした。

c類：中粒砂をモードとする。そのうち、粗粒砂も同量程度に多く含む組成をc1類とし、それ以外のものをc2類とした。

d類：細粒砂をモードとする。

e類：極細粒砂をモードとし、粗粒砂または極粗粒砂に第二のピークがある。

f類：粗粒シルトをモードとする。そのうち、粗粒砂または極粗粒砂に第二のピークがある組成をf1類とし、極細粒砂および細粒砂も同量程度に多い組成をf2類とした。

上記分類基準に従って各試料の胎土を分類した結果を表1に示す。山城廃寺出土製塙土器では、A類が多く、14点中9点までを占める。A類の中では、A1類が6点と多く、A2類が3点認められ、A3類は認められない。A類以外では、B類が4点、C類が1点認められた。一方、粒径組成をみると、A1類の試料は、b1、c1、c2、e、f2の各分類に分散し、まとまりを示さない。A2類の試料3点では、a類が1点とb1類2点とに分かれ、全体としては粗粒の傾向にあり、B類の試料4点は、2点がf1類であり、他はe類とf2類に分かれ、全体としては細粒の傾向にあると言える。C類の試料は1点であり、粒径組成はb2類を示すが、b2類に分類される試料は、この試料1点のみである。平石古墳群出土製塙土器は全てA類に分類され、8点中5点までがA1類に

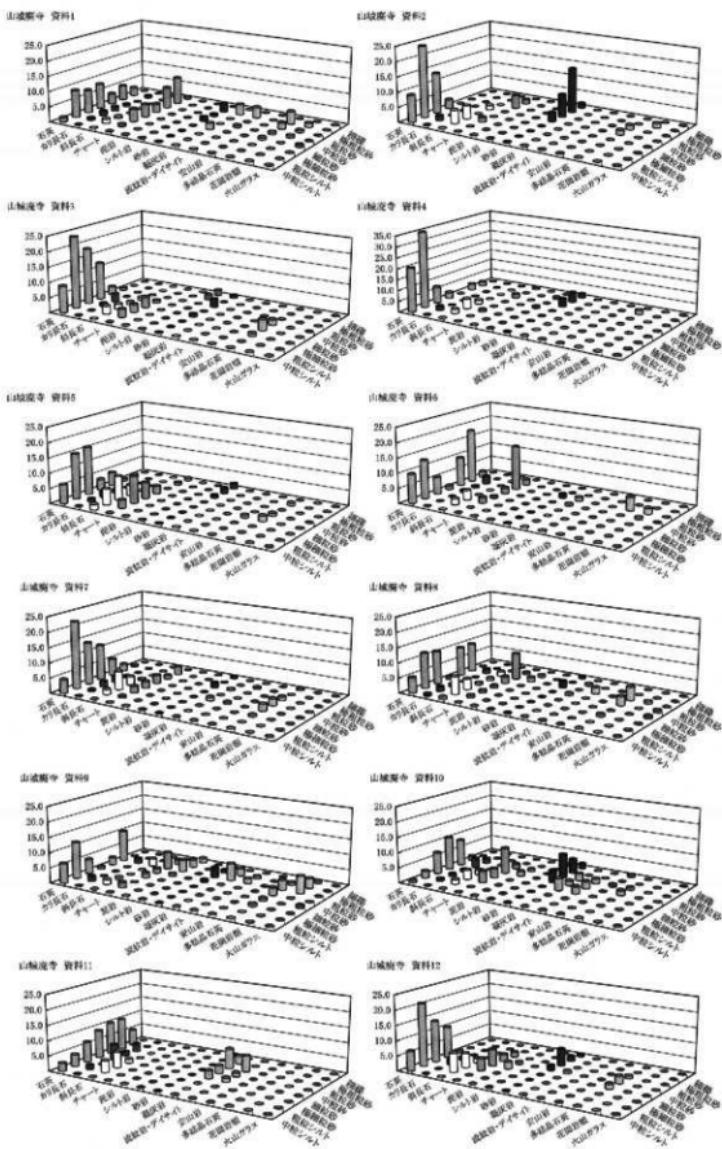


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

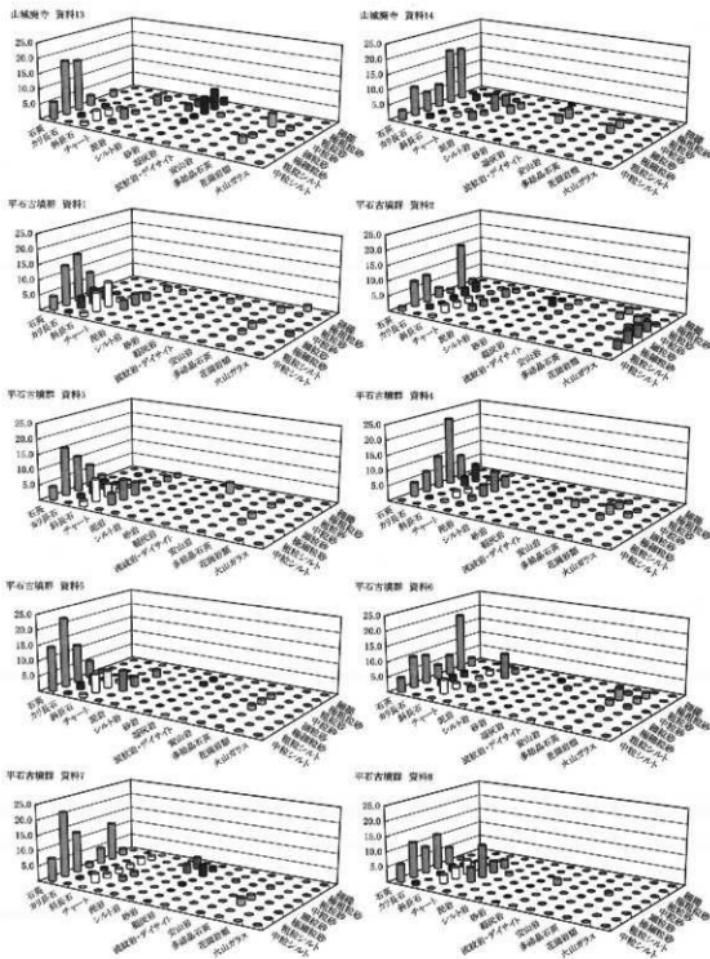


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

分類される。残り3点のうち、2点はA2類であり、1点がA3類に分類された。粒径組成を見ると、A1類の試料5点は、b1類が2点あるほかは、c2、e、f1の各分類に分散する。また、A2類2点はb1類とe類に分かれる。A3類1点は、d類に分類されたが、d類に分類された試料は、この試料1点のみである。

4 考察

胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの

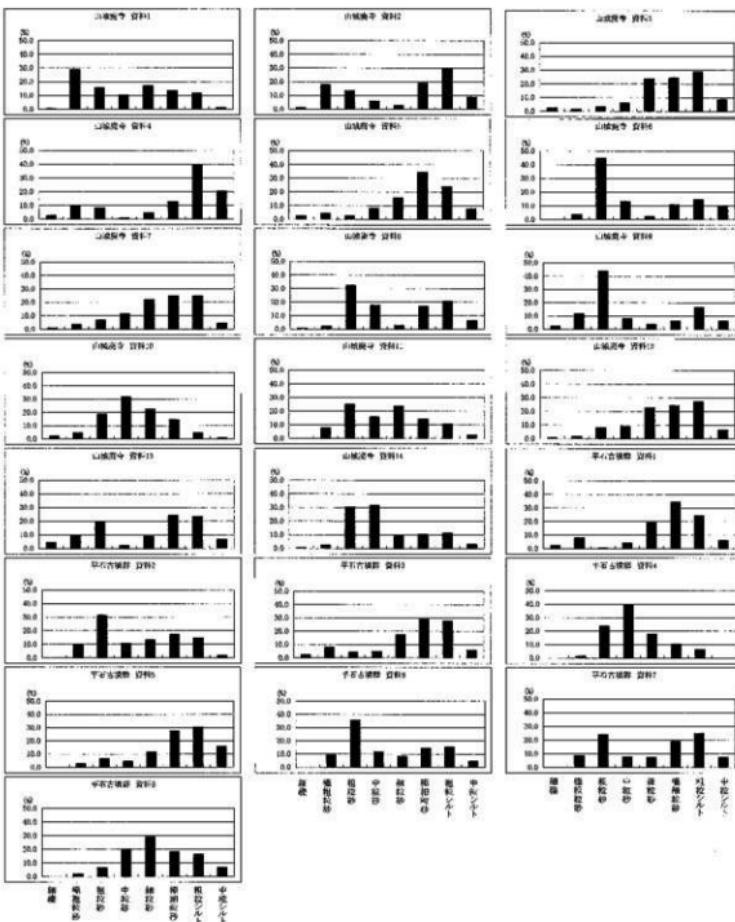


図2 肥土中の碎屑物の粒径組成

堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆していると考えられる。山城廃寺や平石古墳群の地質学的背景に相当する金剛山地は、ほぼ全山が領家帯の花崗岩類から構成されている（政岡, 1982）ことから、周辺の堆積物中には多量の花崗岩類の岩石片やそれに由来する鉱物片が含まれていることが想定される。今回の試料には、このような組成を示す肥土は1点も認められておらず、出土地周辺で作られたものではないことは明らかである。

今回の試料で分類された鉱物片および岩石片の種類構成のうち、A類の特徴から想定される地質学的背景は、堆積岩の分布域を主とし、これに白亜紀の流紋岩～デイサイト質の火山岩・火碎

岩の分布域と花崗岩類の分布域を伴うような河川の下流域である。B類は、堆積岩類の分布を主とし、花崗岩類の分布域を伴うような地域、C類は、すぐ背後に白亜紀の流紋岩～ディサイト質の火山岩・火碎岩からなる山地が迫っているような地域がそれぞれ想定される。

ここで、発掘調査所見により、その産地の可能性があるとされた山口県域の地質について、山口地学会(1995)や日本の地質「中国地方」編集委員会(1987)により概観すると、堆積岩類、白亜紀の流紋岩～ディサイト質の火山岩・火碎岩および花崗岩類のいずれも山口県域内に分布しているが、A類およびB類の組成を示すような堆積物が分布する河川の下流域は、瀬戸内海に流下する河川では想定し難い。なぜならば、瀬戸内側の山口県域には領家帯の花崗岩類および広島花崗岩類が広く分布しているため、下流域の碎屑物は花崗

岩類の岩石片および鉱物の割合が高くなると考えられるからである。一方、山口県域の日本海側については、広く分布する地質として阿武層群と呼ばれる白亜紀の流紋岩～ディサイト質の火山岩・火碎岩からなる地質が記載されている。しかし、日本海側に注ぐ河川の流域では、堆積岩類の分布はそれほど広くではなく、また、花崗岩類の分布も局所的である。したがって、山口県の日本海側に注ぐ河川の下流域においてもA類およびB類のような堆積物の分布は考えにくい。ただし、C類については、阿武層群からなる山地を流れる河川流域の堆積物の中に見出される可能性がある。

発掘調査所見で示されたもう一つの産地である福岡県の地質については、久保ほか(1993)および日本の地質「九州地方」編集委員会(1992)により概観することができる。福岡県の場合、遠賀川より西の地域は、白亜紀の花崗岩類である北部九州花崗岩類と三郡変成岩を主体とする地質であることから、A、B、Cの各類のいずれの地質学的背景にもならない。また、遠賀川流域には、呼野層群と呼ばれる古生代の堆積岩類と閑門層群と呼ばれる中生代の堆積岩類および溶岩・火碎岩からなる地質が分布し、さらに北部九州花崗岩類も分布する。閑門層群中の溶岩・火碎岩は安山岩質およびディサイト質とされていることから、遠賀川下流域には、A類の特徴を示す堆積物が分布している可能性がある。また、閑門層群の分布は遠賀川下流域であるから、閑門層群からなる山地縁辺においてはC類の組成を示す堆積物も想定される。一方、凝灰岩と流紋岩・ディサイトを含まない堆積物の分布は、遠賀川下流域では想定し難い。

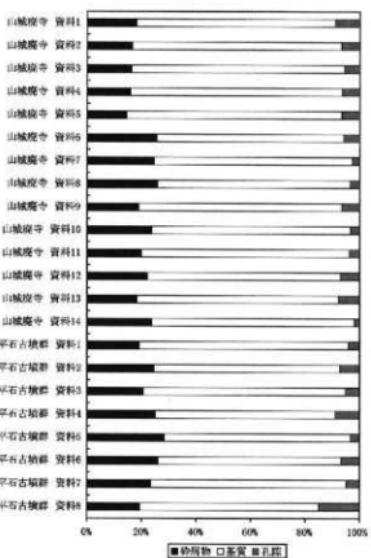


図3 碎屑物・基質・孔隙の割合

現時点では、発掘調査所見とは別に、試料の出土地から最も近い塩の供給地である大阪湾岸地域における地質学的背景を検討することもしておきたい。大阪平野周辺の地質を市原ほか(1991)、宮地ほか(1998;2001)などの地質図と日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などの記載により概観すると、A類の地質学的背景である堆積岩類、白亜紀の流紋岩～ディサイト質の火山岩・火碎岩および花崗岩類という地質が接する地域として和泉山脈をあげることができる。

和泉山脈を構成する主要な地質は、北麓を構成する領家帯の花崗岩類と主部を構成する白亜紀末の堆積岩からなる和泉層群および両地質に挟まれて分布する泉州層群である。和泉層群を構成する主な岩石は、礫岩、砂岩、泥岩であり、礫岩の種類には、酸性火碎岩、石英斑岩、花崗岩、チャートなどが確認されている(近畿西部 MTL グループ, 1981)。泉州層群は、白亜紀後期に噴出した流紋岩～流紋岩ディサイト質の溶結凝灰岩、凝灰岩、溶岩から構成されている(山田ほか, 1979)。従って、例えば和泉山脈から大阪湾へ流下する河川の下流域には、A類の特徴を示す堆積物が分布している可能性がある。また、泉南市より西の和泉山脈西端部付近では、領家帯の花崗岩類や泉州層群は分布せず、和泉層群のみの分布とされている。したがって、この地域の河川下流域の堆積物では、B類の特徴を示す堆積物も分布する可能性がある。当社では、岬町に所在する山田海岸遺跡より出土した奈良時代の製塙土器の分析例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999)が、結果の呈示方法が異なるものの、薄片観察結果からは、今回の A類および B類に類似する組成が看取される。ただし、それらの試料には、微量ではあるが、今回の試料には認められなかった石英片岩が含まれているなど、若干の差異も認められる。

今回の分析の目的は、山城廃寺および平古古墳群から出土した製塙土器の産地が、山口県あるいは福岡県地域である可能性を探ることにあった。既存の地質記載のみからの推定では、山口県地城の可能性は低く、福岡県地城では遠賀川下流域に可能性のあることが想定された。さらに、和泉山脈から流下する河川の下流域すなわち大阪湾南岸域の可能性もあることが指摘できた。今後、より具体的な製塙土器の産地を特定するためには、想定される地域出土の製塙土器および河川下流域の堆積物の両者の鉱物・岩石組成を実際に確かめた上で、検討を重ねる必要がある。

なお、今後の検討においては、粒径組成にも留意していく必要があると考える。今回の分析では、

遺跡名	資料	鉱物・岩石組成						粒径組成					
		A 1 2 3	B C	a b c d	e f g h	i j k l	m n o p	i j k l	m n o p	d	e f g h	i j k l	
山城廃寺	1	■						■	■	■	■	■	
	2		■										■
	3			■									■
	4				■								■
	5					■							■
	6						■						■
	7							■					■
	8								■				■
	9									■			■
	10									■			■
	11										■		■
	12										■		■
	13										■		■
	14										■		■
平古古墳群	1												
	2												
	3												
	4												
	5												
	6												
	7												
	8												

1) 鉱物・岩石組成

A1：鉱物は石英と長石類のみ。巣石片は、チャート、泥岩、砂岩の堆積岩類と凝灰岩、

流紋岩、ディサイトの火碎岩・火山岩および側成岩の花崗岩類が混在する。

A2：A1類の堆積岩に微量～少量の火山ガラスを含む。

A3：A1類の堆積岩に少量の植物碎片を含む。

B：岩石片を含む火碎岩・ディサイトが含まれない。他の特徴はA1類と同様である。

C：鉱物は石英と長石類および少量の雲母類が含まれる。巣石片は矽斑岩と漂砾岩、

ディサイトのみである。

2) 粒径組成

a：粗粒砂渺をモードとする。

b1：粗粒砂渺をモードとし、細粒シルトに第二のピークがある。

b2：粗粒砂渺をモードとし、細粒シルトに第三のピークがある。

c1：中粒砂渺をモードとする。

c2：細粒砂渺をモードとする。

d：粗粒砂渺をモードとする。

e：粗粒砂渺をモードとし、粗粒砂渺または細粒砂渺に第三のピークがある。

f：粗粒シルトをモードとするが、粗粒砂渺および細粒砂渺も同様頻度に多い。

表1 胎土分類結果

点数の多かった A1 類および A2 類の試料の粒径組成は分散した一方で、A3 類と C 類はそれぞれ独自の粒径組成を示し、また B 類についても細粒傾向を示す組成が読み取れた。この状況から推定されることとして、A1 類および A2 類には複数の産地のものが混在していることが考えられる。鉱物・岩石組成から推定される地域とは地質学的な意味での地域であり、その面積的な広がりは、人間の生業活動による地域性よりも広いことが多い。上述した A1 類および A2 類についての複数の産地とは、地質学的には同一地域内の複数の産地のことと指している。すなわち、粒径組成は、より詳細な産地の特定の手がかりとなる可能性を包含していると言える。

引用文献

- 市原 実・吉川周作・三田村宗樹・水野清秀・林 隆夫,1991,12万5千分の1 大阪とその周辺地域の第四紀地質図.アーバンクボタ,30.
- 近畿西部M T L研究グループ,1981,和泉山脈東部の和泉層群の層序と構造.
地球科学,35,312-320.
- 久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本 博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男,1993,
20万分の1地質図幅 福岡,地質調査所.
- 政岡邦夫,1982,近畿地方金剛山地およびその周辺の領家花崗岩類.地質学雑誌,88,483-497.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川 旭,1998,大阪東南部地域の地質.地域地質研究報告
(5万分の1図幅),地質調査所,113p.
- 宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭,2001,大阪東北部地域の地質.地域地質研究報告
(5万分の1図幅),地質調査所,130p.
- 日本の地質「中国地方」編集委員会,1987,日本の地質7 中国地方.共立出版,290p.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6 近畿地方.共立出版,297p.
- 日本の地質「九州地方」編集委員会,1992,日本の地質9 九州地方.共立出版,371p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1999,第5章自然科学的調査 庄田遺跡に関わる製塙土器の胎土
分析.財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第38集 庄田遺跡 都市計画道路
路茨木箕面丘陵線建設に伴う発掘調査.財団法人大阪府文化財調査研究センター,52-67.
- 山田直利・小井土由光・市川浩一郎・原山 智・田辺元祥・村上允英・吉田久昭・吉倉紳 一・
赤羽久忠,1979,泉南層群-領家帶南部における後期中生代酸性火山作用-
地質学論 集,17,195-208.
- 山口地学会,1995,新編山口県地質図(1:150,000).

第2節 花粉・珪藻分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、古墳時代後期（6世紀）、奈良時代（7～8世紀）、平安時代前半（9世紀）、中世の古環境に関する情報を得ることを目的として、各時期の遺構埋土について珪藻・花粉分析を実施した（図1）。なお、本報告では、紙面の都合の関係で方法・結果の一部を割愛してある。

1 遺構埋土の珪藻群集

調査を実施した遺構埋土の層相は、いずれも人為的に擾乱された堆積物・土壤からなる。

珪藻化石は溝27直上の旧耕作土層と中世の溝174埋土b層で多産したが、それ以外からはほとんど産出しなかった。この原因は不明であるが化石の保存状態をみる限り、堆積時・後に分解消失している可能性がある。

溝27直上の旧耕作土層と溝174埋土b層の珪藻群集は、流水生種の産状が多少異なるものの、概ね類似する（図1）。中～下流性河川指標種を含む流水性種、好汚濁性種を含む流水不定性種、それに沼沢湿地付着生種群を含む止水性種からなる。このほか、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の *Diadesmis confervacea* が多産する。本種は陸域以外では、広温性種で温水を好み、有機汚濁の進んだ浅い水域に生育している。これらことから、各堆積物は、水温が高くなる時期を挟在する、水深の浅い、塩類が集積しやすい沼沢

湿地のような水域環境

で形成されたことが推定される。

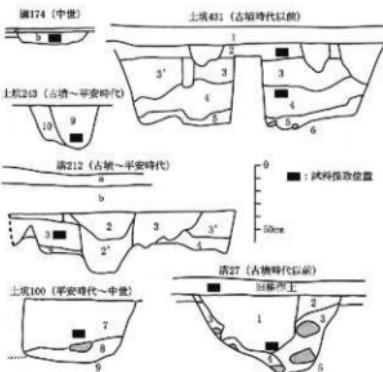


図1 分析試料採取位置

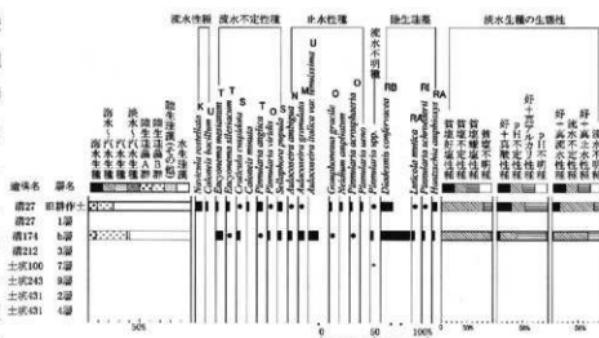


図2 硅藻分析結果

2 古植生 (図版 35・36)

花粉化石は、溝 27 埋土直上の旧耕作土から産出したが、それ以外では産出しなかった。僅かに産出した化石の保存状態が悪く、風化に対する耐性の高いシダ類胞子が目立つことから、堆積時後に分解・消失しているものと思われる。

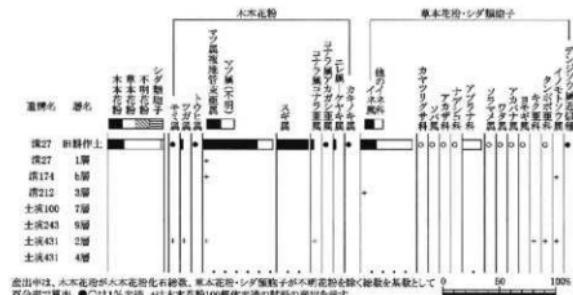


図3 花粉分析結果

溝 27 埋土直上の旧耕作土では草本花粉が卓越することから、近辺には草地が拡がっていたことが推定される。栽培のために渡來した植物である、イネ、ソバ、ワタの花粉が認められ、これらが当時の栽培種であったことが推定される。また、多産したアブラナ科も、藤田ほか (1991) の指摘にあるようにアブラナ栽培に由来する可能性がある。このように調査区近辺は耕作地が拡がっており、背後の山地斜面などに人为的擾乱が及んでマツ属からなる二次林が存在したことが推定される。この傾向は狹山池の 18 ~ 19 世紀頃の花粉分析結果 (松下・金子, 1999) と類似する。

なお、今回の分析では、残念ながら古代の古環境を考える情報を得ることができなかった。本遺跡周辺の石川左岸の中位段丘上に位置する高向遺跡における奈良時代~中世の花粉分析結果 (パリノ・サーヴェイ, 1997) や、二上山西麓に位置する楠ノ木石切場跡の 6 世紀から 12 世紀頃の古植生情報 (金原・金原, 1998) などから類推すると、調査区周辺の植生は、中世後半でもシイ・カシ類などの常緑広葉樹林を基調としていたことが推測される。同時期の河内平野およびその周縁台地・扇状地などでは、マツ二次林が分布を括げており、地域的な植生が異なっていた可能性がある。今後調査地点周辺での古植生情報の蓄積をもって検討していきたい課題である。

引用文献

藤田 憲司・古谷 正和・渡辺 正巳, 1991, 大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について, 日本国文化財科学会第8回大会研究発表要旨集, 33-34.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997, 第3章 高向遺跡の古環境について, 河内長野市遺跡調査会報 XVII 高向遺跡, 河内長野市遺跡調査会 15-27.

金原 正明・金原 正子, 1998,b, 花粉分析・種実分析, (財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第37集, 南河内郡太子町所在 楠ノ木石切場跡 - 南版奈道路建設に伴う発掘調査報告書 - 二上山西麓における凝灰岩石切場跡の調査, (財) 大阪府文化財センター, 27-33.

松下 まり子・金子 雅一, 1999, 狹山池堆積物から検出されたワタ花粉, 植生史研究 6, 2, 79-83.

第6章 まとめ

調査成果

大阪府南河内郡河南町山城に所在する「山城新池」において、府営ため池等整備事業を平成18年度から平成20年度にかけて実施した。調査面積は1210m²以上を測る。調査の結果、古墳時代から平安時代末頃の集落跡を確認した。また、山城廃寺における土地利用や集落・建物群の変遷をうかがうことができた。主な成果は次のとおりである。

- ① 古墳時代以前の遺構として、自然溝や不定形な落ち込みが多く見られたことから、旧地形が起伏に富んでいたものと考えられる。
- ② 古墳時代から平安時代末頃までの集落遺構と遺物を検出した。建物群は主軸方向を描えるなど概ねⅥ期の建物群が確認することが出来た。建物群の全盛期は飛鳥・奈良時代に相当する。なかでもこの時期の正方位を意識した大型方形状遺構(柱穴)列は、一般的の建物とは異なる大型建物群で山城廃寺に関連する施設や建物、回廊など、あるいは有力氏族の大型建物なるものと想定される。
- ③ 土器埋納遺構として柱穴や柱穴内に人頭大石を入れるなど、一般的な建物とは異なる仕様が見られた。主に、柱穴内に土師器皿や杯と共に凝灰岩の石片を入れたりするものが幾つか見られた。地鎮などの祭祀行事が想定される。
- ④ 飛鳥・奈良時代の土坑・溝内から製塩土器片が多数出土した。大阪湾南岸で生産されたもののほかに、内面に布目压痕を持つ「六連式土器」と称される筑紫・北九州で生産された製塩土器も含まれていた。河内の交通の要所であるこの地に交易品の塩が多く流通していたことがうかがえる。
- ⑤ 奈良時代から平安時代頃には、炭化物や灰を伴う焼土坑や建物柱穴などが見られた。一般的な住居に相当するものではなく、火を伴う工房や作業場である可能性がうかがえる。焼土坑内からは焼土塊や炭化物、灰などと共にふいご羽口片が出土した。
- ⑥ 平安時代末頃の集落が廃絶すると、この地はしばらくの間後背地となっていたと想定される。中世・近世代に耕作地として利用されるようになり、現在に至るようである。
- ⑦ 山城新池は明治29年および昭和26年に作られた人造池である。今回、池の堤体を造った際のハガネ部が確認され、堤体の構造を知る手がかりを得ることができた。また、堤体盛土に池中の掘削土を積み上げていることから、堤体盛土内から多くの遺物が検出された。おそらく、池の中央部まで、掘立柱建物や溝などの遺構が広がっていたものと推測される。
- ⑧ これまでに採集された古瓦、発見された礎石、今回までの既往の調査で出土した弥生土器など、これまで個別に紹介してきた遺物をまとめて紹介した。山城廃寺の遺跡の時代観や特異性がうかがえた。
- ⑨ 古代の寺院である「山城廃寺」の推定寺域範囲の状況と、今後の発掘調査成果への期待。

今回検出した遺構・遺物から、古墳時代から平安時代末頃に存続した集落跡になることが判った。大型の方形柱穴を持つ建物柱列は、降幡神社周辺に在ったとされる山城廃寺にかかる施設や建物、回廊などの可能性がうかがえる。今回の発掘調査範囲は、極めて狭く掘立柱建物の規模などを明確にすることはできなかった。今後、周辺の発掘調査によりこの地域の歴史がより一層解明されるものと期待したい。

発掘調査の成果と現場公開（第47図、図版30）

調査期間中の平成20年2月25日、南河内農と緑の総合事務所と共同で、地元河南町立石川小学校の4年生の児童16名と先生や職員を対象に、「農空間なっとく出張授業」を実施した。本府が取り組んでいるため池等の整備事業の必然性や地元の文化財について学び、その大切さを理解してもらうことを目的としている。当日は、山城廃寺発掘現場にてため池改修の作業見学を行った後、地域の埋蔵文化財についての紹介と山城廃寺で出土した遺物の取り上げ作業、遺物の接合、測量機械のあつかいなどの作業体験をグループ単位で実習した。体験実習を通して児童達が遺跡や文化に触れていくことの大切さを感じるとともに、児童の生き生きとした表情や行動を目の当たりにし、また素直な疑問に対して実物を見せながら答えるなど授業をする私達もが充実していることに気づいた。これからこのような現場体験や現場公開の場を多く設け、現場の状況を大阪府のホームページに載せるなど、発掘調査の成果を速報で公表し、PRすることも必要であると思った。発掘の成果をもっと活用していくことが出来ればと感じた。



第47図 大阪府HP掲載記事

参考文献

- ・上田暁ほか「山城廃寺(一須賀廃寺)出土古瓦」『大阪府文化財調査速報』第36号 節・香・仙 大阪府教育委員会文化財係
編譜 1982
- ・藤澤一夫「河内飛鳥の古文化～特に河南町域について～」第3回近つ飛鳥出土記の丘歴史講演会レジュメ
「近づ飛鳥と仏教文化」河南町・河南町教育委員会 1990・2・25
- ・大阪府立近つ飛鳥博物館「今來才伎一古墳・飛鳥の渡来人一」平成16年度秋季特別展展示図録 2004
- ・岸 俊男「山代忌寸真作と較屋忌寸秋庭—墓誌の史料の一考察—」『日本古代論帳の研究』培養房 1973
- ・上林史郎「須賀古墳群三題」『官報91』大阪府立近つ飛鳥博物館 2005
- ・河南町役場「河南町誌」昭和55年
- ・富田林市役所「富田林市史」第1巻 昭和60年
- ・大阪府教育委員会「加納・平石古墳群発掘調査概要」2002
- ・大阪府教育委員会「加納・平石古墳群」2009
- ・野村豈「河内石川村学術調査報告書(近世村落資料)」昭和27年 大阪府南河内郡石川村役場
- ・柴原永達男「河内国石川郡における郷の配置」「新堂廃寺」2001 大阪府教育委員会
- ・大阪府教育委員会「東山遺跡」大阪府文化財調査報告書 昭和54年
- ・大阪府教育委員会「大阪府文化財分布図」1977・1986・1991・2001
- ・大阪府教育委員会「大阪府文化財地名表」1977・1990・1997・2001
- ・市本芳二「山城廃寺出土瓦」『大阪府立近つ飛鳥博物館』報12 大阪府立近つ飛鳥博物館 2008
- ・小林義孝「吉志遺跡・寛弘寺古墳群・山城廃寺その他一岡山正雄氏採集考古資料一」「寛弘寺遺跡発掘調査概要・XIII」1994
- ・大阪府教育委員会「鏡織織井廢寺発掘調査概要」1985
- ・奈良國立文化財研究所埋蔵文化財センター「埋蔵文化財ニュース40『飛鳥白鳳寺院関係文献目録』」1983
- ・大阪府教育委員会「附章 梶河泉の古代寺院」「新堂廃寺」2001
- ・藤澤一太「梶河泉出土古瓦様式分類の試企」「考古学評論3 仏教考古学論叢」東京考古学会 1941
- ・鳥崎久恵「梶河泉古代寺院文献目録」第1回 梶河泉古代寺院フォーラム「梶河泉の古代寺院とその周辺」
東大阪市教育委員会・梶河泉古代寺院研究会・梶河泉文庫 1997
- ・上田暁「飛鳥時代の河内国出土軒瓦」「河内古代寺院巡礼」大阪府立近つ飛鳥博物館 2007
- ・河南町教育委員会「東山遺跡発掘調査報告書」1998
- ・一須賀古墳群発掘調査委員会「梶山遺跡ほか発掘調査報告書」1996
- ・大阪府教育委員会「山城廃寺」「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10」2006
- ・大阪府教育委員会「山城廃寺」「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報11」2007
- ・大阪府教育委員会「山城廃寺」「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報12」2008
- ・横山 洋「律令制期の製塙土器と塙の流れ—梶河泉出土資料を中心に—」「ヒストリア」第141号 大阪歴史学会 1993
- ・横山 洋「土器製塙の展開」「季刊考古学」第100号 雄山閣 2007
- ・大阪府文化財調査研究センター「小島北礎遺跡」2000
- ・大阪文化財センター「田山遺跡」1983
- ・大阪府埋蔵文化財協会「山田海岸遺跡」1989
- ・大阪府教育委員会「岬町遺跡群発掘調査概要一小島東遺跡一」1977
- ・泉佐野市教育委員会「塙遺跡90-4区の湖底」1993
- ・大阪府教育委員会「柿ヶ坪・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要」1995
- ・大阪府文化財調査研究センター「駒ヶ谷遺跡」1999
- ・山中 章「古代地方官衙遺跡の研究」培養房 1994
- ・山地幸久「河内飛鳥と渡来系氏族「古代を考える 河内飛鳥」古川弘文館 1989

写 真 図 版



1区・2区・3区全景（航空写真）



a. 山城新池北堤調査地点



b. 調査区 1（北壁断面）



c. 調査区 2（西壁断面）



d. 調査区 3（北壁断面）



e. 調査区 4（全景）



f. 調査区 4 柱穴検出状況



g. 調査区 4（西壁断面）

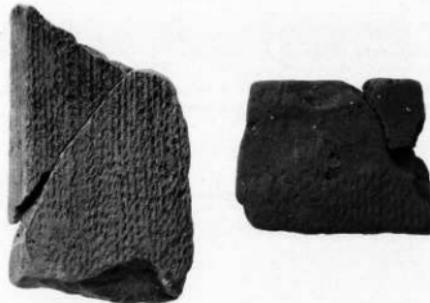


h. 調査区 4（東壁断面）

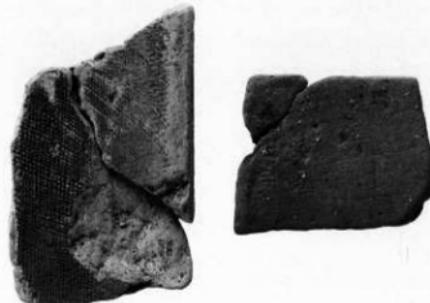
a. サヌカイト製
翼状剥片石核

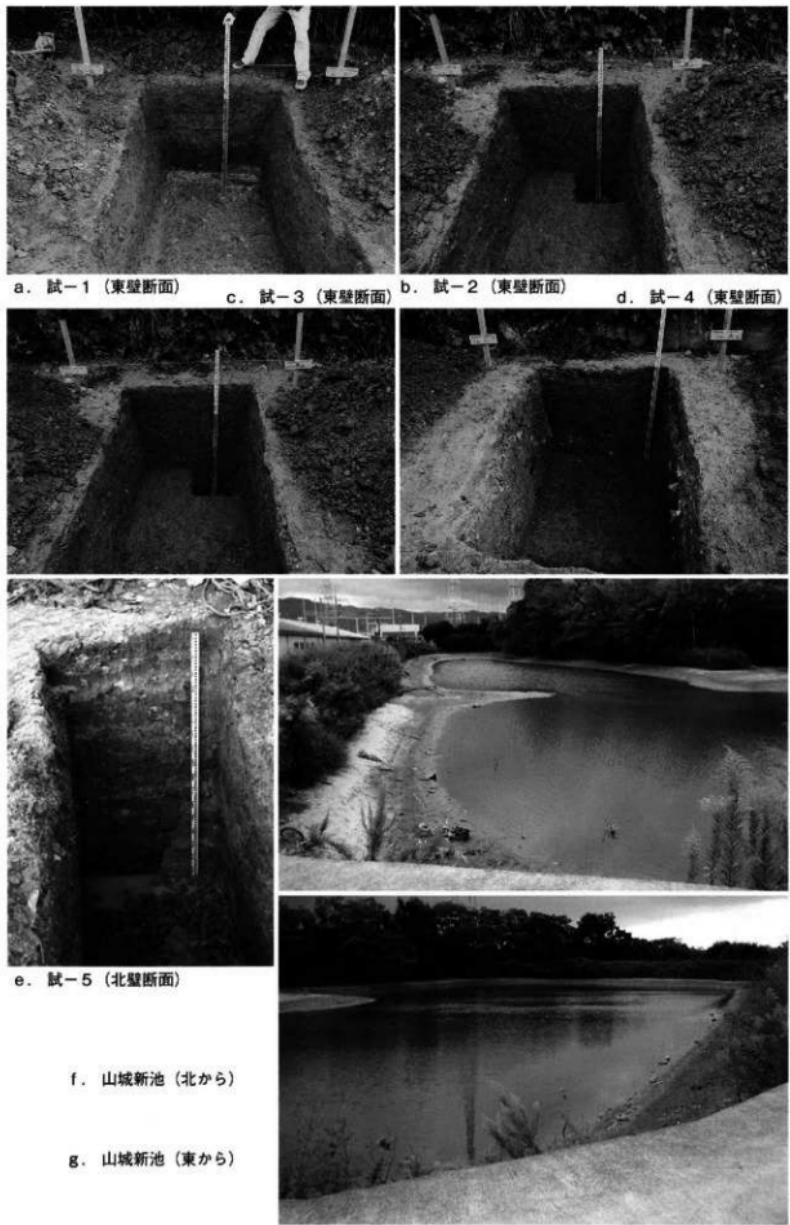


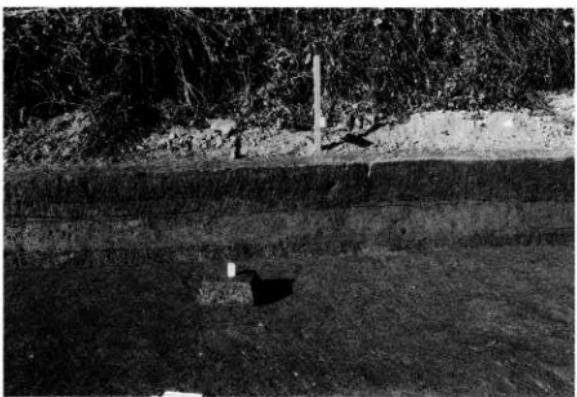
b. 平瓦（凸面）



c. 平瓦（凹面）



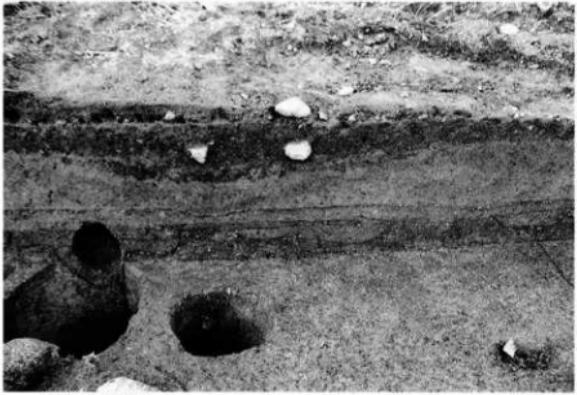




a. 1区 西壁断面



b. 2区 北壁断面



c. 3区 北壁断面



a. 第2面全景（北から）



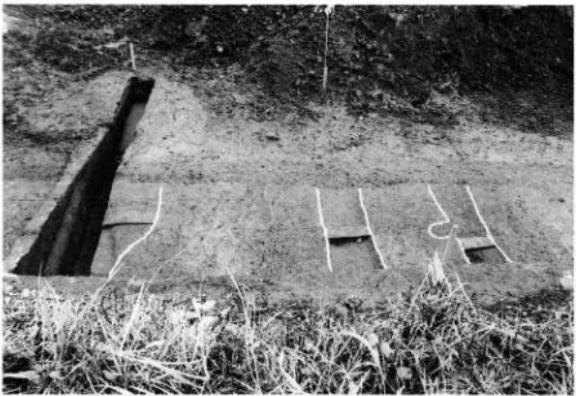
b. 第2面柱穴列（南から）



c. P 4 遺物出土状況



d. P39 遺物出土状況



a. 1区 第1面溝（西から）



b. 2区 第2面柱穴列（北から）



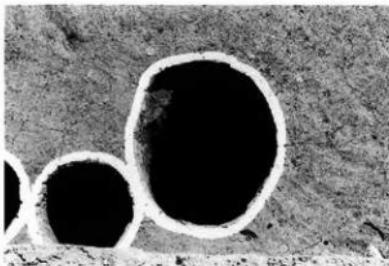
c. 2区 第2面柱穴列（西から）



a. 第2面全景（東から）



b. 第3面全景（東から）



c. P135遺物出土状況（北から）



d. P182検出状況（西から）



a. 第1面溝検出状況（東から）



b. 第1面溝検出状況（北から）



c. 第2面全景（西から）



d. 第2面全景（東から）



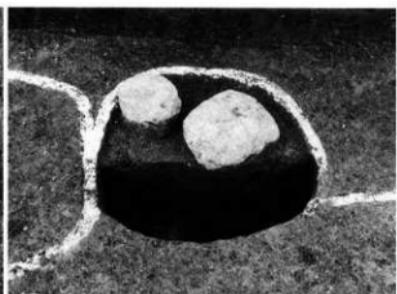
a. 第2面航空写真(西)



b. 第2面航空写真(東)



c. P392検出状況



d. P389検出状況



e. P251検出状況



f. 北壁断面(P445)



a. 第3面全景（東から）



b. P281検出状況（南から）



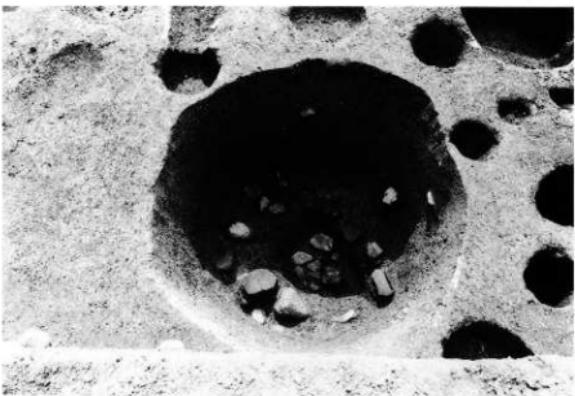
c. 溝467検出状況（東から）



d. 溝467内遺物出土状況



e. 溝465断面（西から）



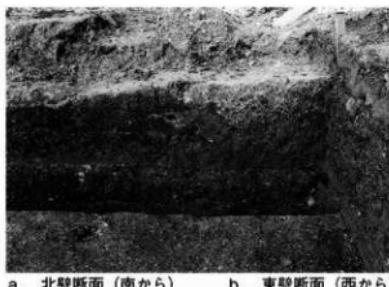
a. 井戸477検出状況（北から）



b. 井戸507検出状況（南から）



c. 溝519検出状況（西から）



a. 北壁断面（南から）



b. 東壁断面（西から）



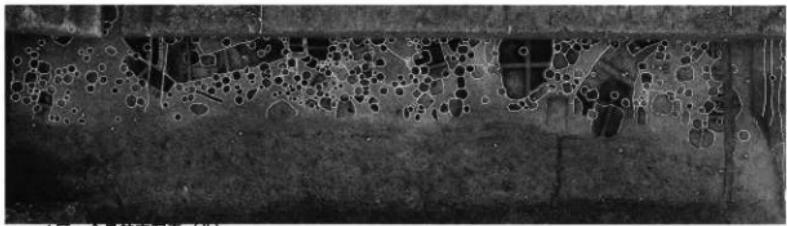
c. 第1面溝174検出状況（西から）



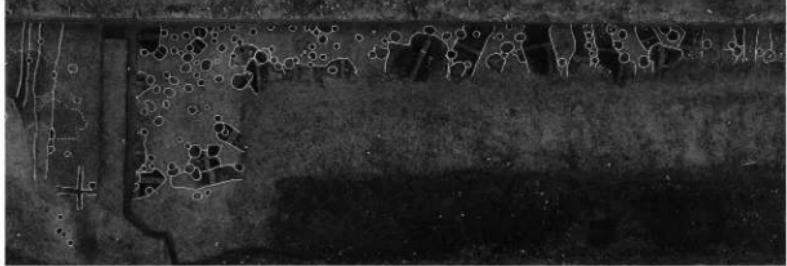
d. 第2面張出部全景（東から）



e. 第2面全景（南から）



a. 4区 全景航空写真(北)

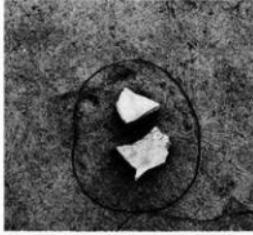


b. 4区 全景航空写真(南)

c. 第3面造構検出状況



d. P437遺物出土状況



e. 調査区中央部ハガネ部断面



f. 張出部ハガネ部断面

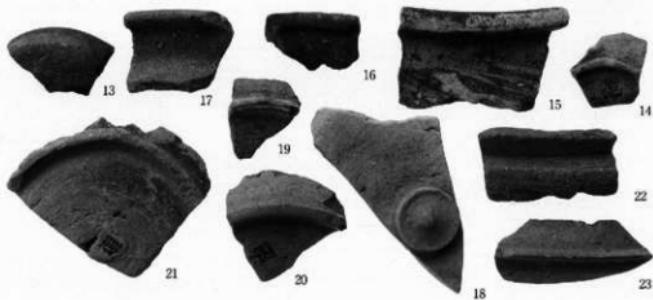
1区出土遺物



a. P4、P39



b. P39

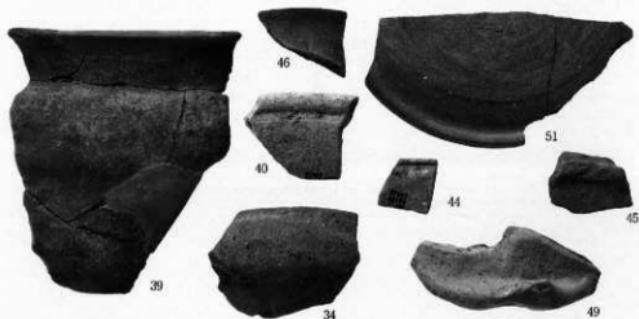


c. 包含層

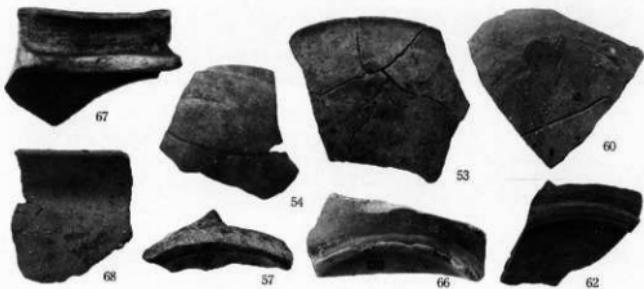
2区出土遺物



a. P135



b. 柱穴、溝ほか



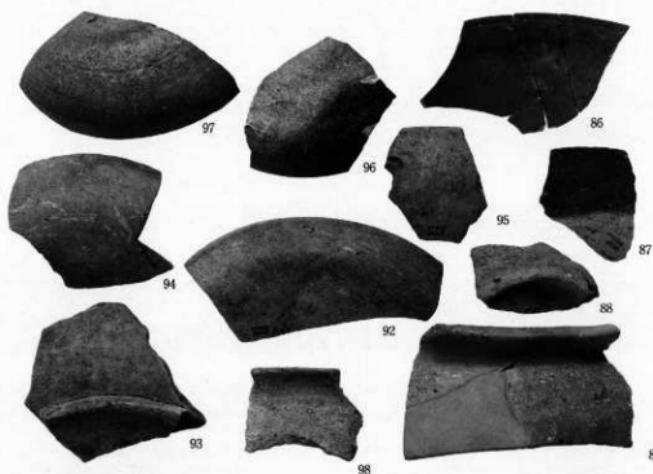
d. 包含層

3区出土遺物

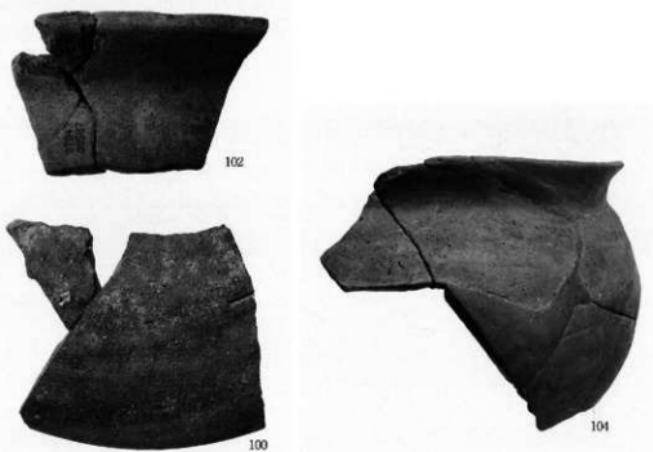


溝、柱穴、井戸ほか

3区出土遺物



a. 建物柱穴



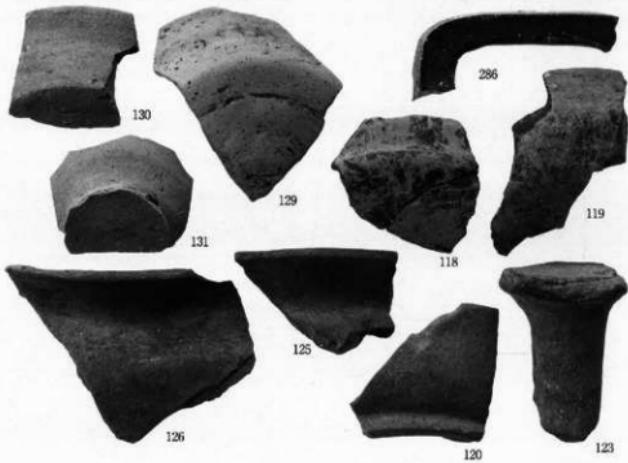
b. 井戸477

c. 井戸477

3区出土遺物



a. 满467、満465



b. 包含層

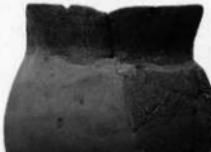
4区出土遺物



a. P175



b. 包含層

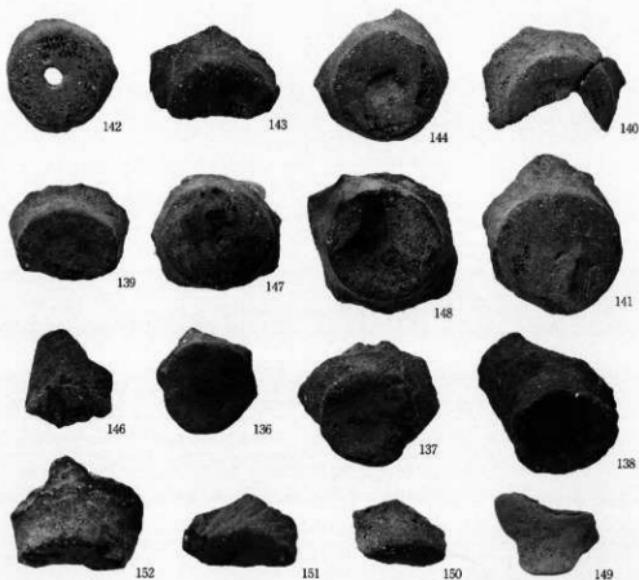


c. 柱穴、溝、包含層

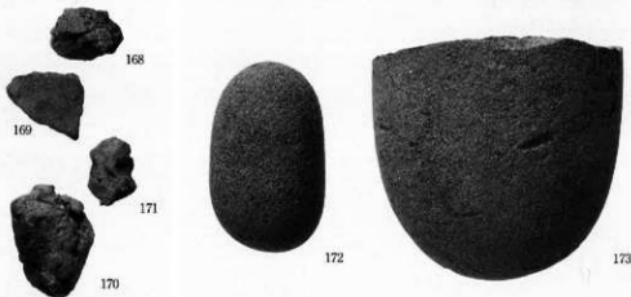


d. 柱穴、包含層

出土遺物（甕底部・他）



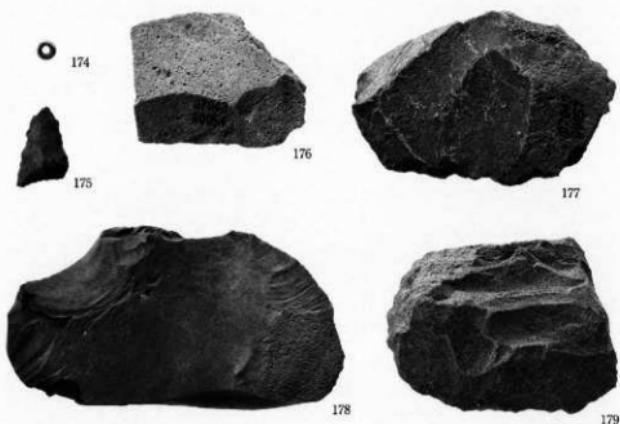
a. 弥生土器甕底部



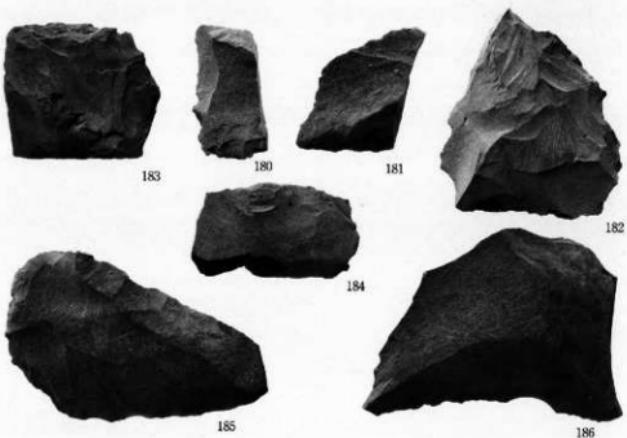
b. ふいご羽口ほか

c. 石製品

出土遺物(石製品・他)

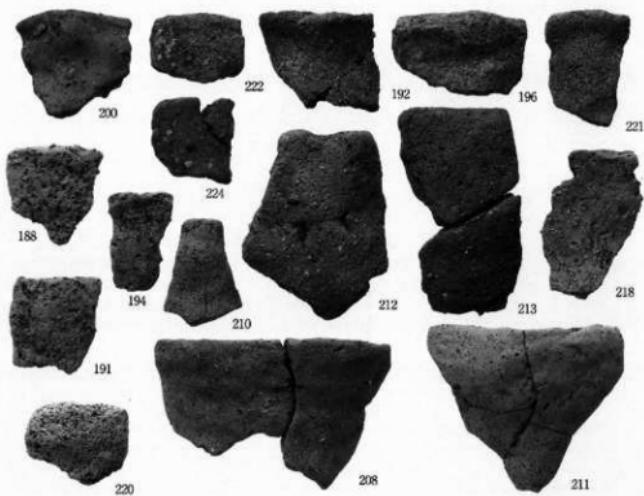


a. 白玉、石鎌、刃器、剥片



b. サヌカイト製石器、刃器、剥片

出土遺物（製塩土器・他）



a. 製塩土器



b. 壺

c. 水差し型土器

出土遺物（弥生土器）



a. 壺



b. 高杯、鉢ほか

瓦



a. 三嶋家所藏瓦（軒丸瓦）



b. 三嶋家所藏瓦（軒丸瓦）

瓦



272



273



269



271

a. 三嶋家所藏瓦（軒平瓦）



268



270



262



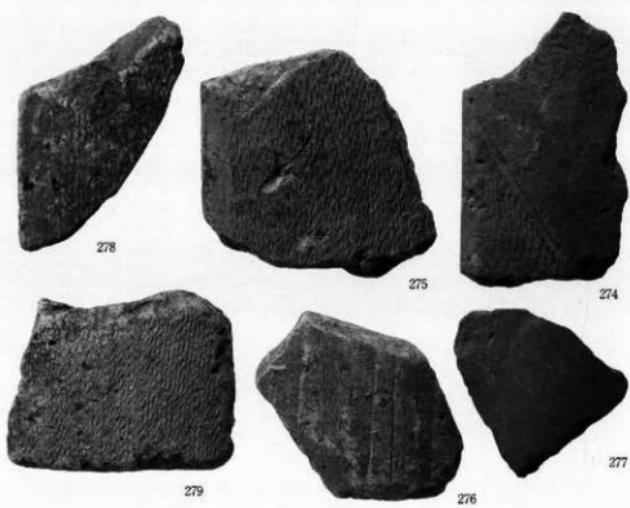
263

b. 三嶋家所藏瓦（軒平瓦）

瓦

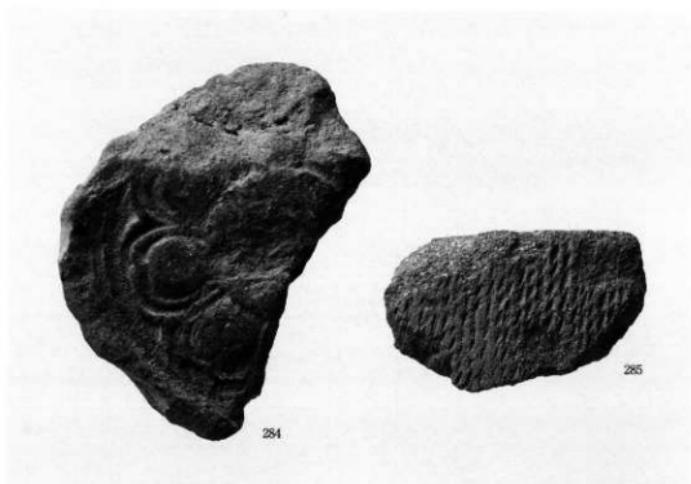


a. 三嶋家所藏瓦 (軒丸瓦)

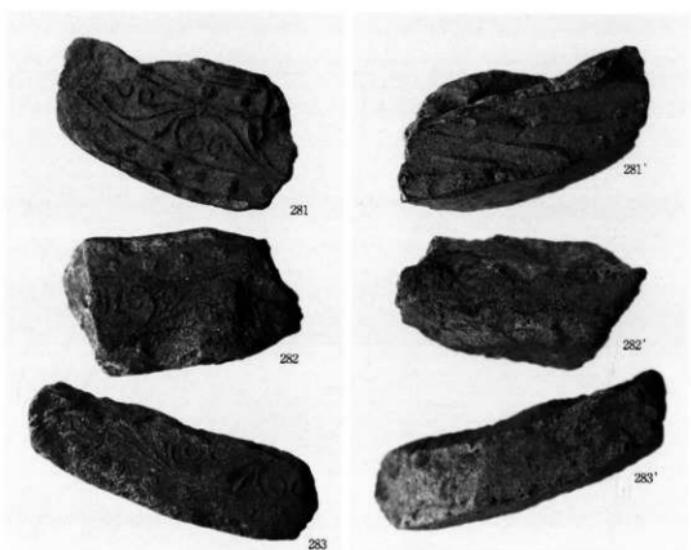


b. 三嶋家所藏瓦 (平・丸瓦)

瓦

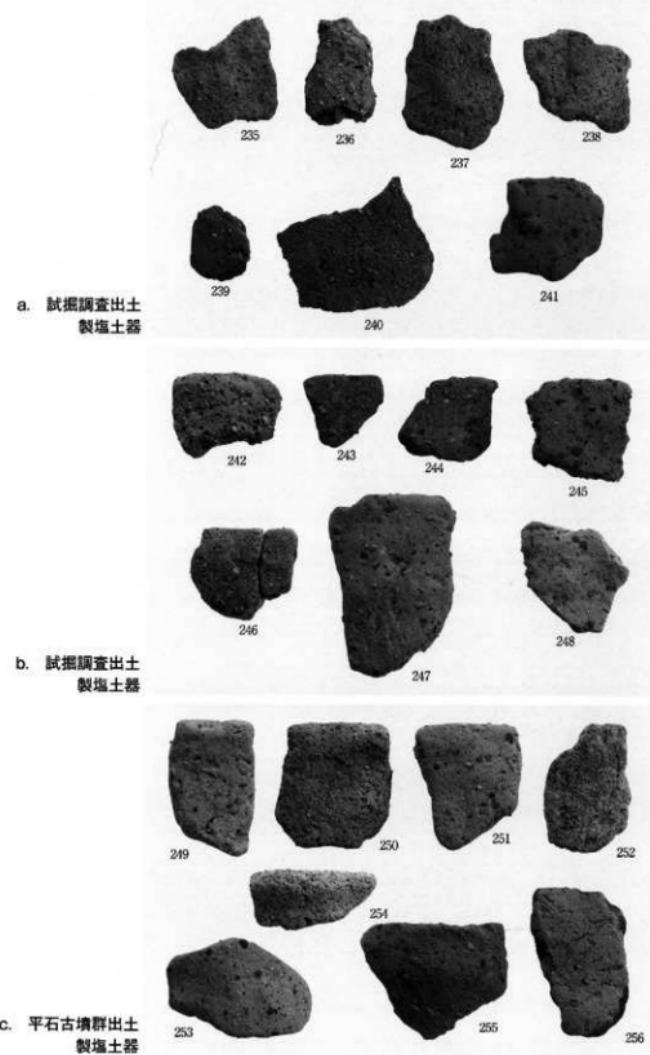


a. 近つ飛鳥博物館所蔵瓦



b. 岡田家所蔵瓦 (瓦当面)

c. 岡田家所蔵瓦 (裏面)





a. 降幡神社 (遠景)



b. 础石2 (神社近接地)



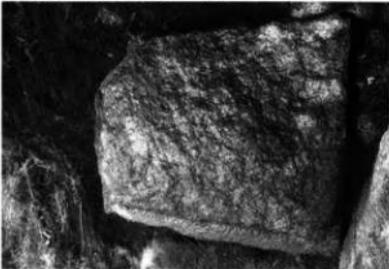
c. 础石2と周辺の石



d. 础石1 (ぶくぶくドーム内)



e. 础石1側面



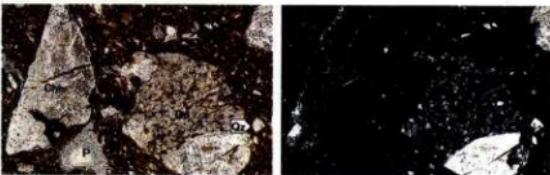
f. 板状石 (ぶくぶくドーム内)



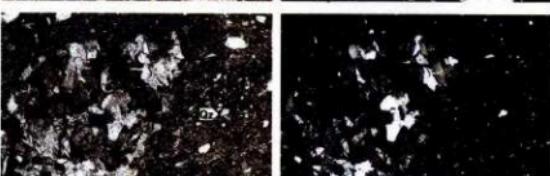
g. 础石1と板状石



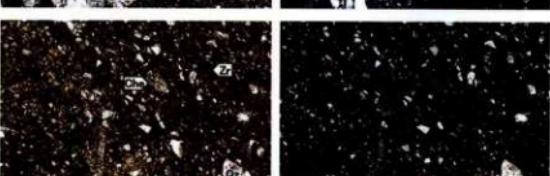
1. 山城庵寺 資料1



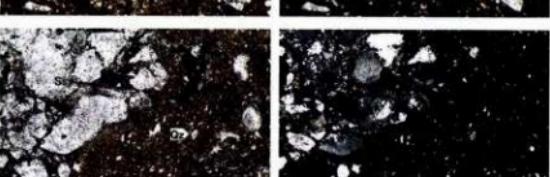
2. 山城庵寺 資料2



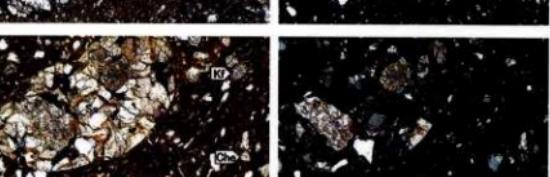
3. 山城庵寺 資料3



4. 山城庵寺 資料4



5. 山城庵寺 資料5



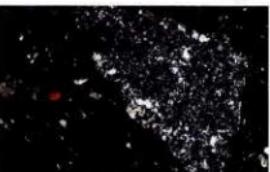
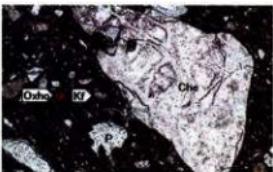
6. 山城庵寺 資料6



0.5mm

Qz:石英, Kf:カリ長石, Ho:角閃石, Zr:ジルコン, Che:チャート, Ss:砂岩, Md:泥岩, Tf:凝灰岩,
P-Qz:多結晶石英, Qp:石英斑岩, Slt:シルト岩, P:孔隙。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

7. 山城庵寺 資料7



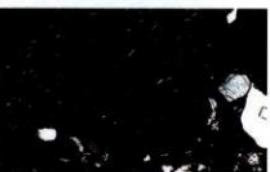
8. 山城庵寺 資料8



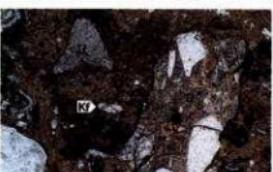
9. 山城庵寺 資料9



10. 山城庵寺 資料10



11. 山城庵寺 資料11



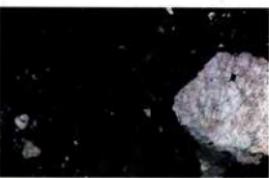
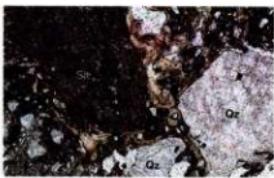
12. 山城庵寺 資料12



Qz:石英, Kf:カリ長石, Oxo:酸化角閃石, Che:チャート, Ss:砂岩, Md:泥岩, Tf:凝灰岩, An:安山岩,
P:孔隙。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

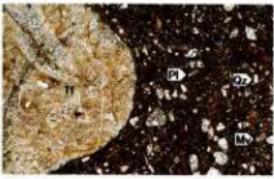
13. 山城庵寺 資料13



14. 山城庵寺 資料14



15. 平石古墳群 資料1



16. 平石古墳群 資料2



17. 平石古墳群 資料3



18. 平石古墳群 資料4

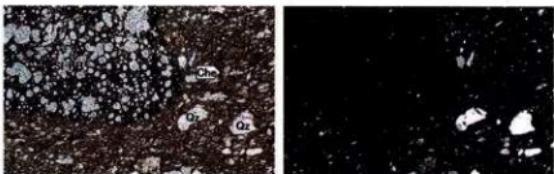
0.5mm



Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Mv:白雲母, Che:チャート, Ss:砂岩, Tf:凝灰岩,
P—Qz:多結晶石英, Vg:火山ガラス, Slt:シルト岩。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

19. 平石古墳群 資料5



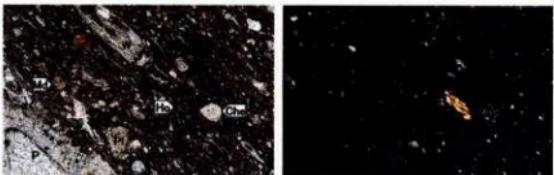
20. 平石古墳群 資料6



21. 平石古墳群 資料7



22. 平石古墳群 資料8

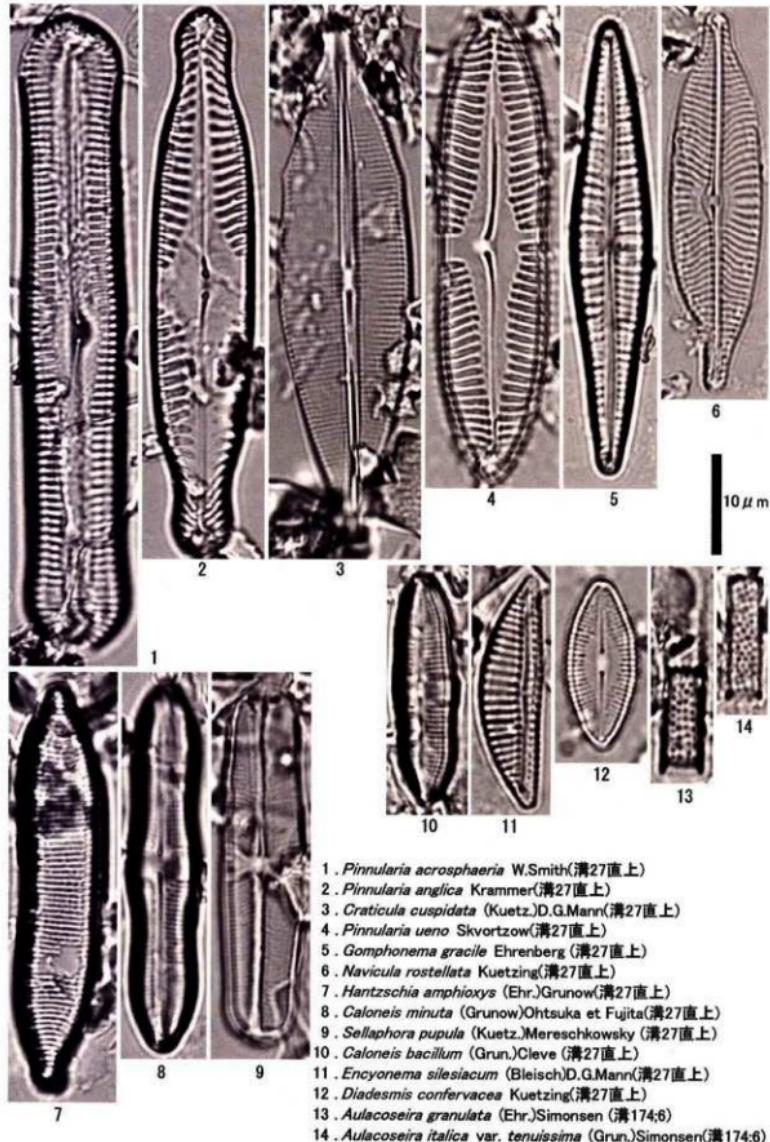


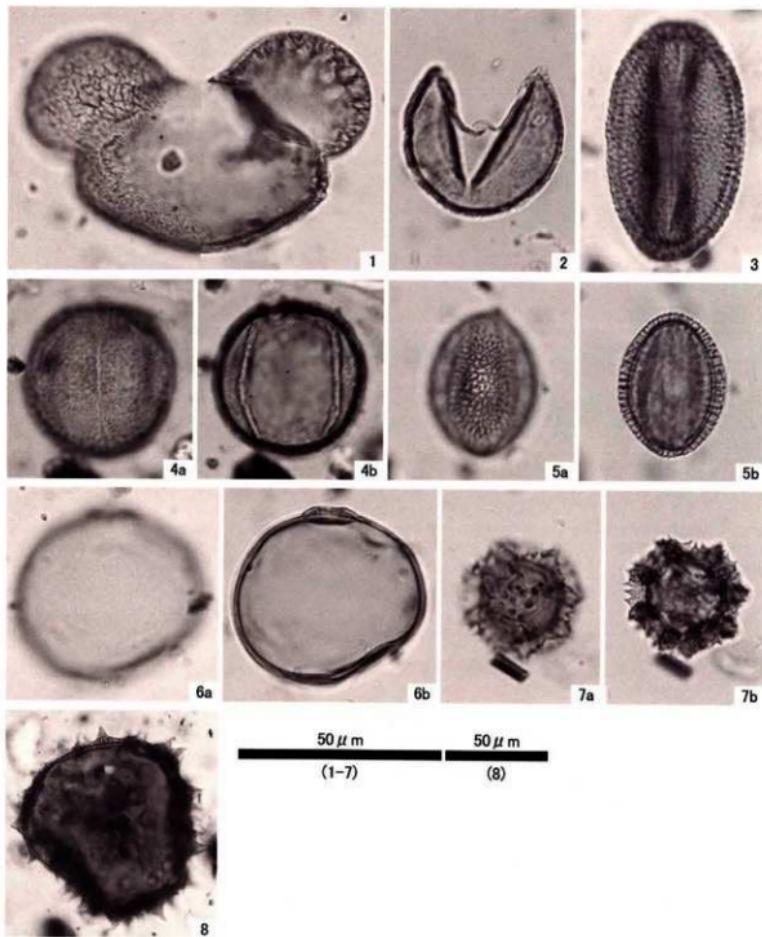
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Che:チャート. Ss:砂岩. Md:泥岩. Gr:花崗岩. Slt:シルト岩.

Sl+B:発泡状シルト岩. W:植物片. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。





1. マツ属(溝27直上)
3. ソバ属(溝27直上)
5. アブラナ科(溝27直上)
7. タンボボ亞科(溝27直上)

2. スギ属(溝27直上)
4. コナラ亜属(溝27直上)
6. イネ属(溝27直上)
8. ワタ属(溝27直上)

報告書抄録

山城廃寺発掘調査概要

—府営ため池等整備事業「山城新池地区」に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8751

大阪市中央区大手前2丁目

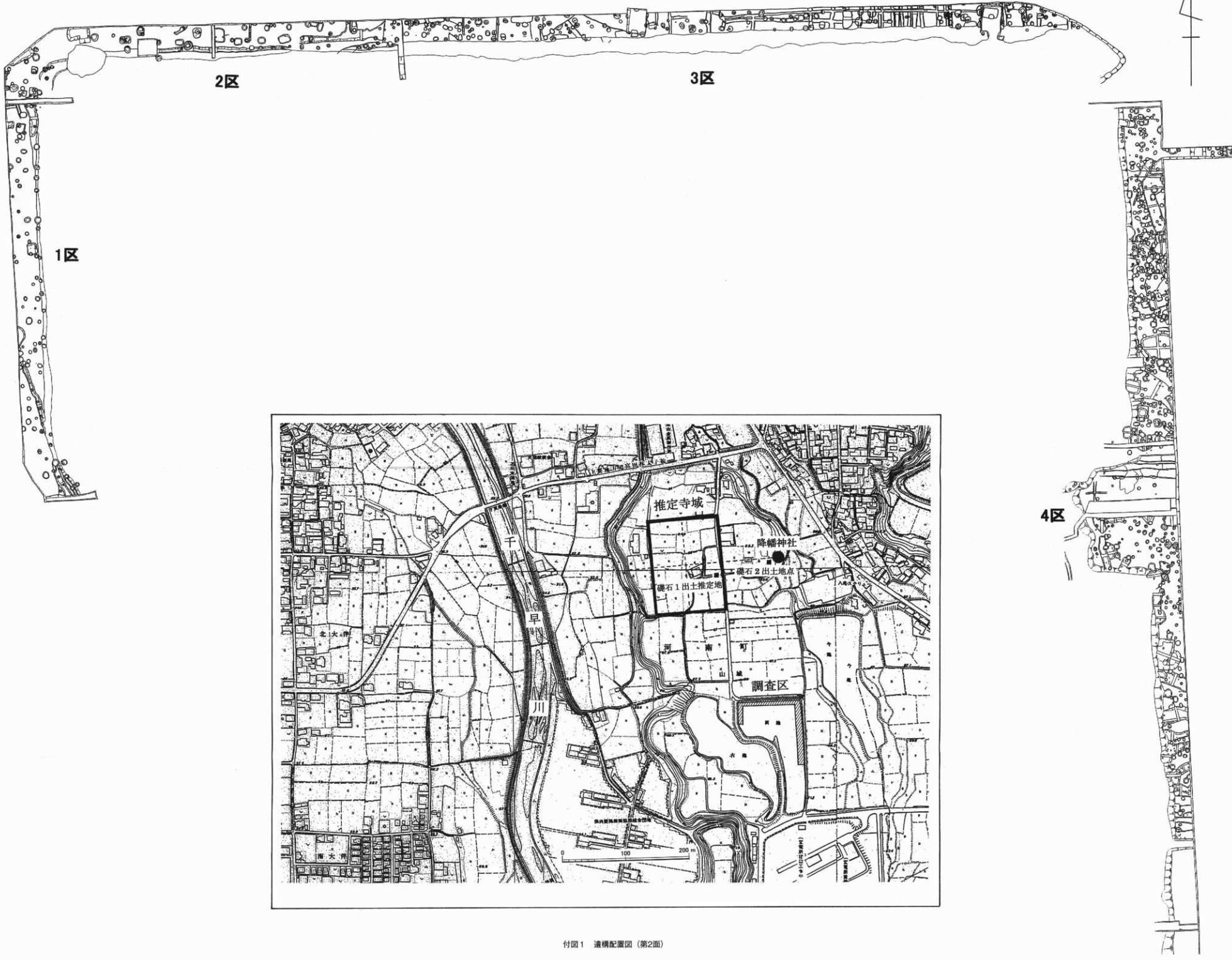
TEL 06-6941-0351代

発 行 日 平成22年3月31日

印 刷 横近畿印刷センター

〒582-0001

柏原市本郷5丁目7-8



付図1 遺構配置図(第2面)

